
A Life Is Mine !

久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A Life Is Mine !

【Nコード】

N2964J

【作者名】

久

【あらすじ】

美人と女の子が大好きな女子大生「あい」は、トイレのドアを開けた瞬間違う星に居た。

中世ヨーロッパのような文明。剣を使った戦争を繰り返すその星に不似合いな、女子大生あいと家出中の次期魔王が繰り広げるコメディ。

そのうちラブになる予定。

のんびり更新です。

人物・舞台設定（前書き）

増え次第追加していきます。

話数毎にしてありますので、ネタバレご注意ください。

【03. 28 追加】

人物・舞台設定

【1話登場人物】

■小松あい（19） 165？

主人公。女子大一年生。大学内にある寮住まい。

女の子大好きなおっさん思考の残念な美少女。女の子は皆可愛いが、美女美少女に弱い。

肩より長めのふわふわ癖っ毛。ばっちり二重の栗色の大きな目。アルコールに滅法弱い。

両親・兄二人・弟一人の六人家族。

■木村香奈恵（日本名）・スターチス（本名） 160？

あいの大学寮管理人。外見は三十代前半の和風美女。グラジオラス星人。

（三百年程の長寿。姿かたち、性別は好きに変える事が出来る。生殖能力が低いため、優秀な種を見付けて子孫を残す事が使命）化学に特化した能力を持ち、SF的な機器を多数開発している。（小型翻訳機・ワープ装置・衛星間通信装置など）

ラグラスの祖父に入れ込み、その知識と力を貸して建国を手伝ったが、あっさり振られる。

■ラグラス・アベル（18） 185？

少し長めのプラチナブロンドに真っ青な双眸。美人。

ロベリア国第一王位継承者だが、国を継ぐのが嫌で家出中。

甘いぼっちゃんの思考がある。

あいに求婚してあっさり振られた。

■デンファレ（以下、おっちゃん）（56）

変わり者の研究者。木村の協力者。

研究内容は生物学・星など。

バキア国第二王位継承者。

ラグラスが転がり込んで来て面倒だと思っている。

■セージ（72）

おっちゃんの身の回りの世話・屋敷を取り仕切るメイド。
年の割にしゃんとした老婆。

■アタム（メイドちゃん）（16）

おっちゃんに仕えるメイド。掃除洗濯・雑用を任されている。
ラグラスに恋心を抱いていた。

【1話時点での舞台設定】

■ビオラ

ラグラスが住む星。木村とおっちゃんが便宜上で名付けた
地球とは異なる銀河系に存在する

十五の国が存在し、それぞれが王制を敷いている

文明は中世ヨーロッパ程度

■ルピナス

現在ラグラスが家出して来ている国

肥沃な大地に温暖な風土、気質の国民性

中立国家

ルピナスを攻めると呪われるというジンクスから、他国からの侵略
は無い

■ロベリア

ラグラスの祖父が建国した

木村が与えた重火器を使用する軍事国家

■バキア

ルピナス山脈を越えた裾野

賢王と名高い国王が居るが老齡

おっちゃんは妻が他界した際に研究の為に城を出ており、一人娘の
セリヨウは王城に住んでいる

■ニゲラ

ルピナス山脈を越えた裾野にバキアの南側にある
河を挟み、海岸沿い西にロベリアが控えているため、常に神経をす
り減らしている

【2話登場人物】

■喜多川美奈きたがわ みな（19）

あいの親友。イケメン、特に美少年好き。

老舗料亭の孫娘。

小松家次男に憧れている。

■ギリア・村越恭一郎むらこし きょういちろう

木村の兄弟（二人兄弟）でグラジオラス星人。

普段は小柄な老人の姿。

あいの大学の理事や、有名銀行創始者で名と姿を変えて多数の事業
を行っている。

日本有数の財閥である村越グループの会長。

■花本幸司はなもと こうじ（33） 178cm

ギリアの秘書。ギリアと木村に振り回される苦勞人。

いい男の部類に入るのだけど、愛想一つ無い無機質な表情と態度の
せいで、女性にはモテない。

グラジオラスの事を知っている数少ない人間で、非常に有能。

■小松桂斗こまつ けいと（26） 180？

あいの兄。小松家次男。

大手IT系に勤めるシステムエンジニア。

母親似で色気のある男前。

格闘技好きでムエタイの足さばきをあいに伝授した。得意なのは空
手だが、大樹には敵わない。

飄々としていて頭の回転が速い。敵に回すと怖い男。家族に甘い。

■小松大樹こまつ だいき (27) 188? ※未登場

小松家長男。警察官。

学生空手チャンピオンになった事もあり、体育会系の無骨な印象。
男くさい男前。

あいの理想の男性。

■小松紘こまつ ひろ (18) 178? ※二話未登場

あいの弟。小松家三男。

今時のイケメンだが、趣味が乙女チックで中々彼女が出来ない。

あいの外見が彼女理想。

【3話登場人物】

■セルリア (15)

おっちゃんの屋敷に仕える少年。天使のような美少年。
セージの孫。

■セリヨウ (16)

あいが一目惚れした美少女。

ラグラスの婚約者であり、おっちゃんの娘（全く似ていない）。
祖父であるバキア国王からは溺愛されている。

性格はかなりキツイ。

■グロリオーサ (21)

ラグラスの姉。

あいが二度目の一目惚れをした絶世の美女。

■フィリカ (29)

イイギリ第二王位継承者。

グロリオーサの夫。

原色を基調とした衣服を好み、派手なアクセサリーも付けている。

性格は温厚。大柄で人好きする癒し系の外見。

【3話追加舞台設定】

■ イイギリ

ロベリア隣国

グロリオーサが嫁いだので友好的な関係を築いている
芸術に力を入れており、独特の文化を発展させている

1. 非現実な週末（前書き）

恋愛に発展するまで時間がかかります。
気長にお付き合い頂けると嬉しいです。

1. 非現実な週末

「え、あ、な？」

我ながら間の抜けた声を上げたと思う。

だが、この状況で私が出る事と言えば、意味不明な声を上げて半狂乱になるか、無言でうろたえるくらいしかない。

それならばどちらも、と、意味不明な声を上げてうろたえてみたのだ。

こんな事考えてるって事は余裕があるのかも知れない。うん、きっとそうだ。

目の前に広がるのはトイレのはずだった。扉を開けたままの状態で固まってしまった私はぎこちなく笑う。

薄暗い室内はレンガ造りのようで、ずらりと見慣れぬ器具が並んでいるし、嗅いだ事のない化学物質的な匂いが漂っている。

間違ってもトイレじゃない。

ここの住人らしき中年男性がぽかんとこちらを凝視している。

彼と視線を合わせたまま、私はへらりと笑って口を開いた。

「こんばんは。ここ、お手洗いじゃないですよ、うん。分かっています」

それでも口にせずにはいられなかったのだ。

小松あい、十九歳。

女子短大に入学した私は、今の今まで大学の敷地内にある寮に居た。敷地内に寮があるって便利なんだが、気が抜けまっくた寮生は若い女の子ではない。

講義ぎりぎりまで寝てたりすっぴんのままジャージで講義にでたりと、教師は中年男性ばかりで着飾る対象が居ない女子だけの空間は無法地帯そのものだったりする。

「木村さーん。借りてたDVD持ってきたよー」
「面白かったでしょー」

入寮から、たったの数日で仲良くなった管理人木村さん。
三十代前半に見える彼女は、その実四十代らしいのだが、本人は笑顔で何も答えてはくれない。人当たりのいい癒し系だが裏の顔がありそうでちょっと怖い。
背中まである艶やかな黒髪に、はっきりくっきりとした二重が印象的な和風美人だ。

「新しいお菓子買ったんだけど、一緒に食べない？」
「こんな時間に恐ろしい誘惑ですねえ」

新商品や限定物に弱い木村さんは、目新しい物を見付けては手を出してしまい試食を勧めてくる。せっかくだから一人で食べれば良いのと思うが、パッケージ裏の栄養成分表を睨みながらカロリーが怖いじゃないと言っていた。勿論、私も怖い。

後二時間もすれば日付が変わる時間帯にお菓子。しかもチョコレート菓子。

「遠慮します！って言いたいところだけど、CMで見て食べたいなって思ってたんですよそれ」

「じゃあ、お茶淹れるから入って入って」

にこにこ管理室に招き入れる木村さん。

お言葉に甘えてお邪魔することにした。

木村さんの部屋は私たち寮生のものより僅かに広いくらいだ。大きな違いと言えば、私たちの部屋には無い小さなキッチンがあるくらいか。

明日は土曜日でバイトも休みだ。世間話しに花が咲き、私が見逃したお笑い番組を見せてもらったりと、つつい長居をしてしまった。

「木村さーん！またシャワーおかしいの！助けてー！」

ノックもせずに飛び込んで来たのは同じ科で二つ隣の住人、戸津田だ。

確か、一昨日からシャワーの温度が安定しないとかで、空気が冷えてきたこの時季に水を浴びて風邪をひいたと言っていたなあ。

戸津田は濡れた頭にタオルを被り、慌てて着込んだらしいジャージ姿だ。風邪が酷くならなきやいいけど。

「またあ？昨日修理して貰ったのに、あの業者……」

木村さんは嘆息一つして腰を上げた。

工具箱を取り出しながら、眉を寄せてこちらを振り返る。

「ちょっと待っててね。それ見終わったらそのまま帰っても良いし」「んー待ってますよ」

につこりと笑って、じゃあ、すぐ戻るからねと言う彼女は何か可愛い。私の倍以上生きてるなんて信じられない程だ。

冷えた紅茶を飲み干すと、トイレに行きたくなった。

主が居ない時に勝手に拝借するのもあれだが、自分の部屋に戻るのには面倒である。何度か借りた事もあるし、そんな事で怒る木村さんではない。

「勝手にお借りしまーす」

木村さんは不在だが、律義に声にしてから腰を上げた。

私たち寮生の部屋はバス・トイレが一緒だが、流石に管理人室は別にしてある。いいなあ。

ドアノブを回した瞬間にキュインと機械音がした気がする。

はて。DVDの予約開始でもしたかな？

そのまま足を止めればよかったのだが、私は何の迷いもなくドアを開いた。

そして、冒頭の間抜け声である。

さて。

青いロボットがポケットから出すドアは、完成どころか開発しているという話すら聞いたことがない。振り返ってみれば、そこにあるのは柔らかいクリーム色で統一された木村さんの部屋ではなく、豆電球の光程度に照らされた煉瓦造りの薄暗い廊下が伸びている。

視線を戻すと、茫然としていたおっちゃんが、全くもって理解不能な言語で喚いていた。

英語？ いや、英語というよりはスペインとか？ あーいや、何というか、本当に何一つ聞き取れない。アマゾンの奥地かここは。

はた、と。

唐突に私は真実に行き当たった。

そうだ、夢なのだ！

どこからが夢なのか境界線が全く無かったような気がするが、D V
Dを見ながら眠ってしまったのだろう。
うん、きつとそうに違いない。

「えーと、それで、ここはどこでしょ？」

夢なら、この言語も理解出来るようになるに違いない。

首を傾げて見せれば、おっちゃんも同じように首を傾げて見せた。
丸い顔のふくふくした頬がぷるりと揺れた。何か可愛いじゃないか。

と思えたのはそこまでで、おっちゃんは再びぺらぺらと理解不能言
語を操りだした。

うーん。

とっても「ぱ」行が多い言葉だなあ。

暫く何かを訴えていたおっちゃんが、はっとして私の頭上に視線を
移動させた。

「アベル」

人の名前のような、と思った私は振り返った。

目の前に人の胸が見えて、その近さに思わず後ずさってから視線を
上へと移動させる。こんなに近くに居て気付かなかったなんて。

はっと息を飲んだ。

さらさらと流れる金髪に青い青い双眸。作り物かと言いたくなるよ
うなそれだけでも目を引くだろうに、それらの持ち主は、恐ろしい
くらいの美人、しかも男だった。

C G? この人。

肌はつるつるで凹凸なんてどこにもない。

鼻はすっと通って、嫌みのように高い。私に分ける！

綺麗な青を縁取るのは金に近い茶の長い睫毛。瞬きすればバサバサと音を立てるのではないかというくらいだ。

切れ長で涼しげな目元のくせにばっちりとしている。

唇は薄くて、きゅっと広角が上がっており、妙に艶っぽい。

標準よりちよつと長身の私が見上げる程の長身だが、がっしりしている訳ではなく、かと言って細くはない。百八十はあるな、間違いなく。歳は二十代前半、かな。

何だ、この完璧男前。

着古した簡素な白シャツに黒いパンツが、どこぞかの高級ブランド品に見える。

お恥ずかしい事に、私はぽかんと口を開けてこの男前を凝視していた。

だってCGのように完璧なのですよ！ハリウッド俳優が演じた某エルフ以上に美しい男なんて、存在しないと思っていただけ、ここに！ここに居たよー！！

あー良い夢だ！夢なんだから、どれだけ見たって良いじゃないか！というか、網膜に焼き付けておかないと勿体ない。

何なら触っておくか！

私は思い切って彼の腕を掴んだ。

おお、適度に鍛えられた筋肉！思ったより太い二の腕だなあ。

ええい、抱き付いてやれ。

甘い菓子のような香りがする。硬い胸板は心地よい体温を伝えてくれた。

…妙にリアルな感触だ。夢で臭いや体温まで感じるもんか？普通…

怪訝そうにこちらを見下ろしていた男前は暫く凍りついたように微

動だにしなかったのだが、口を開いてぽつぽつと何かを言った。
ん？何？

だから、いい加減この理解不能言語を何とかしてよ。
どうしたもんかと眉を寄せた瞬間だった。

男前が何かに背を押されて、抱き付いたままの私ごと前のめりに倒れ込む。何とか転倒はしなかったものの、ぎゅうと頭を抱え込まれ、かなりの密着具合だ。

ああ、何て素晴らしい夢！後一時間はこのままでいいや！

「小松ちゃん！」

「あ、木村さんだ」

突然現れたのは木村さんだったらしい。

男前の胸板を押してその後ろを覗き込み、見慣れた彼女の姿と通じる言葉に、夢の中だというのになんだかほっとした。

「説明、するから！」

「説明って？」

木村さんは物凄く動揺しているようで、見たこともない焦った表情をしている。

彼女は私の右手をぐいと引くと、自分の指から抜いたシルバーのリングを私の小指に通した。

「何？くれるんですか？」

「スターチス！一体何だ、この娘は！」

「へ？」

リングを指に嵌めた途端、おっちゃんが発した言葉が聞き取れた。
おおお！今度は翻訳機？！SF映画みたい！いや、やはり例の国民

的アニメか？

私が一人興奮していると、木村さんはがっくりと肩を落として首を振った。

「別の星の人間です」

「……は？」

私が聞き返すまで、たっぷり十秒は掛っただろう。
夢にしたって突拍子が無さ過ぎる。

「何？別の星って。何の設定？」

「今、説明するから」

何のコントだろうと首を傾げていると、頭上から涼やかな声が落ちてきた。

「いい加減、離してくれないか」

「おお！何言ってるか分かるー！すごい！ね、木村さん、これって二十一世紀最大の発明品？」

男前の言葉は無視して、わくわくと木村さんに問いかけた。

彼女は困ったように頭を振って、ちょっと待ってってばと、少々苛立たしげに呟くと、おっちゃんに身体ごと向き直る。

「現在拠点にしている場所の現地人なんだけど、私の不手際でこちらに送ってしまいました」

ちょ！現地人って！まるで言語の通じない槍持った人たちみたいじゃないの。あ、でも言葉通じてなかったなあ：

この場合、彼らが現地人、じゃなくて私が現地人？

「どうするんだ」

「吹聴するような子ではないんだけど…夢で通す？」

「え、それ、私に聞きます？」

「うーん、そうよねえ。時間設定を忘れてた私が悪いんだし、小松ちゃんの負担になる事はあんまりしたくないんだけどなあ」

負担？

その言葉に私はぴくりと反応した。男前の二の腕を掴む手に力が入る。

「ちょっと聞いても良いですか？」

「なあに？」

「えーと。これって現実？」

トイレのドアを開けると、トイレでない事だけは分かる、全く別の空間。

言語の通じないおっちゃん。

作り物のような美人。

アニメの中でしか存在しないはずの翻訳機。

別の星、だという木村さんの言葉。

ほんの数分前まで寮という自分のテリトリーに居たというのに、木村さんはおっちゃんに私を現地人と説明した。

どれもこれもが日常とかけ離れていて、何一つ現実味を帯びていない。

これが夢でなければ何だというのか。

木村さんは恐ろしい程に真剣な顔つきでゆっくりと口を動かした。

「現実よ」

もうなんというか。
とりあえず、泣いて眠って暴れたい。

1-2

「まずは彼の腕を放そうか？」

木村さんの声が怒りを孕んでいるように感じて私は首を傾げた。

これはあれだ。嫉妬とか、独占欲とかそういう類のものだ。女の勘が働く、なんて大層なものではないが、そうだと言われる前にしっかりと堪能しておこうかと、私は男前の胸板に頬を押し付け密着する。

「もしかしてこの男前、木村さんの彼氏？」

「やめろ！気持ち悪い！」

「ひどい！」

「うるさい！この雌雄同体！」

私の言葉に二人はぎゃあぎゃあと言い合いを始めた。

こんな感情的に叫ぶ木村さんを始めて見たなあ。

って、雌雄同体って：

「木村さんってオネエだったの？！」

「違うのよおお！」

一から説明させてよ！と、木村さんは涙交じりにそう叫んだ。

「まずは、そうねえ…どこから説明しようかしら」

木村さんに勧められた椅子に腰を下ろし、私は彼女の言葉を待った。椅子に座る際、断腸の思いで離れた男前は、壁に寄り掛かって監視するようにこちらを見ている。

「はい！こちらの男前さんの、名前を教えて欲しいです！」

「私の存在は無視か」

木村さんの横でぼろりと零したおっちゃん言葉は、耳に届かなかったということにしておく。

「ラグラスだ」

息を吐き出すのと同時に言うような、嘆息気味の声に私は首を傾げた。

「あれ？さっきおっちゃんがアベルって呼んでなかった？」

「聞いてたんじゃないか」

またもおっちゃんの言葉は無視。

「ラグラス・アベル。だ」

「私は小松あい。よろしくね、ラグラス」

私ははにかんだような、人好きする笑顔でにっこりと笑って見せた。彼はああ、とだけ返してそっぽを向く。

ちっ。効かなかったか…

この笑顔、うちの父親にはかなりの効果を上げるのに。

何か欲しい物がある時は、これを使えば楽勝だ。へらへらしながら、買物に付き合ってくれる。そしてその後、また甘やかしたと母親に怒られるのだが、そこは私の管轄外だ。

こほん、と木村さんが咳ばらい一つし、じゃあ説明するわ、と腕を組む。

私は緊張したように（実際は緊張なんてしてないのだが、この空気ではらへら笑ってはいけけない気がした。私は空気が読める子なのだ！）唇を引き結び、硬い表情で頷いた。

「私の名前はスターチス。こことは違う銀河系の星から『種』を探すためにこの星に降りたの」

「M78星雲！」

「違う！」

「えー？イスカンダル」

「ヤマトでも無い！」

「機械の身体に」

「なりたくない！」

「ニュータイプ？」

「人間じゃないってば！」

「スティーブン？」

「ETではないけど近い！っていうか全部古い！」

「兄が好きなので」

ああもう、と。

木村さんはテンション高く、素晴らしいタイミングで返した後、ち

よつと腹立たしそうに頭を振る。

一通りの応酬を繰り広げ、私は満足して頷いた。

達成感、というやつか。流石木村さん。素晴らしいタイミングである。

清々しい笑顔で私は話の先を促した。

「はい、先をどうぞ」

「…っ！あー！こういう子だって知ってたけど、もう！」

「まあまあ木村さん。落ち着いて」

「小松ちゃんが言うなあ！」

「スターチス：この手のは、あまり相手にすると付け上がるぞ」

「この手って、人を悪徳セールスみたいに言わないで下さい」

私は冷静にぎろりとおっちゃんを睨み付けた。おっちゃんは何だかショックを受けたようで、ちょっと悲しそうに眉を寄せる。

「…私への扱いが酷くないか？」

「人見知りです」

「そんな真っ直ぐに人の目を見てきっぱりと！」

「これがゆとり教育ですよ」

「小松ちゃん、からかわない」

「ちえーっ」

「何だか泣きたくなってきた」

「言っておきますけど胸は貸しません」

「借りるか！」

おおお。

このおっちゃん、私好みの弄り安さだ！ちょっと好きになりそうである！

「で？」

呆れたような（実際、呆れてるんだろう）涼やかな声に、私たちはそちらへと視線を遣った。

腕組みしたままこちらを見下ろす青い双眸が、冷ややかにこちらを見ている。

「いつになったら話が進むんだ」

混乱する頭を押さえ、私はちょっと待ってと声を上げた。

「整理するから、待って」

いやまあ。

私の頭で整理出来るほど、常識的で簡単な話ではないのだけれど。

まずは木村さん自身の事について整理しよう。

木村さんこと、スターチスは、地球とは違う銀河系が発祥の地だというグラジオラス星人。

よし、あれだ。黒いサングラス掛けて、宇宙人たちと戦ったり、問題を解決してた黒人さんの職業は本当にあるらしい。うん。

彼らは物凄い優秀な頭脳を持ち、寿命は三百から五百年くらいで長寿なのだけど、生殖能力が人間の数パーセントしかない。なので、最優先使命は、優秀な種を貰って残す事。

こっからがまあ、ラグラスが雌雄同体と言った理由なのだが、彼らは、性別も姿形も自由に操れるのだ。男女が変化する、なんてもんじゃなくて、人間から動物、虫にだってなれる。それで生殖行為も出来ちゃうれしいのだから、ラグラスが毛嫌いする理由もちよつとだけ分かる。木村さんには悪いけどね。

そうそう、優秀な頭脳、だけど。

私がここに来る羽目になった装置や翻訳機を一日で作れるくらいに優秀らしい。

親のお腹に居る間に、親の知識全てを吸収して産まれてくるのだというから、残念ながら可愛いげのない赤ちゃんなのだろう。果たして、赤ちゃんの姿をしているのだろうか。

次はこの星だ。

中世ヨーロッパよりちよつと遅れた文明のこの星は、剣や弓なんていう物で戦をしているらしい。勿論、この世界が球体だとか他に生き物が住む星があるとか何て知識はない。おっちゃんと木村さんが便宜上ビオラと名付けた。

そうそう、このおっちゃん。

木村さんの協力者で天才らしく、ダヴィンチのような存在らしい。有名人じゃん！と言ったらおっちゃん、天才は死後評価されるもんだ、と淋しそうに言っていた。

そうだよー中世ヨーロッパで地動説とか唱えちゃったら、何言ってんだこいつって捕まるんだもんね。ここではきつと変人扱いなんだろうな。ぷぷぷ。

「おい、突然笑い出したぞ。大丈夫なのか？」

「あーこういう子だから」

「それで済むのか？」

「こういうと付き合うのはどうかと思うぞ」

「えーだって面白いじゃない？」

「そういう問題か」

まったく。人が何とか整理しようと必死なのに、三人してごちゃごちゃと煩いなあ。何を考えてたんだっけ：

ああ！そうだ、この星についてだった。

国の数は十五。それぞれに王政を敷いている。

今私がいるこの国、ルピナスは永世中立国家で、国境を深い山脈と海岸に囲まれた一年中温暖な気候の国らしい。肥沃な大地で作物も豊かに実り、大地と同じようにのんびりとした国民性なので平和主義なのだとか。

勿論、自衛の為に兵隊は居る。日本みたいなものかと聞けば、似てると木村さんは言った。

ルピナスは平和主義で戦を仕掛けないと言っても、肥沃な土地は他所の国から見れば魅力的だ。国境が隣接する三つの国は何度も戦を仕掛けようとしたのだが、そう簡単には越えられない山脈と遠浅な海岸に阻まれ、国土を血で濡らした事はないのだとか。幸運な事だと思う。

だが、それだけではなくて。

他の国から言わせれば、この国に攻め入れれば呪われる、のだとか。戦を仕掛けようとした途端、国が流行り病に見舞われる。山脈を越えたところで嵐に襲われ、兵は壊滅的な被害を受けて戦どころではなくなった。王様が事故死した。

そんな事が一度や二度ではなく、戦を仕掛けようとするれば毎回不幸に見舞われるのだ。

ルピナスは欲しいが呪いは怖い。近隣諸国は指を啜えて見ているのが現状らしい。

「で」

「整理出来た？」

「うん、大体は。で、木村さん。私はどうすればいいの？」

「どうもこうも…よ」

「いつになったら帰れるの？」

「帰ろうと思えば、いつでも帰れるわよ？」

「え！？じゃあ帰る！」

何だ。ちょっと拍子抜けしてしまった。

お前は勇者だ、この世界を救うため召喚されたのだ！なんていう、お約束的なものじゃない。いや、分かってたけど。

そもそも、この国は平和なのだから、勇者が必要なんて事もないだろう。剣を持って振るう、魔法を使う！なんて事、ちょっとしてみただけで仕方ない。これは諦めよう。

帰れるのなら、今すぐ帰って眠りたい！私は八時間は寝たい人なのだ。それに、トイレにも行きたいし！この扉を開けた目的がトイレだったのをすっかり忘れていた。

「だから！それが問題なの」

「どこに問題があるの？」

帰れるんでしょ？と私は首を傾げた。

「あの、ね。私の存在はトップシークレットなの」

「とつぶしーくれっと？」

「そう。私、こう見えても宇宙人なのよ」

「うん」

「で、現在地球には私を含めて三人のグラジオラスが居る。その存在を知るのはごく一握りの人間で、一般人には知られてないのよ。万一、存在が知られたら大騒ぎだけで済むもんじゃないの」

だって、私たち畏怖されてるし、と木村さんは続けた。

確かに。

実際にネコ型ロボットが居たら、日本は世界の中心に居るだろう。

木村さんはネコ型ロボットというよりは発明小学生だけど。

日本は勿論アメリカだって、その知識と技能は喉から手が出るほどに欲しいだろう。

「木村さんをどこの国が囲うか、で揉めるんでしょねえ」

「そう。だから私たちは誰にも手を貸さない。代りに、正体を隠して生きてるの。なのに、君は私の存在を知ってしまった。しかも、この星の存在は他の誰にも知らせていない」

「え？」

「この星を荒らされたくないもの」

なんだか雲行きが怪しい。

私は知ってはいけない事を知ってしまったらしい。いや、この場合不可抗力じゃない？だって、私はトイレを借りようとしただけなのだし。

「生かしてはおけねえ！やっちゃまえ！って事？！」

あわわわ！

私は椅子から立ち上がった。木村さんは難しい顔をしていたが、ゆっくりと頭を振る。

「そんな事しないわよ。ちょっと記憶を消したいんだけど」

「ええー？ラグラスの顔忘れちゃうのー？」

「そういう問題か…」

「この数時間だけ消せば良いんだけどね…人間の神経って繊細だから、上手くいってもここ数日の記憶がなくなったり、運が悪いと記憶どころか廃人に…」

「いやだあああ！」

「うん、だから困ってる」

「天才なんでしょ?!そこんとこ上手くやってよ木村さん〜！」

「今すぐには無理」

えへ、と可愛らしく肩を竦めて見せる。

むおおおお！

いくら私が美人に弱いからって、廃人になっちゃうかも知れないけどいい?なんてのには頷かないぞお!いくら笑顔で言われたって騙されないんだからっ。

「おっちゃん助けて!」

「え?今更私に助けを求めるのか?…大人しく、脳を弄られろ」

「いやだあ!来月、アレの公演があるんだよ?!やっとチケット取れたのに!木村さんと一緒に行くって約束したじゃないかあ!」

「ああー!あの舞台は絶対観に行くべきよね!」

しめた!

木村さんの気が逸れたぞ!

「そうだよっ。二年ぶりなんだから」

「私前回行けなかったのよお。肉眼でアレが見れるのよね…」

よし！

木村さんは妄想の中！逃げるなら今しかない！

「小松ちゃん」

「ふぁぁお！」

「…逃げるつもりだったな」

ちょー！言うなって、男前！

「あっちに戻っても喋ったりしないわよね？」

「勿論！」

「もし喋ったりしたら…」

「舌を噛み切ります！」

「えーと…そこまで言っていないんだけど」

まあいいわ、と木村さんは嘆息した。

「小松ちゃんを信じます」

「おおお！流石木村さん！愛してる！」

私は木村さんに駆け寄り抱き付いた。ふんわりと良い匂いがする。思わずうつとりするような、美人の香りだ。見た目だけでなく、香りというのは大事なのだ。

こんな美人の木村さんを気持ち悪いとかいうラグラスは、ちょっと、いや、かなりおかしい。

なんて勿体ない。

「おい…なんでそんな目で俺を見る」

「いや、可哀想だなぁと思って」

「勝手に憐れむな」

淡々と、愛のない突っ込みだ。
うーん。もっと愛想があればいいのに。色々勿体ない男前だなあ。

「は！そんな事より早く帰ろうよ木村さん！」

もう眠くて眠くて。

目がしょぼしょぼする。

「そうね。えーと、ちょっと待ってね」

木村さんから離れて行動を見守る。

手にしていたリモコンみたいな物をペペペと操作すると、木製の古びた扉の上に設置された、場に似つかわしくない機械がブーン、と音を立てた。私がこちらに來た時に聞いた音だ。

ああ、やっと眠れる。

安堵した私がへらりと笑った瞬間だった。

ばすん

「え？」

「ふえ？」

え、何？今の気の抜けた音。

今にもくっ付きそうな瞼を頑張って持ち上げてみれば、木村さんが口をあぐりと開けたまま固まっていた。

「故障しちゃったみたい」

へ、へへへ。

引き攣った笑みの木村さん。

私も同じように笑った後、ふらふらと男前へと歩み寄った。

男前は怪訝そうにこちらを見下ろしている。その胸に問答無用で身体を預けた。

「おやすみなさい」

投げやりに。

ああ、もう完全に。私はこの状況から逃げ出した。

ごろりと寝返りを打って、違和感に目を覚めました。私のベッドじゃない？

うーん、身体が痛い。

何だか全身がみしみしと軋んだ音を立てている気さえする。酷い倦怠感を感じて目を覚めました。

床で寝てしまったのだろうか。寮のベッドとは思えない硬さのそこから身を起こすと、寝起きでぼんやりとした視界にも違和感を感じる見慣れぬ風景が広がっていた。

……あれ？

ここ、どこ？

煉瓦のような、古い石壁のような。

見慣れない室内に瞬きを繰り返す。

身体を横たえていた場所を確認すると、古い木製のベッドらしきものに、シーツが引いてあるだけだった。そりゃ身体が痛いに決まってる…床で寝たのと変わらない。

っていうか。なんでこんな所に居るんだろう。

昨日なんかあったけ？

悲鳴を上げる身体をなんとか動かしてぐっと伸びをした。

…トイレ。トイレ行きたい。

のろのろとドアへと向かう。ギツと軋んだ音を立てて開いた扉の向こう側、見覚えのある、だけど見慣れない、薄暗い廊下が続いていた。

「ああ…」

そうだ。

ぼんやりとした思考の中でも、昨日の有り得ない、非常にインパクトの強いアレは、すんなりと思い出すことが出来た。

ああああ。夢じゃなかったのか。

ちょっと期待していたのに。木村さんは現実だと言ったけれど、起きてみたらやっぱり夢だった、というのを。

あー、もう…

ふらふらと覚束ない足元。と、とりあえずトイレ行かなきゃ。

「木村さーん！おっちゃーん！えーと…男前ー！」

「自分から名を聞いておいて、忘れるかお前は…」

「おおお！男前！」

すぐ隣のドアから顔を出したのは、呆れた様子の男前だった。眠そうに長い睫毛を瞬かせている彼も寝起きらしいが、さらっさらの髪は寝癖一つないし、綺麗な顔も完璧で、よだれの後なんてなさそうだ。

ここまで完璧だと何か腹立つなあ。

「トイレどこ?!」

「ああ…着いて来い」

寝起きだろうにしゃんと背筋を伸ばし、大股だがゆったりと歩く男前には、なんというか品がある。お金持ちのお坊ちゃんというのではなく、しっかりと教育をされた貴族のような風格。なんてのは私に分かるはずもないが、テレビで見たロイヤルファミリーみたい。

「えーと…ラグラス？って貴族？」

「……似たようなものだ」

「おおお！男前な上にお金持ちとか、すごい価値高いよ！」

流石木村さん、狙い所が違うなあ。

「そういえばさ、どうして木村さんが嫌いな訳？あんな美人なんだから、ラグラスも種くらい上げちゃえばいいのに。外見が好みじゃないんなら、それだって変えられる訳でしょ」

「誰がやるか！あれが諸悪だと知って言うのか?!」

「諸悪って？」

きよとん、と首を傾げた。

諸悪って。木村さんがそこまで悪いことしてるか？

私が男なら、棚ぼた、据え膳とばかりに頂いちゃうだろう木村さん。子孫を残したいという願望は生物なら当然持っているものだし、美人が相手なら悪い気なんてしないだろうに。

「アレのせいで俺は……」

ぐっと下唇を噛み締め、彼は何かに堪えるように零した。

「そっか…」

可哀相に。本当に可哀相に。。

「ラグラス、そっち系なんだね？」

「そっちってどっちだ！」

「そっか！おっちゃんとは親子にも見えないし、どんな関係なのかと思ってたんだけど、そういう事かあ」

「違う！断じて違う！変な誤解をするな！」

「大丈夫。私、こんなだけど理解はある方だから」

「違うと言っておるだろう！」

「変な偏見とか持っていないよ？非生産的だとは思うけど、愛し合ってるなら良いじゃない」

「誰か！こいつをどうにかしてくれ！」

男前は頭を抱えて座り込んだ。

私はその横に腰を下ろし、彼の肩を優しく抱いてやると、さらさらの金髪を撫でてやる。

うんうん。辛い目にあっただね。

「大丈夫。私は味方だから」

「あやつの次に憎いわっ！」

何故憎まれるのか、さっぱり分からない。

異星人というのは分かり合えないものなのだろうか。悲しい事である。

何故かテンションだだ滑りの彼を宥めすかし、漸くトイレに行った後、私は食堂のような場所に連れて行かれた。

パンを焼く香ばしい匂いに食欲をそそられる。

おはようございます、と声を掛けられた方を見遣ると、簡素なメイド服に身を包んだおばあちゃんが、ちゃんとした背をゆっくりと曲

げて頭を下げた。

「アベル様、お食事になさいますか？」

「ああ、頼む」

「そちらのお嬢さまも、同じ物をお出しして構いませんか？」

「え。あ、はい。ご迷惑掛けます」

おばあちゃんはとんでもございません、とだけ言って、作業を再開した。

年齢は六十を超えていると思うんだけど、すつごくぴんしゃんとしたおばあちゃんはプロ！という感じた。

料理を盛りつける手際の良さに目を見張る。

ラグラスは既にテーブルに付いていて、料理が運ばれて来るのを待っているのだろう。普通のご家庭なら手伝うべきだが、おばあちゃんにとってこれは仕事なのだ。レストランなんかで客は手伝ったりしないもんね。

私は二人を交互に見遣った後、大人しくラグラスの向かいに腰を下ろした。

「おっちゃんと木村さんは？」

「さあな」

興味がない、と言いたげな態度は本当に可愛いがけない。

「旦那様とスターチス様でしたら、朝食を済ませて研究室にいらっしゃいます」

トレイからサラダとスープを下ろしながら、おばあちゃんはそう言った。

わわ！すごい良い匂い！

「これ、なんのスープですか？」

「スカビオスでございます」

「えっと、そう、ですか…」

聞いたことのない食材だ。こっちの世界の事なんて、大まかな事しか知らないのだから仕方ないけど。

私はスープを口に運んだ。

「美味しい！」

「それはようございました」

白いどろっとした液体は、ジャガ芋のポタージュを連想させたが、味はサツマイモのような甘さだ。

サラダはどうだろう。小松菜のような青野菜がメインで、人工物っぽいピンク色の丸い身がトッピングされている。

それをぽいっと口に入れる。ぷちっと口の中で弾けるそれはグリーンピースのような食感で、口にはミントのような爽やかな香りが広がった。見た目とは違う爽やかさに、ちよっと笑いが出る。

その後も、日本では、というか地球では見られないだろう食材に、おっかなびっくりしながらも完食した。味付け自体は塩がメインであっさりとして美味しい。素材が良いんだろうと思う。

私が食後のお茶で一服していると、とっくに食事を終えていた彼が腰を上げた。

「行くぞ」

「ちょ、ちよっと待って！」

今だキッチンで仕事をしているおばあちゃんに頭を下げて、ごちそうさまでしたと笑みを向けた。

「美味しかったです」

私の言葉に、おばあちゃんは初めて笑顔を見せた。うつすらとしたそれは冬の陽射しのように柔らかで、私はほっこりとなる。
可愛いなあ！

ラグラスに着いて行った先は、昨日の薬品臭い部屋だった。

「小松ちゃんおはよう」

「おはようございます！」

にっこりと笑う木村さんは今日も美人だ。

おっちゃんは今日もむっつりと私を睨みつけてくるが、その表情が、存在が、私に構ってくれと言っているようにしか見えない。今日も
弄り倒してあげるからね！

「どっか行くの？」

分厚いコートのボタンを留めながら、麻布のバッグを背負った木村
さんは、ええ、と頷いた。

「もう一カ所の研究室に、部品とか取りに行つて来るわ」

「これ直せるの?!」

扉の上にある不似合いな機械を指して叫んだ。

昨日は自棄になって不貞寝してしまったが、作った本人がここに居るのだから、直すのだって簡単だろう。

「往復で一日は掛るから、帰れるのは明日の夜になると思うけど」
「待ってる! 待ってるよ!」

私も付いて行きたいところだが、慣れない世界では足手まといになるだけだろう。ぐっと堪えて待っている事にした。

おっちゃんも同じように身支度をしているから、木村さんと一緒に行くのだろう。良いなあ。馬に乗ったりするんだろうか。

「私も行ってくるから、アベル、娘の相手をしてやれよ」
「俺がか!」

彼は不満そうに叫んだが、ここで投げ出されても困る。ここで私が知っている人と言え、ここに居る三人とさっきのおばあちゃんメイドだけなんだから。

がっしりとした腕に自分のそれを絡ませて、上目遣いでにっこりと笑ってみせた。

「ラグラスよろしくねー」

「お前が言うなと言うておろうが!」

「…ラグラスって、変な言葉遣いだよねえ。お年寄りみたいだよ」

彼は痛いところを衝かれたらしく、ぐっと言葉を飲み込んだようだった。

「それとも里帰りでもする？」
「するか！」

里帰り？

私が首を傾げている間に、木村さんとおっちゃんは今支度を済ませ、私たちの横を通り過ぎた。

通り過ぎる瞬間、木村さんはぽんぽんと私の肩を叩き、心配しないでね、と笑う。

「良い子にしてるのよ？」

「分かりました」

「アベル、頑張れよ」

「……既に頭が痛い」

「大丈夫？頭痛薬とか持ってる？」

私の言葉に、彼は更に頭を抱えた。

「この数時間で、ラグラスが一気に老けこんだ気がするわ」

なにそれ。

私のせいだとも言えるの？

この星には大気を汚す文明が備わっていないせいか、吸い込んだ空気は驚くほどに美味しい。田舎の空気、なんて目じゃない。普段、汚れた空気を取り込んでいる身体が、一瞬にして洗練された気さえる。

広がる景色は一面の緑豊かな大地。小鳥の囀りや風で揺れる木々の音が聞こえるくらいで、都会の喧騒とは程遠い静寂が広がっていた。

あああ。

何だか、産まれてきてすみませんでしたと謝りたい。私の吐く息ですら、この世界を汚してしまいうさだ。こんな俗物に塗れた私が居るべき場所ではないのだ！

木村さん、早く帰って来て！そして私を、あの汚れた俗世に帰して！私は地面に跪ずき…いや、膝を抱え込むように突っ伏して言葉にならないうめき声を上げた。

「お前はさっきから何をしているのだ」

「己の罪に苛まれているのですよ！」

「…そうか」

ラグラスは理解不能とばかりに、腫れ物に触れるような声音でそう言った。君もこの自然に感謝するといい！と思ったが、これが日常にあるのなら、そんな気も起きないだろう。

ああ、でも。

そうして地球も汚れていったんだよなあ。

「ねえラグラス」

名を呼ぶと、短い金髪を風に靡かせて彼は振り返った。太陽が落とす光がキラキラと彼の金髪を輝かせており、室内で見るよりずっと綺麗だ。

ほんと、ケチの付けようがない美形で嫌になる…

「ラグラスは仕事しないでいいの？」

「ああ…」

彼はそう言っでごろりと寝転がった。

「…ニート」

「は？」

「えーと、いやなんでも」

「そのような物言いたげな顔をして否定をするな」

「やーほら、えっと…色々聞いても良いかなーと思ったんだけど」

彼は胡散臭そうにこちらをじっと見据え、まあいい、と嘆息した。

「何が聞きたい」

「この世界について。昨日は半分以上聞き流しちゃったから」

「半分以上…」

呆れ果てた、と彼は呟く。

そりゃあまあ、悪いかなあと思ったのだけど、夢オチだろうと半分以上は思っていたし、何となく直ぐに帰れると思っていたから。基本、前向きな私。

今朝、生理的欲求が満たされると、頭は随分とクリアーになり、疑問やら好奇心やらがむくむくと芽生えた。こんな経験、もう二度とないだろう。

「えっと。まず、ラグラスは何してる人？里帰りって木村さん言うてたけど、ラグラスの自宅はここじゃないって事だよね」

おっちゃんとしたならぬ関係だとしても、仕事を何もしないというのはちよつとどういう身分だと突っ込みたくなる。囲われた愛人か？地球ではニートで通っても、こういう原始的な世界でニートがまかり通ると思えなかった。貴族の御子息だとしても、剣の稽古とか、そういうものがあるんじゃないのだろうか。

ラグラスは眉根を寄せて綺麗な顔を歪める。

「修業中だ」

「なんの？」

「…この世の理について」

「何か壮大過ぎて釈然としないんだけど」

「納得しておけ」

「家は？」

「ここではない」

さあこれで終いだ、と彼は言った。よっぽど言いたくないらしい。うーん。これ以上粘って機嫌を損ねてもまずいし、これは隙を見て木村さんに聞いてみよう。

「じゃあ次。この国は平和みたいだけど、他の国はどうなの？」

「この山脈を越えた裾野にバキア国とニゲラ国があるが、この二国は常に国境を争っておる。ここ数年は睨み合いが続いているが、賢王と名高いバキア国王が老齢だからな。代替えで戦が起こるだろう」

「ふうん…他には？」

「…ロベリア国という軍事国家がある。ニゲラ国海岸沿いだ」

「軍事国家？」

「そうだ。他の国にはない、火器を使用し…圧倒的な武力を持って

いる」

「ちょっと待って。火器って…銃とかってこと？」

「ああ」

ちよつと待て。

この星にはそんな文明があるのか？というかその国だけ持ってるって…

「まさか木村さんが伝授した、とか言う？」

「そのまさかだ」

「ちよおおおお！」

駄目だ！そりゃ駄目だよ木村さん！

こんな美しい星に、簡単に血を流す武器なんて持ち込んだじゃ！

「何考えてんの？！」

「己の欲望しか考えておらんな、あれは」

うううう。否定出来ないのが残念だ。

「その国はここには攻めて来ないの？」

「ルピナスから距離があるからな。しばらくは、その心配はないだろう。アレが余計な知恵を与えねば」

「まさしく元凶ですねえ」

ラグラスが毛嫌いする理由がもう一つ理解出来た。木村さんのせいでこの星に争いが増えたのだ。

後でとっちめて、理由を聞き出してやる。

「平和って素晴らしいね…」

地球でも、今現在もどこかで内戦は続いている。平和とは言い難い世界だけど、日本はいたって平和なもんだ。

死体が当たり前に転がっているような日常は経験した事がない。幸せなことだと思う。

「お前の国はそんなに平和か」

「そうだね。そりゃ貧富の差はあるけど、概ね平和ですよ」

「そうか…」

その後言葉は続かなかったが、彼の表情はどこか淋しそうに見えた。

「…殿下」

「煩い。帰らぬと言っておろうが」

あの後、何となく質問も出来ない雰囲気になり、庭でごろごろとしていたらうつかり眠ってしまっていた。

ぼそぼそと話し声が聞こえて来て、目を覚ましたのだが、怖いくらい冷たい声音に起き上がる事も出来ない。

四十は過ぎただろうと思われる、渋い男の声。切羽詰まった真剣な声は、辛抱強くラグラスを口説き続けていた。

「お願いします。陛下ももう長くはございません。殿下にお戻り頂かないと、国は指導者を失います」

「くどい！帰らぬと言ったら帰らぬ！」

声を張り上げてからまずいと思ったのだろう。こちらに視線を向けた気配がしたので、私は必死に寝たふりを続けた。は、鼻がぴくぴくする…

「陛下の跡を受け継げるのは、アベル様しかおりません」

「帰れ」

それははっきりとした拒絶。

男はまた参ります、とだけ残して、静かに草を蹴って行った。

「起きているのだろう」

ばれてる。

物凄く気まずいが、起きるしかないだろう。ゆっくりと身体を起こすと、彼はぞっとする程冷ややかな眼差しで男の背を眺めていた。

「…えっと…王子様？」

「ああ」

「さっき言ってた、王様が亡くなりそうだっていう国の？」

「いや。そうだったらどんなに良かっただろうな」

彼の声は怖いくらいに冷たく、暖かい陽射しの下に居るといふのに背筋が凍る程に寒気を感じる。

「俺は、ロベリア国の後継者だ」

軍事国家。木村さんが火器を、知識を与えた国。

ラグラスが彼女を嫌う最大の理由が分かった気がした。

何とも言えない、気まずい沈黙が続いた後、彼はゆっくりと立ち上がった。い、息が詰まるかと思った。ただでさえ、沈黙苦手なのに。

「屋敷を案内しよう」

「あ、うん」

差し出された手を掴むと、力強く引き上げられた。

「……何をしている」

「よしよし」

「…お前の国では、こういう事を平気でやるのか」

「え、ううん」

アメリカじゃあるまいし。

引き上げられた手の先を辿るように見上げてみれば、伏された長い
睫と揺れる双眸が捨てられた子犬のように見えたラグラス。

思わずぎゅっと抱きしめてしまった。残念ながら、私の頭のとっぺ
んはラグラスの顎下ぐらいなので、抱きしめてあげるといよりは、
抱き着いているだけなのだが。

何とか届いた後頭部を優しく撫でてやる。さらっさらの金髪は指の
間を滑るように落ちてゆく。

な、何と素晴らしい触り心地！実家のわんこが美容室に行った後の
ようだ。

「誤解されぬようにな」

「え？なに？」

「何でもない」

「ん？まあいいや。元気出そうね」

「お前と居ると、全てが馬鹿馬鹿しくなってくるな」

「何故かよく言われる」

ほんと、なんでかさっぱり分かんないんだけどね。

昼食を終えたラグラスは、席を外す、と言って私を置いて部屋を出て行った。啗内いっぱいに柔らかいパンを頬張り、もごもごとしていた私はうぐ、と返事をして頷いてから失敗した、と思った。
暇じゃないか：

屋敷の案内をしてくれた彼は、使いの人が来た時よりは穏やかで、落ち着いたようだ。

お風呂もちゃんとお湯を溜めて入るみたいだし（この星にも下水道は整備されていた。蛇口を捻れば水が出る、というほどに便利ではなく、発展途上国のようにポンプで汲み上げるのだけど。テレビでしか見たことのないそれは、やってみると大変だったが、ちょっと楽しかった）、思ったより文明は進んでいるみたい。

私が借りた部屋への戻り方と、使用人が普段控えている部屋、広間、お風呂と案内されたが探検するほど部屋数はなかった。私がここに居るのは明日までなのだし、詳しく案内する必要もないと思ったのだろう。

トイレと研究室は流石に覚えたので簡単に道順だけ教えて貰った。日本住宅よりずっと広い間取りの三階建ての一軒家は、あつという間に案内終了となった。

お約束なら王様やら王子様、美形公爵なんかがお城を案内してくれるのだが、案内してくれたのは美形王子様だが、残念ながら案内されたのは一般家庭である。

暇を持て余した私は、おばあちゃんメイドがてきぱきと行っている後片付けをぼんやりと眺めていた。

「えーと、メイドさん？」

「なんでございましょう」

声を掛けると、おばあちゃんは仕事の手を止めてこちらの眼をきちんと見て応えてくれた。

申し訳ないので続けてくださいと言ったのだが、おばあちゃんは首を横に振ってから話の続きを促す。うーん、プロだなあ。

「お名前聞いても良いですか」

「セージと申します」

「ここ、使用人さんは何人いらっしゃるんですか？」

「私が調理場と旦那様のお世話を任せております。掃除洗濯と雑用を行う娘と、庭仕事などを任せております者、警備の者が二人で、五人でございます」

おお。思ったより多かった。

という事は、おっちゃん意外とお金持ちなのだろう。

「ラグラスのこと、聞いても良いですか？」

一番聞きたかったこと。思わずぐくりと喉が鳴った。

「答えられる事でしたら」

「ロベリアの王子様が、どうしてここに居るんですか？」

「ロベリアには王位継承者がアベル様しかおりません。ですがアベル様は戦を嫌っていらっしやいます。故に、魔王を継ぐ事を拒んで、国を飛び出していらっしやいました」

「まおう？」

あのバラエティ番組で、女優が呼ばれていた、あの？音楽の授業で聞いた、子供がお父さんお父さんと連呼する曲？

「ロベリアは六十年前に建国されたばかりの若い国です。建国されたのはアベル様の御祖父様でございますが、当時ロベリアはパキラという国の領地でした」

そこでセージさんはゆっくりと瞼を落とした。何かを、じっくりと思いつけているのだろうか。

瞼の裏に広がっているのは当時の光景か。

「当時、パキラ国民は厳しい税の取り立てに困窮しておりました。国民は王と貴族たちの為に存在する、家畜と同じ扱いでございました」

「おお…」

お約束だ！権力に振り回される貴族たちと、虐げられる国民たち。

「当時、ロベリア領主であったアベル様の御祖父様が立ち上がったのは、国民の精も根も尽き果てようとしていた頃です。スターチス様の助力で、圧倒的な兵の差を武力で覆し、パキラ国は滅びました」

ここまで聞いて、何故ロベリア国王が魔王、だなんて呼ばれるのか分からなかった。国を救った英雄と呼ばれさえすれ、魔王と畏れる存在とは思えない。

「それで、あの、なんで魔王、なんですか？」

「…初代国王はパキラの王族は勿論、貴族の末端に至るまで血で血を洗う粛清を行ったのでございます」

肅清。その言葉に私は息を飲んだ。

ユダヤ人排除を徹底した、戦時中のような光景だったのだろうか。

「そこまでする必要があったんですか」

「いいえ。ですが、国を、国民を虐げていた悪しき血は、絶たねばならぬと申された国王はそれを遂行されたのです」

それは壮絶な光景でございました、とセージさんは言った。まるで見てきたようだ、と思ったのだけど、それは口にしない。体験したのだと、その固い表情が語っていた。

：セージさんって、一体何歳なんだろう。

「それで魔王、なんですか？」

「それだけではございませんが：後は、アベル様にお尋ね下さい」

「出来ませんよお！あんなしょーんもりした顔してる人に、そのものズバリって聞けますかー?!」

「だからこそでございます」

おおおお鬼いー！

部屋に戻る気にもならず庭に出た私は、裏手にあったこんもりとした森へと向かっていた。

大空を舞う、見たことのない色鮮やかな鳥は地球にも居るのだろうか。枝に止まってキリキリと鳴き声を上げる鳥は眼に痛いくらい真っ赤で、鳥くらいの大きさがある。

森に近付いてみれば、鳥の鳴き声らしきものが煩いくらい響き渡っていた。

落葉樹のような大きな葉を着けているものが多い。あの黄色い実は食べられるのかなあ。

見るもの全てが初めてで、僅かにだけど気分が晴れた。

駄目だなあ。この件に関して知りたがりには発揮するべきじゃなかった。

聞くんじゃなかった、と後悔したのは食堂を出た時。胸がもよもよする。表現しようのない不快感に、私はただただ唇を噛み締めていた。

セージさんが教えてくれたのは、この星では子供も知っているような一般常識だろう。だけどその知識は、この星の人間ではない私にとって、弄り易い美形の兄ちゃんではないラグラスの、奥深い部分に土足で入ってしまったような。そんな後味の悪い気分にした。脳天気な、頭撫でてあやしたりして悪かったなあ。茶化したりしたつもりはないのだけど、何故だかいつも緊張感がないと言われるのだ。

「あの…」

「ん？」

声のする方向を見遣ると、簡素なドレスっぽい服に身を包んだ、同年代の女の子が怪訝そうな表情でこちらを見ていた。大きなバスケットに入れた洗濯物を抱えている。

くりっとしたアーモンド型の、茶色い双眸が印象的な子だ。猫のようで可愛らしい。

「えーと、どちらさまで？」

「あなたこそ。ここは私有地ですよ」

「ああ。もしかしてメイドさんその二？」

「その二つて…あなた、旦那様のお客様ですか」

「ああ、うん。そうなるかな？ きむ…スターチスさんの知り合いです」

私の言葉に、彼女は眉を寄せた。

ちよ、なんか怒らせるような事言った？ あ、木村さんったら、こんな可愛い子にも嫌われてんの？！

「……アベル様に抱きかかえられていた…」

「え？」

じつとりと恨みがましい視線が絡みつく。

あれ？ これってもしかしくなくても、私が嫌われている？ もしかして、ラグラスのこと好きだったりする子？

そんな…それならなんて……

「可哀相に…」

「はあ？」

私は彼女にゆっくりと近付いて、抱えているカゴごと包み込むように肩を抱いた。彼女は私より随分と小さくて、カゴごとでも何とか

腕を回す事が出来る。

「彼はね、おっちゃんのものなんだよ？」

「……え？」

「だからね、ラグラスは私たちみたいな可愛い女の子に興味ないんだよ。えーと、旦那様とアベルはね、そういう仲なの」

「またんかああ！」

うおお！びつくりしたあ！

背後から漲る殺気と怒号と共に現れたラグラス。何か知らないけどものつすごく怒ってる。

ずかずかと大股で、先程までの気品みたいなものは欠片もなくて、はつきり言ってチンピラみたいだ。

こ、怖い！

美人が凄むと唯でさえ怖いのに！何というかもう、大迫力だあ！

「お前はそういうろくでもない事を言うんじゃない！」

「いやいやいや。ほら、夢見る乙女には真実を突き付けておいた方が良いんだって。せつかくの青春をそっち系の人に捧げるなんて、馬鹿馬鹿しいにも程があるでしょ？青春は二度とやって来ないんだから」

「だからだな！誰がそっち系だというんだ！」

「ラグラスとおっちゃん」

「この阿呆が！」

私とラグラスのやり取りを、ぽかんとしたまま聞いていた彼女は、ぽつりと嘘よ、と零した。

好きな人がそっち系だったなんてショックだよね？

ラグラスから彼女に視線を移し、優しく肩を撫でていると、腕を強い力で引かれ、彼女から引きはがされた。

「うおおお？」

私の身体はぐると反転し、勢いよく彼の腕の中に収まる。

危うく彼女を巻き込む所だったじゃないか！

非難するように彼を見上げれば、綺麗な顔が更に凄みを増して、冷ややかにこちらを見下ろしていた。

「え、なに？秘めた関係だった？」

「お前は言っても分からぬようだな」

長々と息を吐きだした後、唐突に。

ラグラスの綺麗な顔が近付いてきて、私はふえ、と声を上げた。

何事だと思ふ間もなく、ラグラスの唇が私の唇と重なる。

ただ押し付けられただけの唇がやたら冷たく感じて、うわあと小さく呻いた瞬間、ラグラスの唇が私のそれをやわやわと挟み込んだ。

ぞわぞわと経験したことのない感覚に襲われ、ぎゅっと肩を竦める。

…やたら気持ち良い。

「ふぁ…」

思わず漏れた声に彼は気を良くしたのか、ふっと息を吐いて唇を舐めた。ぬるりとしたそれは上唇から順にぐると一舐めして戻ってゆく。

もう一度唇を挟み込んでから、形のよい濡れた唇が離れていったのを、茫然と見詰めながら。

「ぐっ！」

私の拳は、ラグラスの鳩尾に深く強く沈み込んでいた。

うちの家族は、私から見ても変わってると思う。

ごく普通の中流家庭だというのに、私立の女子校に幼稚園から通っていた私は、周りの子たちからすると浮いている存在だった。

別に仲間外れにされるとか馬鹿にされるとか、そういう事は全くなかったが、どここの社長令嬢や、一般家庭でも教育熱心な両親の娘さんに比べると、成績も中の上程度、ピアノやバレエなんかにはからつきし興味ない私は、のほほんと一人場違いに見えただろう。本当はお金も掛からない公立で良いと言ったのだけど、何故、女子校に通っていたかといえば、父親たつての願いだっただけから。

所謂、草食系男子の父親。実年齢は四十過ぎだというのに、大きな眼とふわふわのくせ毛とが愛らしく、実年齢通りに見られた事は一度もない。二十代でも通ってしまう事があるくらいだ。ぽやぽやとした空気も一因だろうと思う。

父親似だと言われる私と並んで歩けば、兄弟にしか見られない。その父親が、可愛い娘に虫が付くのを嫌がって、女子校に入れているというのに。

お父さん、ごめんなさい。あなたがしっかり護ってきた娘の唇は、ゲイの男前に奪われました。

あ、ゲイじゃなくて両刀だったのか。

ラグラスの鳩尾に拳を埋めたまま、そんな事を考えていた私は、ふっ、と自嘲気味に笑ってから拳を戻した。

苦しそうに身体をくの字に折ったままの彼を見下ろして、捨て台詞を残す。

「その綺麗な顔に免じて、ボディだけにしといてあげるよ」

「お、まえは…本当に…」

私の鳩尾を喰らって喋れるなんて、中々やるなラグラス。あれ？私なんか悪役っぽくない？

空手有段者の警察官である長兄からは護身術を、格闘技好きの次兄からはムエタイを習っている私。痴漢撃退にはかなりの自信があるというのに、そんなに直ぐ復活されると困る。幾度も遭遇した痴漢どもは、一撃で撃沈して警察送りにしてやったのに。

もう一発いっておくかと一瞬思ったが、捨て台詞を残した後に追撃なんて格好悪い。

「まあ、いい。これで俺が同性愛者ではないと証明出来ただろう」

「…なんだって？」

今、なんだった？！

轟々と起き上がる怒りに、私は頬を引き攣らせた。

まさかこの男、自分がノーマルだと主張するただけに、この私の唇を奪ったというのか！

いくら男前でも、この星では王子様だとしても。

やっていいことと悪い事がある！

「酷いっ！」

わぁ！と、大袈裟に声を上げてしゃがみ込んだ。

こういう時は、悲しかった事を思い出すんだよね。子供の頃から一緒だった柴犬のたろが天寿を全うしたのは、去年の秋だった。たろが死んでから僅か一月でチワワの子犬を買ってきた母親とは、愛情に差があるんだから！

う、うううう。

たろおおおおお！

「わ、わたし、初めてだったのに」

精一杯声を震わせて涙を零す。たろ…うううう。

「酷い…」

初めては好きな人が良かった、なんて事は言わない。
というか、実は初めてではないのだ。

中等部辺りから、何故だか分からないが女の子たちにモテるようになった私。背が伸びはじめたせいか、母親譲りの男っぽい性格のせいか分からないが、あい先輩、あい、と寄ってくる女の子たちは可愛かった。流石に「お姉様」は勘弁してもらったが。

友達に連れられて入部した演劇部では男役ばかりだったなあ。可愛いカッコイイで分ければ、だれもが可愛い部類に入れてくれる顔立ちなのに。

高等部一年の文化祭で白雪姫の王子役をやらされ、超美少女の白雪姫にファーストキスを奪われた私は、なんで男として産まれなかったのだろうと涙したものだよ。

父親譲りのふわふわくせっ毛の隙間から彼を盗み見ると、物凄く狼狽してこちらを見下ろす蒼い双眸が眼に入った。

んふふ。私の唇を弄んだ罪は重いんだからね！まだまだ虐めてやる！

頬に出来た幾筋かの跡。潤んだ瞳を強調するため、私は瞼を落としてからゆっくりと押し上げた。そうして、じっとラグラスを見上げる。

彼は私の表情にぎよっとし、双眸を更に大きく見開いた。

「私の国ではね、結婚式で誓いのキスをするんだよ。一生を添い遂げる人に、神に捧げるために、大事に護ってるんだよ」

大嘘だ。

などと言う人間がここには居ないのだから、好き勝手言わせて貰おう。精一杯悲しそうに見えるよう、噛み締めた唇を震わせて視線を落とした。

「私にはもう…幸せな結婚は、出来ないん…だ…」

声音を震わせて再び膝を抱え込む。小さく肩を震わせるのも忘れな

い。
さあ、演劇部を怒らせると怖いんだぞ！（男役ばかりだったけどとか言わない）

さあ、どうする？！

「……分かった」

うああ！危ない危ない、寝るトコだったよ。

数分の沈黙の後（あまりに黙りこくっているものだから、うとうと

してしまってた！）彼は零す様にそう言った。
ほう！慰謝料でも払う気になったか？でも、こっちの通貨を貰っても仕方ないんだよね。地球でも価値があるような宝石とか金とかってあるのかな？

そんな事を考えていると彼が正面に座り込んだ。

「立ってくれぬか？」

「え、なんで？」

「いいから立て」

むう。何と俺様だ。

渋々と立ち上がると、彼は片膝を付いて私の手を取った。騎士が姫に傳くようだ、とぼんやりと彼を見下ろす。自分を見下ろしていた人間を逆に見下ろすというのは、ちょっと気分が良い。

「責任をとる」

「ふえ？」

えーと、責任をとって慰謝料、ってことだね？

怖いくらい真剣な光を点した蒼い双眸に、まさか、と血の気が引いた。

これはあれだ。騙してはいけないタイプの人間だ！

手の甲に唇を落とした瞬間、私は全てを悟ってしまった。

「お前を妻に迎えよう」

おおおおお！冗談が通じない、超純粋な人間だあ！

今時は幼稚園児でも疑うような事を、さらっと信じてしまった。君はオレオレ詐欺に簡単に引っ掛かるぞ！

「そ、そんなの無理だよ」

「何が無理だというのだ」

「えーと、ほら。ラグラス王子様じゃん」

「国に戻るつもりはない。戻ったとしても、血筋など気にせぬ。誰にも口を出させはせぬ」

「わ、私、この星の人間じゃないし、き、木村さんが許すはずないし！」

「あれには関係ないだろう」

ちよっとお！こんな展開聞いてない！ムリムリムリ！

思考回路が壊れた。停止なんてもんじゃないよこれ。なんも浮かばない。脳みそパーンだよ！責任とって欲しいとかじゃなくてさ、慰謝料が欲しいとかでもなくて、ただ、仕返ししてやろうと思っただけだったのに。
っていうかさ。

「ラグラス、綺麗過ぎて好みじゃない」

あ、パーンってなり過ぎて、思わず言っちゃった。

ラグラスは完全に凍り付いている。

いや、そうだよ。これだけ完璧に綺麗な顔してて、好みじゃないとか言われたことないよね。傷付けちゃったかなあ。

いやいやいや！元はと言えば、ラグラスが私の唇を奪うからいけないんじゃないか！私が罪悪感を感じる必要ない…よね？

「何て罰当たりなお！」

「うお?!」

突然の叫びに、私はびくりと身体を震わせた。

すっかりと存在を忘れていたメイドちゃんは、大声で叫んだ後、洗濯物をカゴごと放り出してわなわなと震えている。

「アベル様の求婚を断るなんて、神への冒瀆よ！あなた、世の女全てを敵に回したわ！」

「ええええー！？それは嫌だ！困る！」

私としてはこのメイドちゃんに嫌われるのも痛いのに！

女の子とは護り慈しむべき存在だ、と言われ続けて育てられた私。

その信念を叩き込んだのは尊敬する母親だ。

だからと言って、ラグラスと結婚するなんてありえない。色々とまあ、ありえないよ！

今更冗談でした、なんてのはこの空気と言えるはずがない。

「どどどどうしよう！」

「お前：俺に聞くのか」

「だだだだだだって！女の子に嫌われるなんて、ありえないよー」

「……お前こそ、そっち系か？」

「そういう汚れた眼で見ない！プラトニック！プラトニックなんだよ？！私にとって、女の子とは愛でるものなんだよっ！」

恋愛対象なんかになるものか！女の子を汚すなんて、想像もしたくない！

「私の大事な女の子を汚す男なんか罰当たれえ！」

「お前、産まれてくる性別を間違えたのだな」

「うん！心底そう思う！」

きっぱりと言い切った私を、冷やかな眼差しが貫いていた。

「くしゃん！」

いつの間にか日が傾いてきた。

風に吹かれ、背中に掛かるくせっ毛がふわりと舞い上がる。

ちよっと寒くなってきたなあ。

私が鼻をすするとラグラスはすっと立ち上がり、掴んだままの手を引いた。

「冷えてきた。戻るぞ」

「あ、うん」

ちらりとメイドちゃんに視線をやると、怨みがましい表情のままこちらを見ている。

威嚇している猫のようなメイドちゃん。嫌われるのは嫌だなあ…

私はラグラスの背に向かって必死に訴えた。

「ね。責任、とか要らないよ」

嘘付いてごめん。だからさっきの求婚を撤回して下さい。

「男が一度口にした事は曲げん」

「いやいや。当人が良いって言ってるんだから、素直に引こうよ。ね？」

愛らしく見えるように小首を傾げて上目使いをしてみるが、彼は前を見据えたままでこちらに一瞥もくれない。

うーん。頑固だなあ。お前は絶滅した武士か。

「好みではないなどと、俺に言える者は居ない」

「ご、ごめんてば」

根に持っていらっしゃる。

いや、だってさ。基本、可愛い女の子が好きなんだよ。某チャンプーのコーシヤルに出てる女優さんたちなんか皆綺麗で可愛いけど、あの中では一番若いあの子がドストライクです。

携帯と通信資格のコーシヤルも釘付けになるんですよう。

異性の好みを上げるなら、男くさい年上が良い。日に焼けた、逞しい腕とか素敵だなあと思う。

ラグラスのように整い過ぎた美形はまかり間違っても恋愛対象にはならない。綺麗だなとは思うけど、あくまで鑑賞用だ。

結婚するならうちの父親みたく、浮気の心配をしなくても良いくらいベタ惚れしてくれる人が良いのだ。彼のように身分だけでなくプライドも高そうな男なんて疲れるだけだろう。

…と。同じゼミの友人が言っていた。

付き合った事もなければ、親しい男は家族だけなんていう環境下に居れば、男の付き合い方なんて知らなくとも仕方ない。うん。絶対。

「靡かない女を振り向かせるのも面白い」

「…面白くない。それ、私面白くないから!」

そんなん、振り回されて堪るか!

彼はゆっくりと振り返った。ただ振り返っただけだというのに、何とも優雅な仕種に見える。

美人は得だなあ、ほんと。

「既に契りは済ませた。お前に求婚した時点で俺のものだ。俺が面白いならそれで良い」

「お、鬼か悪魔か駄々っ子かあんたは！」

にったりと笑ったラグラスは、それはそれは楽しそうだ。

ただの弄られキャラの甘ちゃんかと思っておれば、土管で歌うガキ大将か！

おのれえ！明日までに何とか成敗してやる！

「あああ！」

「何だ突然」

「ああうんいや、なんでもないよ！うん！」

胡散臭そうにこちらを覗き込んでから、彼はまあいい、と嘆息した。

すっかりと忘れてた。

私、明日地球に帰るんじゃない！結婚うんぬんどころか、付き合うのも無理じゃないか！よ、良かったー！

なんだ、とりあえず結婚するって言うっておけばいいや。どうせこの星にはもう来ないんだし。

：もう、この綺麗な世界に来れないっていうのはちょっと淋しいけど。

ほっとしたらお腹が空いてきた。

「お前はころころと：何を考えておる」

「え？ううん。夕飯も楽しみなーと思って」

「お前の思考は分からん」

君のもさっぱり分かんないよ？

夕飯も美味しく頂戴してシャワーを借りた。シャワーは木村さんが作ったものらしい。お湯が出るような設備は、他のご家庭にもお城にも無いらしい。

パジャマというより簡素なワンピースみたいな寝間着をセージさんに借りたが、膝丈の裾がふわふわした白い寝間着はちよつと乙女チックな気がする。これをセージさんが着ているのはちよつと想像できない。

流石に下着を借りるのは躊躇われたので、何も着けてない状態なのが心許ないが、生地はしっかりしてるので大丈夫かな。

部屋に戻ると、床で寝るのと変わりないベッドにふかふかの布団らしきものが用意してあった。

あんな硬いベッドで良いなんて、こっちの人たちは丈夫なんだなと思ったんだけど違ったみたい。良かった、今日は身体も痛むことなく、ぐっすり眠れそうだ。

ベッドにぼふんと身を投げ出す。ふかふかだあ。しあわせー

ごろんごろんと寝返り打って幸せを噛み締めていると、扉を叩く音が聞こえた。

「ふあい？」

右頬を枕に沈めたまま返事をしたので、間の抜けた声になってしまった。

俯せのまま顔だけ上げて誰が扉を開けるのかと待っていたが、中々扉は開かれない。手が塞がっているとか？

よっせ、と身体を起こして扉へと向かう。

「はいはー…いい？」

「なんだその嫌そうな顔は」

「えーと、セージさんかと思ってたので」

扉の向こうにはワインボトルのような物とグラスを手にした美形王子様。何しに来やがったのかと言う前に、彼ははずかさと部屋に入ってきた。そのままベッドに腰を下ろし、サイドテーブルを引き寄せボトルとグラスを置く。

我が物顔だ。まあ、私の部屋ではないのだけれど。

ベッドに座った彼は視線だけで座れ、と命令してきた。な、なんと腹立たしい。そんな風に指図される覚えはないぞ。

けどまあ、反抗するのも馬鹿馬鹿しい。彼の左隣に腰を下ろす。

「それ、アルコール入ってる？」

「ああ」

「じゃあ飲めないから要らない」

自慢じゃないが、私はアルコールの入っていない甘酒で酔っ払う人間だ。ビールやチューハイなんて舐めただけで真っ赤になり、一口だけでべろべろに酔える。

絡む泣く笑い出すは当たり前。最後には誰彼構わず甘えだすので、友人からは、絶対に人前で呑むなと言われているのだ。

「これを呑めないとは勿体ないな」

「一応、未成年だし」

「未成年？」

グラスに赤い液体を注ぎながら、彼はなんだそれとは眉を寄せた。

「こっちは何歳からが一人前、大人っていう決まりはないの？」

「身分が高い者は、家督を継げば一人前と見做される。普通は子供のうちから働いているからな。いつから一人前などという話は聞かん」

「そっか。日本ではね、二十歳にならないと大人じゃないんだよね。だから私は、法律上でも後一年はアルコール呑めないんだな」

法律だから呑まないとか、別にいい子ちゃん気取る訳ではない。合コンとかで無理に呑ませようとする奴なんかに向けて、逃げ道にしているだけだ。

「……いちねん？」

「ん？ うん。だって今、十九だし」

ラグラスは一字一字をはっきりと口にし、驚愕に眼を見開いた。え、なにそのリアクション。いや、確かに実年齢通りには見られないけど、そんな驚くほどでもないだろう。

「としうえ…」

「は？」

「…俺は十八になったばかりだ」

じゅうはち。

なったばかり、というともしかして日本で言えば高校生？ うちの弟と同年？

「うそおおお！ 見えない！ 見えないよ！ 二十四、五だと思ってた！」

「お前も十五、六にしか見えん！」

「失礼な！こおんなに色気があるうて！」

「ないわっ！」

「ひっどい！っていうか年下とか詐欺だよ詐欺！十代になんて見えないっ」

「煩い！お前が年上というのも詐欺だ！」

「仕方ないじゃん、父親似なんだから。っていうか高校生…！」

うわぁ、ブレザーも学ランも似合わない！

いっそカボチャパンツに白タイツでも履いてた方が良い。あ、似合うんじゃ。ぷぷぷ。

「何を笑っておる」

「ちよつとした思い出し笑いのだから気にしないで」

彼の顔前にすつと手を広げ、大丈夫、を主張する。

外国人の人って年齢が全く分からないし、あっちから見れば日本人は幼く見えるらしいからなあ。仕方ないのかも。

それにしても君の十代は有り得ない。うん。

赤い液体を喉に流し込む様は無駄に色気がある。ごくり、と鳴る度に上下する喉仏とか、唇の端をぺろりと舐める様とか。

私でもどきりとする程だから、メイドちゃんみたいな女の子ならイチコロだ。

「ラグラスえろい」

「はぁ？」

「もうなんていうか、存在がエロい。ちよつとは自重しなよ」

でないと眼の毒だ。

エロい女の子は可愛いけど、エロい男は女の子の敵だ敵！

毛を逆立た猫のように威嚇していると彼はにやり、と薄い笑みを浮

かべた。

ガタンとわざとのように大きな音を立ててグラスを置く。思わずそちらに意識を持っていかれた瞬間、肩を強く押されて身体はベッドに沈んでいた。

「自重とはどうやってするのだ」

やけに近くにある端正な顔が、にやりと不穏な笑顔に歪んだ。

1-8 (前書き)

冒頭に若干ですが、R-15的な内容が入りますのでご注意ください。

やばい！やばい！やばい！
なんだ、この状況！

両手首を耳の横辺りで捕まれ、足にはラグラスの身体が伸し掛かっていて身動きが取れない。

それ以前に、獲物を前にした肉食獣のようにこちらを見下ろすその視線に、ベッドに縫い付けられたように身体が動かない。逃げろ、戦えという命令を聞いてくれないのだ。
細められた蒼い双眸がきらぎらと私を狙っている。

私の脳内では真っ赤なランプがぐるぐると回り、けたたましく警報が鳴り響いていた。

緊急事態緊急事態！緊急事態発生えー！

助けて！助けて母さあん！

：あ、いや、母親はきつと「そんな男前が初めてなんてやるじゃない。よくやった！」とか言うに違いない。

とうさあああん！兄ちゃんたち！虐めがいのある弟の紘くん！

誰でも良いから助けてえー！

完全に硬直している私を小さく笑って見下ろすラグラスの綺麗な顔が近付いてくるのを、私は黙って…

「られるかああ！」

「っ！おま…え！」

唯一自由に出来た頭を、思い切り彼の額に打ち付けた。
いったああ！うおお、ラグラスの石頭！

「お前は本当に女か！」

「どこをどう見ても女でしょうが！っていうか退け！今すぐ退け！勝手に欲情すんな！」

「お前は俺の妻だろうが」

「なった覚えはないもん！」

「俺が言うのだから、大人しく俺のものになれ」

「私、そういう男大っ嫌いなんだよね！顔が良かったら何してもいいと思うなよお！」

「黙れ」

そう言って、再び近付いてきた顔を、今度は思い切り左を向いて顔を背けて逃げる。二度も唇を許してたまるもんか。

「つつ、あっ！」

うわわあ！首に喰い付かれた！甘噛みするように歯を立てられると沸き上がる、ぞわりと総毛立つ感覚。悲鳴にも似た声を上げてしまった。

くっ、と首をくわえたままで笑うな！ぞわぞわする。

「首が弱いのか？」

「し、知らないよ！っていうか離して。喋らないで」

キスだって、さっきのが初めてだと言ったじゃないか。くすぐられるのは超が付くくらい弱いが、どこが弱いかなんて知るはずがない。ラグラスは首筋を確かめるように何度も舌を這わせる。
やややややあめえろおお！

ぞわぞわ、どころじやない。身体の芯から力が抜けるような感覚が怖い。

気を抜くと鼻から抜けたような甘ったるい声が零れてしまいそうで、唇をきつく噛み締めた。

「やめっ…」

腕を押し返そうとしても力が入らない。弱々しく首を横に振った私の唇を、彼は噛み付くように塞いだ。

ゆ、許してしまった！二度目を許してしまったよお！

なんて嘆いている場合ではなかった。咥内に滑り込んできたぬるりとしたものは、間違いなくラグラスの舌。

ちよおおお！やめええ！

彼の舌は上あごをべろりと舐め、私の舌尖に絡み付いた。

うわぁ、なに、この感覚。ぎゅっと胸を締め付けるような、身体の芯がじわりじわりと熱くなるような。

待って待って！ヤバイ！流される！

そうは思っても身体は動かせないし、ぐてんぐてんの軟体動物のよ
うな状態では逃げられそうにもない。

絡み付いた舌尖が彼の咥内に引き入れられた瞬間だった。

カッと燃えるような味が身体中を熱くさせる。

しまった。

ラグラス、アルコール吞んでたんだ！

ああ、もう駄目だ。

私、ラグラスに喰われるのだ……

唇が離れた瞬間、私は小さく名を呼んだ。

「ラグラス：」

舌足らずの甘ったれた声に自分自身で驚きながら、私の意識はそこでぷつんと途切れた。

酷い頭痛で目を覚ました。

頭の中に小人が居て、どたばたと走り回っているのか。こんな頭痛、インフルエンザで四十度近くの高熱にうなされた時以来だ。うろうう、誰か頭痛薬ください。

「起きたか」

は？

頭上から落ちてきた囁くような声に眉を寄せる。間違いなく、ラグラスの声だ。

えーっと…昼寝、してたんだっけ？

もぞりと身体を動かすと、その微かな衝撃にも小人は敏感に反応し、更に忙しく暴れ出した。

「のおおお！あたま、いたい…」

「本当に酒に弱いのだな」

呆れたようなその声音。なんでアルコールに弱いって知ってるの？
重い瞼を押し上げる。

っていうか何故ベッドの中に、ラグラスと二人で居るの?! どうな
ってんの、これ?!

目の前には意外にも筋肉質で、何にも隠されていない厚い胸板が見
えた。日本人とは違う、白い肌。
まままっまさか!

「やっちゃった!」

「…覚えてないのか?」

「おおおお覚えてない」

長々と息を吐き出したラグラスは、じとりと恨みがましい視線を私
に向けている。

そんな馬鹿なあ!

いくらなんでも、好きでもない相手とやっちゃうのはマズイ。父さ
んが泣く! 号泣する!

っていうか、覚えてないのを怒ってるのか、それとも…

「怒るほどに駄目だった?!」

「は?」

「そりゃ、そんなに胸はないけど! 一応Cはあるんだよ! そんなに
がっかりした?!」

「…ちよつと待て」

「それともなに?! 色気がかけらもなかったとか言う?!」

「とにかく黙れ」

そう言ったラグラスは節くれだった手で私の唇を塞いだ。顔半分がすっぱりと収まるくらいに大きな手。

「お前はな、酒をねだった後、そのまま寝た」

は？

口をもごもごとさせたが手を退けてくれる気配はない。

「いくら酒に弱くとも、一口も吞まずに寝るといふのはどういう事だ」

そうは言われましても。だから、本当にアルコール駄目なんですつてば。

えーとーえーと…

痛みですっきりとしない頭を、何とか働かせて昨夜の記憶を辿ってみる。

キスで酔ったのではなく、アルコールに酔ったというのがまあ、私らしい。唾内に残っていたアルコールだけで酔うなんて、どれだけ弱いんだ。

「もっと、ちょうだい」

その言葉でキスをねだったのだと解釈し、近付いてきたラグラスに、私はお酒！と叫んだ。

「吞めないと言っておったではないか」

グラスに注がれていく赤い液体をぼんやりと見詰める。差し出されたそれを受け取ると、ちびりと舐めるように口に含んだ。身体が一瞬にしてカッと燃えるように体温を上げ、霞みがかった思考が更に白濁していく。

「も、だめ」

グラスを彼の手に押し付けると、そのまま腕の中に身を投げる。ああ、何て心地よい人肌、などと思っているうちに、意識は深く沈んでいった。

「意識のない女を襲う真似はせん」

嫌だと言った女は襲うくせに。

ゆっくりと離された掌を睨み付けてから、何だか悪い気がするので一応ごめんと謝しておく。

愛想が尽きた、という風に嘆息してラグラスは身を起こした。流石に下は穿いているのでほっとした。

彼の髪が差し込む光を受けてきらきりと輝いている。あれ？

「いま、何時？」

「昼前だな」

「うわあ：なんで起こしてくれなかったの？」

「ぐーすかと子供のように眠っていたからな。起こすに起こせぬ」

もしかして、寝顔を見ていた、なんて、乙女ちつく甘ったるいイベントをやった訳ではないよね？

突っ込みたかったが怖くて口に出来なかった。そうだと言われたら、羞恥で立ち直れないかも知れない。

ベッドに顔を押し付けて低く唸る。人生初の二日酔いに加えての羞恥プレイは半端ではない破壊力だ。

「もう木村さんとおっちゃん帰ってきた？」

「いや、分かん」

そっか、と言おうとした私は、次にラグラスが起こした行動に俯せのまま凍り付いた。

子供にするように、後頭部を優しく撫でた。そのままに髪に指を絡ませる。

ああああああ、あまああい！（古いとか言わないで欲しい）
恋人にするような甘ったるい行動は慎みたまえ！

私が心中で雄叫びを上げながら凍り付いた頃、廊下を猛烈な勢いで駆け出した音がしていたらしいのだけど、私はそれどころではなかった。

「小松ちゃんに手を出すなんて何考えてんのよ?!」

「お前には関係ないだろう」

「あるわよ! 彼女はこの星の人間じゃないの! こっちに來た事を向かうの人間に知られても彼女の身が危ないのに! そもそも、この存在を地球の人間に知られたら、資源目当てにやって來るわよ?!」

「全て、お前が招いた事だろう」

「あああああんたはあ! だからって、何故リスクの高い小松ちゃんを妻になんて言い出すのよ!」

「面白いからだ」

「この馬鹿王子!」

「煩い。この雌雄団体!」

ぎゃんぎゃんと。

私の耳元で喚き続ける二人に、私は機能停止を余儀なくされた。

頭、痛い。

もう、何でも良いから何処か行っして下さい:

戻って來た木村さんは、昨日の経緯をメイドちゃんから聞いたらしく、帰って來るなりここに飛び込んで來た。まさか、同じベッドにとは思ってなかったらしく、あんぐりとした後に悲鳴を上げた。

そしてそのまま、二人で口論となって今だ続いている。

もお、勘弁して下さい。泣きそうです。

ベッドに膝を抱えて丸くなったまま、私は二人の口論を聞き流していた。というか、頭痛が酷くて内容なんてさっぱりだ。

のそ、と手を伸ばして、届く範囲をこそごと探ると、どちらかの服を掴む事が出來たので、それを弱々しくも精一杯引っ張る。

「ん？どうしたの？」

気付いたのは木村さんだ。私がもう一度引くと、彼女は側に寄ってくれる。

「頭、痛い。話、違うとこでやって下さい」

弱々しい声に驚いたのだろう彼女は、声の調子を抑え、がらりと様子を変えた。

「どうしたの？薬いる？」

「いる」

「装置直してきたからすぐに戻れるけどどうする？」

「：動けません」

「分かった。直ぐ戻るからね」

そりゃ部屋に戻って一人になりたいが、動けるような状態ではない。木村さんは軽い足音を響かせて廊下を駆けて行った。

「大丈夫か？」

「じゃない」

「水は飲めるか？」

「：飲む」

グラスに水を注ぐ爽やかな音。彼に支えられて身体を起こすと、グラスを差し出してくれた。

ああ、喉を流れていく冷たい水が心地よい。美味しいなあ。

「ありがとう」

二口ほど飲んでグラスを渡すと再び俯せになる。彼は私の頭をゆるめると撫で、子供にするように、ぽんぽんとやった。

：彼が見た目通りの年齢だったら甘やかされていると感じたろうが、年下だと知った今では、無駄に子供扱い、恋人を甘やかしているようにしか思えない。

そもそも同年代の男が、これだけ落ち着き払っているのがおかしい。うちの弟はこんな気を使えないぞ。帝王学とかそういうのを叩き込まれたと成果だとかいうのだろうか。

ぐるぐると回る思考。だがどれも、まともには纏まらずに霧散していく。

「なんなのよ。いちゃつかないでよ」

扉が開いたと思ったら、木村さんの呆れた声が飛んできた。いや、どこをどう見たらいちゃついてんですか。

「気持ち悪くはない？」

「はい」

「じゃあ、鎮痛剤だけで大丈夫ね」

再びラグラスに起こして貰うと、木村さんは白い錠剤を私の口に運んだ。じわり、と広がる独特の苦味に顔をしかめると、飲めと言わんばかりに唇にグラスが押し付けられる。

「すぐ効くからね」

その自信満々な言葉に危機感、というか、物凄い不安を覚える。飲み下した錠剤を吐き出したくなるほどに。

「…木村さんが作ったとか言う？」

「あら。よく分かったわね。製薬会社に居た時に開発したの」

出回ってる医薬品より効くんだから、と胸を張った木村さん。色々と突っ込む所はあるが、これだけは聞いておかねば。

「副作用…とかは？」

「丈夫そうなご近所さんに市販薬のパッケージに入れてどうぞ、って配ってみたけど、全然！」

「お、鬼か」

「え、なに？」

にこにこと全く悪びれた様子もない。これは、本当に悪いだなんて思っでない顔だ。何て自己中心な生き物。

き、木村さんって、こんな人だったんだ…

我が身の心配が無いわけではないけど、木村さんの元ご近所さんが無事だと信じてみる。頭痛も和らいできた気がするし。

「小松ちゃんはラグラスと結婚したいの？」

唐突な話題転換に私はむせた。

「ちょ、待って。まずね、きっと誤解してると思うから言うておくけど、やってないからね」

何もないからとは言えない。濃いキスをされた上に、首筋には齒型が残っちゃってるかもしれないし。

「ラグラス。女同士の話があるから出てって」

私が扉を指差すと彼は僅かに眉を寄せたが、黙って出て行ってくれ

た。

さて、と。念の為、指輪を外しておく。

「私、結婚するつもりも、彼と付き合うつもりもありません」

きっぱりと宣言しておく。ラグラスの気まぐれで木村さんの恋敵になるつもりは毛頭ない。

「でも、あれは言い出したら聞かないわよ」

「だから、今だけ言わせておけば良いんですよ。頭痛が引いたらすぐ帰って、こっちにもう来なければ良いんだし」

「…狡いわね」

「じゃあどうしろと？」

木村さんは、いやまあ、と頬を搔いて頷いた。

そもそも。私がここに居ること自体が、木村さんにとって迷惑な話だろう。

「でもいいの？ あんな美形、地球には居ないでしょ」

最初は抱き着いてたじゃない、と言う木村さんに私は首を横に振った。

「私、美形って好みじゃなくて。最初は珍しいから触っておこうと思っただけで、ほら、芸能人だーみたいなのリですよ。それより木村さんこそ、私に取られたら困るでしょう？」

「ううん。私、種が欲しいだけだから」

きっぱりと言う木村さん。感覚が私と違い過ぎて理解不能だけど…それで良いならもう。木村さんたち…えーと…なんとか星人って、

恋人とか夫婦とか、そういう概念はないのかな。子孫さえ残せればそれでいいのかも。

「小松ちゃんが採取してくれたら楽ね」

「：謹んで断ります」

木村さんと話しているうちに頭痛はすっかりと引いた。恐ろしいほど効く木村印。怖いことは考えない考えない。

帰り支度の為、セージさんが持ってきてくれた私の部屋着は、クリーニングにでも出したかのように皺一つなくぴしりと折り畳まれており、分不相応だ！と言ってやりたかった。セットで五千円ほどの下着まで丁寧に畳まれていたものだから、申し訳なさすぎて寧ろ泣ける。

それらを着込みながら目茶苦茶な一日半を反芻していたら、木村さんに聞きたい事を思い出した。

「なんでここに武器を持ち込んだんですか？」

「ふえ？」

食欲が湧きそうにない青い果物を口にしていた木村さんは、きよとんと睫毛をしばたたかせ、首を傾げた。

何故そんな事を聞くのか、と言いたげに。

「あの頃ね、まあ酷い国だったのよ。国王も貴族も遣りたい放題、逆らえば殺される。皆、怯え暮らしていた。そんな中、ロベリアだけは違ったのよねえ」

恋する乙女のようになった木村さん。ぽんやりとその頃を思い出しているようだった。

「彼の領地は国境沿いで、国王の圧政も弱かったのよ。自分の領民は守る事が出来ても、他の国民は守れない。近隣の領主は、国王と側近たちに怯えて何も出来なかった。立ち上がろうにも立ち上がれなかったのよ」

「市民は立ち上がらなかった？」

「無理無理。食べる事もままならないのに、そんな余裕なんてどこにもないわよ。だからね、私が武器を与えたの。この星には火薬もないから用意するのが大変だったわよ」

「で、そのせいで軍事国家になったと」

「扱える人間はごく一部。他の国に流出したら、それこそ大戦になっちゃうからね」

「なぜ、そんなに肩入れしたんですか」

「あのね！ロベリアはね！ラグラスの何倍もいい男だったのよ！容姿はラグラスより男っぽい感じで、頭脳もなにもかもが素晴らしかった！何としてでも種が欲しかったの」

「結局、あんたの欲望だけかぁ！」

「うん！」

ああもう。そんなキラキラと瞳を輝かせて…
悪気が全くない分、この人、心底質が悪いぞ。

「ラグラスが可哀相になってきた」

「え、なぁに？」

「…何でもないです」

結局、木村さんの「種が欲しい・子孫を残したい」という基本的欲求にラグラスは振り回されているのだ。

「でも。それだけ助力したのに、種も貰えなかったんですか？」
「それだけは言わないで…」

がつくりと肩を落とした木村さんも被害者なのかも知れない。
酷い男だ、初代国王。

ふと思い出して壁に頭を打ち付けなくなるくらいに恥ずかしい、という出来事はそうそうないと思うけど、誰にでも一つはあると思う。あれは忘れもしない中二の夏。雨上がりで蒸し暑くて、ちょっと朦朧としていた私はチャリで豪快にこけた。

スカートがめくれ上がり下着は丸見え。あまりの羞恥に慌てて起き上がった瞬間、チャリの下敷きになっていた右腕を無駄に骨折。

一緒に居た次男に間抜け過ぎだと爆笑されたっけ：

あ、泣きそう。

泣きたくなるぐらいに恥ずかしい。

「あ、そうそう」

思い出した、と私を振り返った木村さんは、肩を竦めてくつくつと笑った。

「さっき戻った時に、小松ちゃんの携帯が鳴ってたから出ておいたの」

その言葉に、手にしていたグラスを取り落としそうになる。何とか持ち直してテーブルに置くと、私は声を絞り出した。

「ま、まま、まさか！」

「そう。お父様」

「うわあああ！何言っていました？！」

「小松ちゃんの声で、いつもの調子で返しといたから」

「そ、そんな事も出来るんだ…便利だねえ」

にっこりと笑った木村さんだったが、唇の端がぴくぴくと痙攣している。爆笑したくて仕方ないといった風だ。

うちの父親、毎晩のように電話してくるのだが、それをすっかりと忘れていた。今日は何したんだ？ご飯食べたか、なんてどうでも言い話題だが、出ないと延々と掛けてくる。携帯を忘れて遊びに行った時なんか電車で一時間程の実家から形相変えてやって来た。あの時の表情は、一生忘れない。

最近は週末だけのバイトを始めたので、出られないから掛けてくるなど言っていたのに、掛けてきたのか：

「何で出ないんだ、男でも出来たのかって泣きそうな声してたから、明日締め切りのレポートがあつて、父さんに構ってる暇はない。次掛けてきたら、母さんに言い付けて携帯取り上げてもらうからね！って言ったら、ごめんなさいって言ってたわよー」

「…適切な処置、ありがとうございました」

恥ずかしい。今なら憤死出来る。あんなに恥ずかしい事もうないと思っていた、中二の夏くらいに。

うちの父親、心配性どころじゃないのだ。度の過ぎた過保護。もうあれは病気だ、病気。母親は放任主義だというのに、どうして父親はあなのだろうか。

「ラグラスに会ったら面白そうね」

「面白くありません！血の雨が降る！死ぬ！ラグラス死ぬから！」

あの父親ならやりかねないのだ。父親を犯罪者になどしたくない。木村さんは何かに耐え兼ねて大笑いした。何と失礼な。

「そもそも、小松ちゃんがラグラスに嘘なんか付くからいけないのよ」

「うそ？」

「そうよ。結婚までキスをしないだなんて、日本なら幼稚園児でも信じないでしょ」

ああ、それはもう。何故あんな事を言ったのだと、昨日から何度自分を呪ったことか。

「後悔先に立たず、ってやつですよねほんと」

「ああ見えて、冗談なんか通じないんだから。国を背負う人間にしては素直過ぎるのよね」

「オレオレ詐欺に直ぐさま引っ掛かりそうですよね」

「思うわぁ」

「唐突だけど木村さん…タイムマシンとか開発しないんですか？」

あったら、過去に戻って自分の口を塞いでやるのに。

「過去を弄って未来を変えるってのが、私の理念に反するのよ」

ごめんね、と言う木村さんに首を振って見せた。そう言うってことは、造るのは可能なんだろう。

確かに、タイムマシンなんか合ったら大変なんだろうな。現在ががらりと変わってしまうかも知れないし。

失敗をしなければ人間成長しないと思う。失敗を無かった事にするため、過去に戻ってたら埒が明かないだろう。

いや、でも今回は戻れるもんなら戻りたい。切実に。

「困らせてやろうと思ったただけなのに、結婚するとか思ってもみなかった」

「好みだからじゃない？」

「は？」

「小松ちゃん、ラグラスの好みだもの」

うええええ？

冗談にしても有り得ないでしょ。

「な、なんで？どこが？ありえなくないですか？」

「ロベリアも、あの子の父親も、妃に選んだのは小松ちゃんみたいな可愛い子だったのよね…」

「な、なんですかその恨めしそうな目は。木村さん、変身出来るんだから、相手の好みになれば良いじゃないですか」

「それがねえ…どれだけ好みの外見になっても、私は魔女だからダメだとか言うのよ」

「ま、魔女」

いやそりゃまあ、化学のかけらもない世界で木村さんの知識も、姿を変えられるという能力も、異質だろうと思うけど。そのどちらも、地球であっても異質なんだけどさ。

「ちょっと交配してくれるか、種くれるだけでも良いのにね」

「…そういう、若干デリカシーが無いのがダメなのかも」

「え？なんか言った？」

「ううん…なんでもないです」

残念な美人だなんて思ってないです、はい。

帰る前にご挨拶せねばと炊事場へ向かった。セージさんとメイドちゃんに（彼女はたまたま居ただけみたいだった）ご挨拶してから研究室に向かう。

ラグラスの耳に入る可能性を考え、もう会うことはないと思うけど、とは言わず。

コツコツと響く木村さんの足音に、ぺたぺたと響く私のスリッパの足音。：何か間抜けだなあ。

「何かやり残した事とかなあい？」

「え？ うん：特に、は」

小さく胸に広がるもやもや感。ぐっと胸を潰されるような苦しみ。唐突に涙が零れそうになった。

ああ、これは、淋しいだ。

過ごしたのはたった一日半だけど、この汚れていない世界に愛着に似たものを抱いている。見慣れない食べ物ももっとあるだろうし、動物や植物だって同じだ。

じわじわと広がる感情。何だか泣けてくる。

おっちゃんとラグラスにさよならを言えるだろうか。

そんな事を考えているうちに研究室に到着し、木村さんが扉を開いた。座っていたおっちゃんとラグラスが腰を上げてこちらへ来る。

「あーコマツ？」

「疑問形？」

何だか外国人さんに声を掛けられたみたいでちよつと笑える。おっちゃんはごほん、と咳ばらい一つ落として布袋を差し出した。

「セージからだ」

「セージさん？」

袋を覗き込むと中には、昨日セージさんが出してくれたマフィンのような黄色い焼き菓子が入っている。

私が気に入ったのを覚えてくれていたらしい。

「お前が美味しいと言ったのを覚えていたらしいな」

「小松ちゃん？」

唇を噛み締めて俯いた私を、木村さんは不思議そうに覗き込んだ。今にも涙が零れそう。

駄目だ、やめて。だって、もう会えないのに。ありがとうも言えないじゃない。

「……頭痛くなってきた」

「じゃあ戻ろうか」

こくりと頷いて彼女の手首を掴んだ。

木村さんはリモコンを操作して装置を起動させたらしい。ブォンと機械音がして、木村さんは行こうか、と私の手を引いた。

「お世話になりました」

二人の顔を見れず、床に視線を落としたそのままに頭を下げる。

「アイ」

名を呼ばただけだというのに、鼓動が激しく跳ねた。何だその声。低く響くくせにやたらと甘い。

左手首を捕まれ、反射的にそちらを見遣ってしまい、私は心底後悔

した。

じっと私を射る蒼い視線。それは私を欲している、と、恋愛経験の乏しい私にでも分かるほどに熱を帯びていた。煩い。心臓がどくどくと煩い。好みじゃないはずなのに。

「次はいつ来る」

「へ？」

「いつ来るのだ」

「……あーうん。しばらくは忙しいから、無理かな」

「そうか」

そう言った彼は、腰を折って顔を近付けてきた。驚く事もなくゆっくりと目を閉じて、落ちてきた唇を受け止める。一瞬だけ触れて、啄むようにして離れていく。

「何故、泣く」

「なんでもない」

頬を伝った涙を不信そうに眺め、彼はそれを長い指で拭う。別れる淋しさと、ちくちくと良心の呵責を苛む痛み。押し潰されそうだ。

「またね」

「ああ」

嘘を付いてしまった。

うやむやにしようと思ったのに、また、と嘘を付いてしまった。ごめん、ラグラス。

離された左手を胸元できつく握り締めた。

潜ったばかりの扉を再び潜ると、見慣れた木村さんの部屋。

ああ、帰ってきた。

その安堵感に膝を着いた。

けれど、帰ってきたというのに、ぽっかりと胸に広がる空虚に涙が止まらない。

「嘘つくって、気分悪いですね」

「そう？」

何で泣いてるの？と言いたげなその声音に、私はがくりと肩を落とした。情緒もなにもないのかこの人は。

もつとこう、淋しいねとか、悪いことしちゃったわねとかないのか。

のほほんと平穏な日々を送っていた私が、想像もした事のない世界に巻き込まれた、たった二日の非日常。

今でも、夢だったんじゃないかって気がしている。

未だ残る唇の感触。

小指に嵌めたままのリング。

手にはセージさん手作りのマフィン。

夢ではない。夢ではないのだという、非日常の確かな証に目眩がする。

父親からの着信を告げるけたたましいコール音が、否応なしに現実を突き付けていた。

天才の憂鬱（前書き）

1－1・2の木村視点。補足のようなものです。
普段、三人称の文章しか書かないものですから、書ききれない部分が出てきますねえ：

天才の憂鬱

「小松ちゃんお待たせー」

自室のドアを開けた瞬間、異質な空気に眉を寄せた。

トイレと浴室の扉が並ぶ短い廊下。そのトイレの扉が開いていることに気付いてひやりと背筋が凍る。その先にある八畳の1Kへと続く扉は閉じられており、籠ったテレビの音が聞こえる。だが、人の気配はない。

この部屋に小松ちゃん一人を置き去りにして二十分は経過している。待っていると言ったけど眠くなったから帰った、というのなら良いのだけど。一縷の望みを胸に部屋を覗き込み、私はああ、と声を上げた。ローテーブルに残された、女の子らしくないパールブルーの携帯電話。これを忘れて帰る事はないだろう。

しまった…タイマーセットしてたの忘れてた。

言葉の通じない世界に放り込まれた小松ちゃんを想像してみる。夢だと決め付けて、そのまま寝そうな気がする。それだと楽なんだけど、そうはいかないだろう。

チェストに置いていた携帯電話を取ると、通話履歴を開いて発信を押した。

「はい、花本です」

毎度変わらぬ無機質な、事務的な声。電話の向こうにある表情も相変わらずなのだろう。

「幸司くん、非常事態よ!」

「今度はどんな厄介事ですか」

「ビオラに、無関係の女子高生が行ってしまったの！今から行って何とかしてくるから、幸司くんはフォローお願い！寮のことよろしくね」

「：香奈恵さん」

「ギリアにも伝えといて」

「分かりました。後で詳細の報告をお願いします」

「はい」

通話を終わらせて、私は小さく息を吐いた。

花本幸司、というのは、私の兄弟である「ギリア」（ギリアの話は、また機会があれば）が雇っている秘書の一人である。グラジオラスの事を知っている数少ない人間で、非常に有能な秘書だ。

三十代前半でいい男の部類に入るのだけど、愛想一つ無い無機質な表情と態度のせいで、女性にはモテない。

私に対しても、とんでもなく素っ気なく冷たい突っ込みをする。あれは相当のMじゃなきゃ喜ばないわよ。

何にしろ、幸司くんなら問題なくフォローをしてくれるだろう。

えーと、予備の翻訳器はどこにやったかしら。指輪タイプのものが見付からなかったので、耳に入れ込むタイプのやつを嵌めておく。

違和感があるので、あまり好きではないのに。

ああ、もう、まいったなあ。全て説明するべきか、それとも、記憶をいじってしまうべきか。

小松ちゃんという子は、黙っていれば綺麗な子猫のように愛らしい。髪も目も肌も色素が薄く、身長は標準より高いというのにひよろりとか細く庇護欲をそそられる。

だが口を開くとすっぱりさっぱりとした男前な性格で、どこかのほんとした面白い子だ。

女の子が羨むような、嫉むような外見だというのに、自分では全く

そうは思っていない。幼い頃から同性にばかり囲まれ、女の子たちにちやほやとされてきたからか。（しかも、学年で一番モテたと言っていた。普通、もっと中性的な子がモテるんじゃないかしら）女の子が好きで、どんな子にも優しく、逆に異性には手厳しい。一度、近所のコンビニでちゃらちゃらした男の子たちに声を掛けられているところに遭遇したが、見たこともないような冷たい眼差しで「結構です。あなたたちみたいな軽そうな人たちって、物凄く嫌いなんで、もう話し掛けないで下さい」と冷たくあしらっていた。可愛い外見に騙されたその子たちは、ぽかんと口を開けたまま固まっていた。

あああ。あの子に変な負担は掛けたくないなあ。笑いのツボが一致する、数少ない同士なのに。

結局、何一つ決められないままに私は扉を押し開けた。

小松ちゃんを運んで戻ってきたラグラスは、息を吐いてから椅子に腰を下ろした。

私に後頭部を叩かれた彼は不機嫌だが、ベッドにシーツだけ引いて小松ちゃんを放り投げてきた、と言った彼が容赦なく叩かれても文句言えまい。

「あれを真似たのだな」

彼の言葉に私はぎくりと肩を竦めた。

やはりか、と嘆息したラグラスは確信したらしく、ぎろりとこちらを睨んでいる。

小松ちゃんの容姿はラグラスの好みに違いない。私が種を貰おうと親子三代に渡って付き纏った結果、小動物系の可愛い子が好みなのだという分析結果を出した。しかも中身は天然ね。

以前、小松ちゃんの姿を借りて誘惑しに来たら、あっさりと見破られてしまったのだ。その理由が、都合が良すぎる、それだけである。何だか色々と自信を無くすわ。

さっきも抱き着いてきた小松ちゃんを胡散臭そうに見ていたくせに、私ではないと分かると態度を変えたし。

「ラグラスの好みだったでしょ？」

小さく鼻を鳴らすと、彼は片眉だけを器用に持ち上げて見せた。

ふんだ！こっちは産まれる前から見てるんだからね！あんたの事なんて全部まるっとお見通しよ！

「それで、どうするのだ？本当に見逃すつもりか？」

「彼女には悪いけど、あっちに居る間は監視でも付けさせてもらわ」

小松ちゃんはある程度賢い子だ。なんの証拠も無い話をおいそれとするような事はない。損得がきちんと分かる。

信用はしているが、目の前に居る怪訝な表情のデンファレと、あっちにいるギリアの手前、それくらいしておかなくては納得してくれないだろう。

「この星が平和ならば、私はそれでいい」

「大丈夫よ、あの子は」

「お前、それほどにあの娘を気に入っているならば、あの娘に孕ませてはどうだ」

「そうだな。俺をあれほどに睨むくらいだ」

「…孕ませても、ちよつと優秀で長寿な人間しか産まれないわよ」

確かに、抱きつかれてたラグラスに嫉妬を覚えるほどに小松ちゃんはお気に入りだ。

だが、母体がグラジオラスでない場合に産まれてくるのは母体の種族である。実際、私の親がライオンに産ませた子供はちよつと長寿なライオンでしかなかった。

優秀な子を残したいのならグラジオラス同士で産めば良いと思うだろうが、元々生殖力が低い私たちでは子を残せた事はない。

「だから、種頂戴」

「やるかっ」

ロベリアの種を狙って六十年。一度も報われた事のない私は、心底可哀想な女だと思う！

2. 非現実来訪

「イ、イケメン」

隣でぼさ、と紙袋を落とした音がした。そう言えば美奈は、イケメン好きだったな：

あれ？でも、ジャニ系の可愛いのが好きなんじゃなかったけ？しかもJrとか若い子。イケメンならなんでも良いのか？

隣で硬直しているであろう親友の視線だけでなく、私の、それどころか道行く人々の視線全て集めているイケメン。

綺麗な金髪はプラチナブロンドの見本のようで、きらきらと太陽光を跳ね返して輝いている。肌は陶器のように滑らかで艶やか、染みもシワも見当たらない。宝石のような蒼い双眸が、静かにこちらを見下ろしている。

白シャツにジーパン、オレンジのダウンジャケット。裾上げの必要が無かっただろう股下の長さにびっくりだよ。っていうか、普通に売ってるのだろうか、このジーパン。彼が着てれば量販店の安物でも、高級ブランドに見えるだろう。

ちくしょう、なんて汚い言葉を呟いてしまう程に完璧だ。

完璧な美貌はほとんど無表情のようだが、ぴりぴりと伝わってくる刺すような怒り。これ、完全に私に向かっていているよ。

怖い。怖い怖い怖い！！

っていうか、何で居るんだおまえはああ！

「何故、会いに来んのだお前は」

「ななななな」

「な？」

「何で居るの！」

「お前が会いに来んからだ」

至極当然、と言わんばかりの美形に、私はがくりと肩を落とした。平穏な日々が音を立てて崩れ落ち、完全終了しようとしている。誰か、助けて。

ビオラから戻ってきた私は、まず、父親の電話をあしらい、母親に課題の邪魔をすると言い付けた。今頃は鉄拳込みのお説教が行われているだろう。

そんな事を考えながら部屋に戻り、泥のように眠った。翌日の朝ごはんは間に合ったのが奇跡である。

平穏無事な一週間を過ごした後、木村さんから週末のお誘いを受けた。

「木村さんは毎週末向こうに居るの？」

「そうね、大体は向こうに居るわ」

「っていうかさ、何でここで管理人なんかしてるんですか」

「あーまあ、色々あるんだけど…面倒だから、今度説明するわね」

行くか、行かないのか、と視線で問い掛ける木村さんに首を横に振り、行かないと意思表示をする。

「そっか：また、ラグラスの攻撃を受ける訳ね」

「えーっと、どんな攻撃か知らないけど、甘んじて受けて下さい。私、今月はずっとバイト入ってるし」

「ちょっと顔見せるだけでも」

「私はもう行かないんですってば。ラグラスの攻撃が嫌なら、木村さんも行かない方がいいじゃない」

「どっちでも研究してるし、ロベリアの監視もしなきゃいけないのよねえ」

「ラグラスが居ない所でやればいいんです」

むっと頬を膨らます。

あれは私が居て良い世界じゃない。ラグラスと結婚なんてしようものなら、歴史を変えてしまうような気がする。

国際結婚でさえ文化の違いとかで大変なのに、異星結婚だなんて。

そもそも、ラグラスは人類なのだろうか？

あ、頭痛くなってきた。

「何か色々無理」

「分かったわよ。でも、あの子凄いわがままなんだって覚えててね」
「そういうトコだけ年齢相応ってどうなんですか」

その言葉がどういう意味かだなんて、その時の私はちっとも分かってなかった。

それから一月は忙しいけど平穏な日々だった。

年末が近付いてきたものだから、課題だなんだと忙しく、週末だけ入っているカフェのバイトも慌ただし。あちらの世界を思い出す事もほとんどない日々を過ごし、気付けばあっという間に師走。

今日は、冬物バーゲンに付き合えと、バイト先に乗り込んできた親

友と共に買い物をしてきた帰りであった。

合コンに着て行く服を買った親友は上機嫌で、夕飯を奢ってくれると言っていたのに。

全部、終わりだ…

「ラグラス！」

きき木村さーん！

ラグラスの背後には木村さんの姿があった。あんたか！あんたが連れてきたのか！っていうか、それしかないんだけど。

「外に出ちゃ駄目だって言ったじゃない！」

「これが戻らぬのが悪い」

「ちょ！私のせいにするな！」

「あなた、どれだけ自分が目立つか分かってないわね？！私の身を滅ぼす気？」

「勝手に滅べ」

「ほんっと可愛くない！」

二人がお馴染みの言い合いを開始し、美奈は私のスカートを引っ張った。

美奈は私より随分小さい。言い合う二人に背を向けて、手招く美奈へと腰を屈めてやった。

「何なの、このイケメンと美人」

「えーっと…」

何と説明すべきか。

異星人たちです、なんて言える訳ないし信じて貰えないだろう。

「寮の管理人さんと、そのお知り合い？」

「何で疑問形なのよ」

「いやーほら、うん」

空気読んでよ、空気。私もういっぱいっぴいでしょ？これ以上突っ込まないでよ。

「アイ」

「ふああい?!」

唐突に背後から掛かった声。腹に響く僅かに低い美声に、久しぶり過ぎて鼓動が跳ねた。

名を呼ばれるのは二度目だろうか。名を呼ばただけでこれだから、この声が愛なんか囁いた日には、乙女達がばたたと倒れてしまうだろう。

振り返ると、思いの外近い位置に居るラグラス。首が痛くなる程に見上げないと顔が見えない。

手首を捕まれ、ぐいと引かれ歩き出す。

「行くぞ」

「ど、どこに?!」

「屋敷に決まっているだろう」

「ままま待って!無理だから!待て!」

「何が無理だと言うんだ」

彼がひどく真剣な表情で振り返った瞬間、木村さんの言葉を思い出した。

言い出したらきかないんでしたね…

ちらり、と辺りに視線をやると、嘆息している木村さんと、口を開けて呆けている美奈。それだけでなく、通行人も私たちのやり取り

を見ている。

「とにかく場所を変えよう。美奈ごめん、帰るね」
「うん…」

その視線は説明しろ、と物語っているが、そういう訳にもいかない。
言い訳考えなきゃなあ。

「木村さん、どこか人目の無い場所知りませんか？」
「…カラオケ？」

ラグラスがカラオケ……に、似合わない。似合わなさすぎて笑えてくる。

だからと言って、他に案が浮かぶでなし。カフェ、ファミレス、何処に行っても悪目立ちすること間違いない。
寮は家族であっても男子禁制だ。警備員さんも居るし、ラグラスを連れ込むには無理がある。

「行きますか」

離そうとしない彼の手を引いて、一番近いカラオケに足を向けた。

物珍しそうに辺りをきょろきょろとするラグラスは子供のように何だか可愛い。カラオケに着いても、モニターやリモコンに興味を惹

かれるらしくあれこれ触っている。

木村さんはトイレに行ってくるから、その間に痴話喧嘩でもしてなさい、と席を外している。

ミルクティーで一息着いた私は、落ち着きないラグラスの名を呼んだ。

「飲み物、飲みなよ」

「ん？ ああ」

ミルクティーをまじまじと見詰めてから、一口飲み干したラグラスは僅かに眉を寄せた。

「甘い」

「じゃ、こっちにする？」

「いや、良い」

何が口に合うか分からないので烏龍茶も頼んであるが、甘いと文句を言う割に気に入ったらしい。

何から切り出すべきか。どう切り出しても、惚気というか自意識過剰にしかならない気がする。は、恥ずかしい：

頭を抱えたくなったが、木村さんの前でするよりはマシだろう。

「：何で会いに來たの」

「お前が来ないからだろうが。この星では夫を蔑ろにするのか」

「それは人それぞれだけど、正式に結婚した訳じゃないし。ここではね、色々手続きとかが必要なんだよ」

「それでも、お前は俺の妻だろう」

「何で私なの？ 異星人なんて面倒なだけじゃない。メイドちゃんみたいな可愛い子にすれば良いでしょ？」

「一度決めた事を、俺は曲げん」

「な、なにを自信満々に言ってるかなあ?! 好きでもない人間嫁にして、なにが楽しいの?!」

彼にとって、俗に言う「政略結婚」なんてものが当たり前なのだとしたら、愛のない結婚も理解するしかない。だが、それには結婚すれば得られるメリットがある。私と結婚したって、何のメリットもないと断言出来るぞ。むしろ、デメリットならある!

胸を張ってデメリットでも説明してやろうかと思ったのだが、彼は想像を超える表情を浮かべていた。

きょとん、と。子供が「それなあに?」と目をぱちくりとさせているようなそれに、私は面食らって言葉を失った。

「誰がお前を好いていないと言った」

………は?

「俺はお前を気に入った。だから妻にしたのだ」

えーっつと。ちよった待って。聞かない方が良いつて言は分かっている。その思考を巡らす間もなく、迂闊な私はぺろりと口を滑らせた。

「私のこと好きなの?!」

「ああ」

間髪空けずに返ってきた肯定の言葉に、私はがっくりと項垂れる。逃げ場を完全に塞がれた気がした。

「痴話喧嘩終わった?……て、小松ちゃん何してんの」

「違いますからもうほんと勘弁してくださいすみませんでした生きててすみませんほんと」

「どうしたの?」

「知らん。さっきからこうだ」

二人が怪訝に思っても仕方ない。

ラグラスの答えは、ボディに重い一発を頂戴したくらいに効いた。そりゃあもう瀕死ですよ。

告白されるのは慣れている。ただし、相手は女の子ばかりだった。男の子に告白されたのは幼稚園の時だったか。近所の公園で仲良くなった男の子に、大きくなったら結婚しようね、と。子供らしい、ほほえましい約束をしたのだが、父親は激怒してたっけ。公園でその子と会うことは無くなった。それどころか、他にも居た仲の良い男の子たちは、遠巻きに私をみるようになり、公園には兄のどちらかが付き添うようになった。きっと父親が何かやらかしたに違いない。

墓穴を掘った私は、ラグラスに二度目の告白をされてしまったのだけど。

というかですよ。あんなあっさりと頷かないでほしい。本当に好きなのだとしても、もっとこう駆け引きというか、勘違いするなーとか言っただけだったよ。

思い出しても恥ずかしい! 奇声を上げるほどに。他に誰もいなくて良かった、ほんと!

実を言うと「私のどこが好きなの!？」という、私としては至極当然な問いを突き付けようかとしていたのだが、それはもうただのバ

カップルのやり取りでしかないと思い止まった。この男なら間違はなく真顔で答える。痛い目に会うに違いない。

打ちのめされた私はそのまま部屋の隅にうずくまり、ぶつぶつと念仏を唱えていた。神様仏様木村様。どうぞこの男前をあっちの星に追いついて下さい。魂はちょっと無理だけど、向こう一週間分、いや、一月分のお菓子くらいは捧げますから。

私は意を決して立ち上がった。そうして、ソファに悠々と腰掛けているラグラスにビシリ！と指を向ける。

「とにかく帰れ！悪霊退散！」

「悪霊とは何だ？」

「ええーい！良いから帰れー！迷惑だー！私の平穏な休日を持せー！」

「お前が来るならば、帰ってやろう」

「だから！私にはこっちでの生活があるの！ニートのラグラスと違って忙しいの！明後日締め切りのレポートあるんだから帰りなさいっ」

「いやだ」

ぐぐぐぐ。何て我が儘な男だ。これが可愛い女の子なら、仕方ないなあ、と思えるのに、図体のでかい子供のような男が相手では苛立つばかりである。

頼みの綱である木村さんと言えば、私のニート発言がツボに入っただらしく、ニートって、と何度も呟いては笑っていた。そうだね、木村さんがなんとか出来たのならラグラスはここには居ないよね。その姿に私は決意した。頼れるのは自分だけなのだ！

「分かった。レポート提出すれば翌日は休みだから、そしたら行くう！だから今日はとにかく帰れ」

「よく分からんが、それまでここにおる」

「おまいはああ！だから、何処に居るつもりなの！言っとくけど、私たちの部屋は男子禁制だからね！入れないからね！」

「そうなのか？」

「え？ああ、そうよ。女子寮だから、家族であろうと入れる事は出来ないわ」

「さあ、だから帰れ！」

彼は鼻息荒く言った私をじっと見た後、木村さんに視線を移動させた。

「こちらにも宿はあるのだろうか？」

「は？」

「宿を取る。こちらの通貨を貸せ」

貸せというか出せと言わんばかりの彼に、ああ、自分で稼いだ事のない育ちの良い坊ちゃまって感じたなあと感心する。いや、がき大将か？…なんて感想抱いている場合ではない。

「無理に決まってんでしょ！ホテルに泊まるだなんてとんでもないわよ」

「そうだよラグラス、絶対行くから、あっちで待ってなって」

「知った事か。待つなど性に合わん」

こいつ！何て自己中心的な男だ！

ぎりり、と三竦み状態をしばし続ける。蛇と蛙とナメクジ、だっけ？この場合、私がナメクジだろうか。

「分かったわよ…知り合いになんとかしてもらおうから。それくらいは待ちなさい」

深々と嘆息した後、木村さんは携帯を取り出した。

あのね、木村さんが甘やかすからいけないんじゃないかな?! この我が儘は木村さんのせいじゃない?!

喉まで来ている言葉を何とか留めてぎりぎりどと歯噛みする。ここでそれを口にしても何の意味も無い。それどころか話が進まないだろう。

いつの間にか目の前に移動していたラグラスに手を引かれ、ソファに：いや、ラグラスの膝に横抱きに座らされた。腹が立つくらいに綺麗な顔は至近距離にある。何だこの体勢。な、殴ってやろうか：ぴくりと引き攣らせた頬を撫でる手を掴み、ぽいと放れば、その手はそのまま腰に回される。

「セクハラ」

「なんだそれは」

「いいから下ろしてよ」

「大人しくしている」

「恥ずかしいの! なにこのラブラブバカップル体勢。心外なんだけど」

意味が分からん、と呟いた後も、腰に回した手を緩めようとしないう。木村さんは呆れたように肩を竦めていた。

うおおお、恥ずかしい! 憤死する!

「あ、お疲れ様。ちょっと出て来れる? え、無理? それじゃ困るんだって。本社に居る? じゃあ今から行くわ。ギリヤにも時間頂戴って言うておいて」

ほぼ一方的の会話を終わらせると、木村さんは行くわよ、と部屋を出た。そこでラグラスの魔の手から逃れた私は、急いで後を追う。

「さっきの誰ですか？」

「私の兄弟に付いてる秘書。事情も知ってるから大丈夫」

「木村さん兄弟居たの?!」

「ええ。今から会うのと、もう死んでしまってるけどライオンとコモドドラゴンが一人ずつ。あれ、一頭って言うべき？」

「動物?!」

「ええ。生命力に惚れたらしいわ。母体がグラジオラスじゃないと、グラジオラスは産まれないから、孕ませたのは完全に親の趣味なんだけどね」

「へえ：でも、生命力ならゴキ：」

「言わないで！虫全般苦手だけど、アレは死ぬほど嫌いなんだから！」

悲鳴にも近い声を上げた木村さんは、名を口にするのも悍ましいとばかりに肩を抱いた。

そんなに嫌いなんだ：そのうち、害虫駆除と称して虫という虫を駆除してしまいそうな勢いである。

会計を済ませて外に出れば、辺りは夕暮れに染まっていた。

「胃が気持ち悪いな」

ちらりとラグラスを見遣ると、綺麗な眉を寄せ不快そうに表情を歪めていた。

「そっかな？こんな高層ビルのエレベーターなんて私も初めてだけ

ど、浮遊感とかほとんどしないよ」

流石、日本一と言われる企業の本社ビルだ。

役員室や社長室があるフロア直通だというエレベーターは、普通のそれよりずっと豪華で、ふかふかのベンチソファまで設えてある。ごくごく一般市民の私だが、学校柄、社長令嬢などとも親しくしていた。豪邸や社長室にお邪魔する事も何度かあったが、それとは格が違う。

一般市民から見ればお金持ちなんてみんな同じだけど、お金持ちにもレベルがあるんだなあ。

ゆっくりと停止し、重厚な扉が開いた。

「わああ…ば、場違い！」

「え？」

ロビーも、その奥にあった一般社員には利用出来ないエレベーターも、そりゃあ立派でしたけども！

一步踏み出した床にはふかつとしたカーペットが引いてあり、ゆっくりと靴が沈み込んだ。壁に飾ってある絵画は億単位の値段が着いていそうである。流石役員フロア。急に自分の存在が場違いにしか見れなくなり、心許なくなった。

ちらり、とラグラスを見るが彼は全く動じた風もない。

ですよね、小市民は私だけですもんね：

木村さんもずかずかと何時ものように進んでいくので慌てて後を追った。

「香奈恵さん」

機嫌の悪そうな、と声だけで分かる、低音で響く誰かの名前。聞き覚えがあるなあと思ったら、木村さんの名前だった。

振り返ると上等な男の人が無愛想にこちらを見ている。高そうなスーツを隙無く着こなしたその人は、三十代後半くらいだろうか。背はラグラスよりは低いが百八十近くあるだろう。細身の、どこか苦労している感が漂う、ちよつと陰のあるイイ男だ。

この人が木村さんが言っていた秘書さんだろう。秘書といえば美人秘書だが、この人敏腕秘書っぽい。

「ギリアの時間取れた？」

「十分だけですよ」

ええ、と笑顔で頷いた木村さんに、秘書さんは深々と溜息を吐き出した。その表情から、今まで彼女に振り回されたであろう苦労を察する事が出来た。

頑張れ！苦労人！

「全てお前が招いた厄介事ではないか。わしは知らん」

きっぱりと言い放ったその人を、私は見たことがある。画面の中と新聞で、だけど。

村越恭一郎。公表している年齢も実年齢も知らないけれど、一見するに七十は越えているだろう。

日本有数の財閥である村越グループの会長。食品から玩具、サービス業まで手広く手掛けていることもあり、小学生も高学年になれば知っているくらいの大企業だ。

小柄な身体から溢れるのは、身を引いてしまうほどの威厳。

彼が、木村さんの兄弟ギリアさんだというのだから驚いた。まさか、こんな大物とは。

その大物に気圧されるよりにより、私は大層な衝撃を受けていた。木村さんがあらましを説明している間、私の頭はそれでいっぱいになっていて、口に出さないようにするのに必死である。

ギリアさんの冷やかな言葉に、木村さんがやっぱり？とへらりと笑った瞬間、私は叫んだ。

「美女じゃない！」

心からの叫びに、ラグラスは呆れたように息を吐いた。

「お前は…」

「小松ちゃんはどこまでいっても小松ちゃんね」

「だって！なんで？！どんなタイプの美女がくるか、楽しみにしてたのに！何でおじいちゃんなの？！綺麗なおばちゃんなら良かったのに！」

「スターチス…」

「やめて、そんな目で見ないであげて。この子は本当に美女が好きなのよ」

「変わってるんですね」

「あ、なんか秘書さんにしみじみと言われると、なんだかとっても悲しくなるよ？」

「それは失礼しました」

薄く笑った彼は微塵も悪いだなんて思っていないだろう。別に変わってると言われた程度で傷付いたりしないが、淡々としみじみと言われたものだから、ああ、やっぱり変わってんのかな？と自覚させられてしまうというか。

この機械的な口調がよくないのだ、きっと。

「わしがこの姿なのはな、嬢ちゃん」

「はい？」

ギリアさんに視線をやって、私は呆氣に取られた。

「こんなんじゃない威厳とかないでしょ？」

「うっわああ！そっちのがイイ！」

ギリアさんはそれはそれは妖艶な金髪美女へと姿を変えていたのだ。口角のきゅっと上がった薄い唇といい、ぱちりとした水色の目元にあるほくろといい、これぞ「ザ！美女！」というお顔！次のボンドガールは、怪盗アニメのゲストヒロインは貴女に決定です！あ、怪盗アニメはフジコちゃんとキャラが被っちゃうから駄目か。清楚な子じゃないと。

「身体は老人のままなのか」

ふむ、と興味深そうにギリアさんを眺めるラグラスに、彼女？はうつとりするような笑みを浮かべた。ううう美しい！

「面白いでしょ」

「面白くないわよ。変えるなら全身変えなさい、気持ち悪い」

「会長のコレを御覧になって、動じないこちらの王子様も変わっていらっしやるんですね」

「しみじみと言うな」

「え、ちよつとギリアさん?!」

食い入るように美女を見詰めていたのだが、瞬きする間に元の老人に戻ってしまった。

な、なんと勿体ない！

「もっと！もっと美女のままです！」

私の切実な願いに、ギリアさんはうつ、と小さく呻いた後に頬を引き攣らせた。

「ここまでくると変態だぞ？」

「失礼な！私は単純に、鑑賞するならご老体より美女のがイイと言っているだけです！皆そうなんです！さあ、お戻りなさい」

「普通、それを思っても口にはしないけどね…」

「流石スターチスのお気に入りだな」

「あ、なにそれちよつとどういう意味?!」

木村さんは心外だわ！と叫んだが、こっちだって心外だ！私はただ、美人が好きただけなんだから！木村さんみたく、自分の欲に目が眩んで星の運命を変えたりしない。私はただただ、美人を眺めたいだ

けなんだから。どこに、なんの被害を生むというのか。

「私欲の塊な木村さんと一緒にされると困ります」

「うわ。それ、キツイ一言だわ」

「事実だからな」

「お前ももっと思慮深く行動してくれ」

「私をすぐ頼るのも控えて下さい」

「なんなのよ！この集中砲火！」

「自業自得」

木村さん以外の四人の声が綺麗に重なり、それに木村さんはがっくりと肩を落としてうなだれた。少しは反省すると思う。

「さあ、もう十分過ぎていますよ。お帰り下さい」

分厚い手帳をばたん、と閉じて敏腕秘書は微笑んだ。出ていけ、と無言の圧力を掛けてくる。

「ええー何も解決してないじゃない。この子預かってよ」

「直ぐに人を頼るなど言うただろう。早く帰さんと政府に嬢ちゃんと星の存在を知られるぞ」

「だから匿って、って言ってるじゃない」

「たまにはこういう事に頭を使い。妙な発明ばかりしおって」

「現代では商売に出来ないような物ばかりで、当社の利益になりませんので、研究費を削減させて頂きたいと思っていますたんですよね、会長」

「そうだなあ」

「ぎりああー」

うーん。大人の会話が始まってしまった。十分だからと追い出され
しまうかと思ったんだけど。

「面倒そうだな」

「ラグラスが帰れば済む話なんだけど？」

ちらりと見上げると、彼はくつりと黒い笑みを浮かべてこちらに顔を
寄せてくる。

「お前が着いてくるのならな」

「無理。明日も講義あるもん」

「ならば帰らん」

近付く美貌を両手で押し退けながら嘆息した。

……話にならない。

夕方の公園で、いやだ！まだ遊ぶんだ！と駄々をこねる子供みたい
だ。大きな子供を持ったような気になるよ。

「木村さん、私帰っても良い？」

「ちよっと待ってよお。研究費のことはナシよ！泣くからね！」

「勝手に泣け」

「どうぞ、私の居ない所でごゆっくりと」

「覚えてなさいよ幸司くん……」

ぼんやりとして見える木村さんがぎろりと敏腕秘書を睨み付けた。
全然迫力はないけどね。

厳つい警備員さんが護る正面入口を出ると、辺りにはすっかり闇が

広がっていた。快適な空間に居た私には寒風吹きすさぶ外気が痛いくらいだ。

さ、寒い。

ぶるりと肩を震わせると、その肩をぐいと引かれた。

「何？」

「寒いのだろう」

そうだけど…

背の高いラグラスに肩を抱かれれば、私の身体は彼の腕にすっぽりと収まってしまう。ほんと、ただのバカップル…

へ、へこむわあ。ちよつとは自重して欲しいのだけど、何度言っても聞いてくれないし。自分がこんな恥ずかしい目に会うとは思ってもしなかった。

「あい？」

「え？」

聞き慣れた声が唐突に名を呼んで私は固まった。

まままままさか！そんな馬鹿な！こんな所に居るはずがない！

ギギギギ、と。

油を注しなさいと言われそうな音を立てて（いる感じで）声のした方向を見遣った。

「桂くん！」

「こんな所で何してんだ」

「桂くんこそ！職場この辺じゃないでしょ」

「取引先だよ」

かっちりとコートを着込んだ桂くんは怪訝そうにこちらを見ている。

そりゃそうだろう。こんな大企業のビルには似つかわしくない三人。そのうえ見たことのないような美人に肩を抱かれている私、だ。

「それで？」

「うい？」

「そちらは？」

にこりと。

桂くんは営業スマイルを作った。
あわわわ。

「寮の管理人さんで木村さん」

「いや、そっちの」

「お前こそなんだ」

あからさまにむっとした様子のラグラスは、ぎろりとキツイ視線を桂くんに注いでいる。

受けて立つ、とばかりに口元だけ笑顔のまま、けれど眼だけが笑っていない桂くん。怖い！怖いよ！

「えーとね！ラグラスといってね、木村さんの知り合い？なんだけど」

「どういう関係だ」

二人の声が綺麗に重なった。ラグラスの声は翻訳機を通してののだが、どんな作りになっているのだろうか。木村さんの翻訳機って凄いなあ…へへへ。

「ねえ小松ちゃん」

「え、はい？木村さんって天才ですねえ」

「いやそうなんだけど…こちらの方って…」

「はい、小松家次男、小松桂斗けいとです」

「…は？」

一触即発的な睨み合いを続けていたラグラスが、呆氣に取られて私を見下ろしていた。

私の兄弟は結構キャラクターが濃い。イケメン兄弟、なんて言われている。それは平凡な私にとって鼻が高い事でもあるが、面倒な事も多い。

長男の大樹^{だいき}は二十七で警察官。

学生空手チャンピオンになった事もあり、がっちり体育会系の無骨な印象を与えるが、笑うと可愛いくて優しい人だ。外見は、下手な男よりカッコイイ母親似で、身内の欲目を引いても男くさい男前だと思う。真面目で曲がった事が嫌い。私が結婚相手の理想として上げるのは大くんだ。大くんが血縁者でなければ、大くんと結婚したい！

高校から十年近く付き合ってる彼女さんは、大和撫子のお手本のよきな美人である。理想のカップルだ。

三男で私の一つ下、高校三年生の紘^{ひろ}。父親の甘い愛らしさと、母親の中性的な美貌を受け継いでいる今時のイケメンだ。二人で買い物をしている時でも色んなスカウトを受けるくらい。

が！思考回路が乙女ちっくで、私が服を買おうとすれば白いふわふわのワンピースとか買わせようとする。別に自分が着たい訳ではないので女装趣味ではないのだが、人を選んで着せたり飾り立てるのが好きらしい。

有名国立大のA判定を貰っている優良物件なのだが、彼女が出来ても長続きしないのが悩みだとか。きつと、乙女ちっく趣味を隠しているからいけないんじゃないかな。

そしてこの次男、桂斗^{けいと}二十六歳。そこそこ大手の会社にシステムエンジニアとして勤めている。

身内の私が言うのもなんだが、今時イケメンの紘くんより男っぽく、色気のある男前だ。二股はしないとは言っているが、付き合った人は私が知っているだけでも十人以上。モテる。とにかくモテる。

「日曜も仕事なの？」

「ここに納めたばかりのソフトが不具合起こしたから、そのメンテに来たんだよ」

休日出勤、と言った桂くんはかっちりとしたスーツとコートに長身を包み、髪もセットしていると仕事の出来る男風だ。社内だけでなく、取引先にもファンが多そう。

「桂くんはサラリーマンなんだねえ」

「何をしみじみと言ってんだ。それよりこれは誰だ」

ずばりと言う辺りが桂くんだ。遠慮が全くない。

どう逃げるかとぐるぐるしていた私は、何の解決策も用意出来ずに口を開いた。

「そ、それは、ラグラスといいます」

「中学英語教科書か。どんな関係かって聞いてんだけど」

「夫です」

「違う！ラグラスはちょっとあっち行つてて！」

「嫌だ」

「もおおおお！話進まないでしょ！」

「小松ちゃん」

にっこりと綺麗に笑う木村さん。その笑顔に嫌な予感を覚えた。

「お兄様には私から説明するから、どこかお店にでも入りましょう」

か」

そう言った木村さんは、桂くんにはきらきらと輝くような笑顔を向け、寮の管理をしております木村と申します、と頭を下げた。

ミルクレープをももごと咀嚼しながら、木村さん凄いなあ、と一人感心していた。

桂くんが案内してくれたのはパスタやグラタンも出してくれる、五人掛けのカウンターとテーブル席が四つだけの小さな喫茶店だった。食事時だからお客さんは少なく、店員のおばちゃんと会話している常連客らしいおっちゃん。テーブル席にOLさんらしいお姉さんが二人。それだけだった。お姉さん方はラグラスと桂くんを見て、レベル高つと声をあげたが、ちらちらとこちらを見るだけ。

お腹は空いているのだけど、この四人で、この空気で食事をする気にはなれない。木村さんと二人ケーキセットを頼み、桂くんはコーヒー、ラグラスにはミルクティを頼んだ。

「村越会長のご親戚とは…その関係で寮の管理を？」

「ええ、そうなんです」

「ギ…村越さんと寮になんの関係が？」

きょとん、として木村さんに問うと、横に居る桂くんから溜息が漏れた。

「自分の大学なのに、経営が村越グループだって知らなかったのか？」

「ええー?! そうだったの?!」

「そうよ?」

あら、知らなかった？らしいわねえと彼女は小さく笑った。

さすがに自分が通う学校の経営者を知らないというのは問題だろうか。いや、だって、財団法人村越とかなら分かるんだけど、名前違うし一応カトリック系だし。天下の村越グループと係わりがあるとは知らなんだ。

だから木村さんは管理人として雇われているのか。

「それにしても、どうして妹なの？君の立場で君くらいのルックスなら、他に候補がいるんじゃない？」

木村さんからラグラスに視線を移動させた桂くんは不躰に言った。
木村さんはラグラスの事を「イギリス貴族のお坊ちゃん」と紹介した。

そりゃまあ、日本人の庶民から見れば王族も貴族も似たような存在だけど：

日本鼯鼠の両親が、結婚させるなら日本人が良いと言って、ラグラスは嫁を探しにやってきた。付き合いのある村越さんがラグラスを預かり、木村さんが頼まれて世話をしているのだが、たまたま大学付近で会った私をラグラスが気に入った、と。

これが木村さんがすらすらと説明した内容だ。

会って数日で結婚したいという相手に、桂くんが良いんじゃないか、とは絶対に言わないだろう。今も、見たこともない突き刺すような値踏みするような、桂くんらしからぬ冷ややかな視線を、ラグラスに向けて浴びせている。

よし、良いぞ桂くん！その調子でラグラスを追い返せ！

「外見からと言えば聞こえは悪いですが：彼女は私の周りには居ない、愛らしい方です」

勿論、内面も、と微笑んだラグラスは、身の毛もよだつ程の神々しさを讃えていた。

うおお！目が眩む！

というか何？！この高貴な人オーラは！聞いた事もない丁寧な口調で人を蹴落として！どうする気だああ！

私が両肩を抱いて悲鳴を飲み込んでいるのを確認した桂くんは小さく息を吐いた。

「妹はさ、美形が苦手なんだよね。人が好きだから、人に騙されるのが嫌いというか怖いというか」

「桂くん！」

突然何を言い出すのか。私は慌てて桂くんの腕を引いたが、あいはちよつと黙ってなさいと窘められた。

「君くらいだとどんな女性でも靡くでしょう？妹はね、二股とか浮気とか不義をしそうな男は駄目なんだ。君にその気が無くても、周りが放っておかない。君は誘惑に勝つ自信がある？」

「誘惑が無いとは言えませんが、彼女を、貴殿を裏切るような事は決してないと誓えます」

なんの躊躇いもなく言った彼に、私は静かに眉を寄せた。

私は中学三年の時、そりゃあ駄目な男に初恋を奪われた。

うちにたまに遊びに来ていた桂くんの友人は、女性的な顔立ちのイケメンだった。凄く優しく、一緒に居ると楽しくて、ああこれが恋かと遅い初恋を謳歌していた私に、彼は付き合おうかと言ってく

れた。

あの瞬間は嬉しかったのだが、私は彼の女癖の悪さを知らなかったのだ。それも悪意が無いから性質が悪い。

その日彼は、桂くんと約束をしていて戻るまで待ってるようにと言われたのだと説明した。私は疑うはずもなく、リビングで彼の相手をしていたのだ。

付き合おうかという彼の言葉に私が頷くと、彼は私の部屋へと場所を変えていきなり押し倒した。

啞然となった私に、ずっと触りたかったんだ、付き合うならいいよねと言った男の股間を、私は問答無用で蹴り上げたのである。

そして、タイミング良く帰って来た母親にぼこぼこにされた揚句（うちは父親と紘くん以外、格闘技好きで腕っ節も強い）、桂くんにもぼろぼろにされたらしい。

この事を今でも父親と大くんに黙っているのは、二人を犯罪者にしたくないという、ただただそれだけだ。

更に腹が立ったのが、他に彼女が二人も居たということ。女の子を何だと思っているんだ！

イケメンなんてろくなもんじゃない！という感想を抱いた私は、付き合うなら大くんみたいな誠実な人にと心に決めたのだ。

その事を知っている桂くんは、ラグラスは「無い」と思ったのだろう。あの人など及びも付かない美形だから。

「不義は絶対に無いと、約束しよう」

はっと顔を上げるとラグラスは怖いほど真剣な眼差しをこちらに向けていた。

ぞくり、と背を駆ける感覚に喉を鳴らす。

「お前は俺を嫌いではないだろう？」

ほぼ断定的な問い。なんて自信家だ。

「くっ…ははっ」

「え?! 笑うところ?!」

「悪い悪い…はぁー」

唐突に笑った桂くんは、先程までの冷たい眼差しを柔らかく緩めてラグラスに笑いかける。

「素直で真っ直ぐなんだね。良いんじゃないか?」

「なにが?」

「結婚」

こてんぱんにして追い返してくれると思っていた桂くんの裏切りに、私は呆然とその笑顔を見詰めるしか出来ずにいた。

絶対、反対してくれると思っていた。

桂くんにはったりと会ってしまった瞬間思い浮かんだのは、ラグラス殴られる！と、桂くんが反対してくれば、とりあえずは帰ってくれるだろうか。いや、意固地になって駄々をこねて、更に面倒な事になってしまふのではないか。こんな感じだった。

何故ラグラスを押す！何故だ！

「いいんじゃないか？イケメンだって母さんも喜びそうだ」

「な、何言ってるの?! 結婚なんかする気ないって言ってるじゃない!」

「じゃあ、婚約で良いんじゃないか?」

「桂くん!」

何を言っているんだろう。というか、この桂くんは桂くんなのか? 偽物ではないのか!

うちの男どもは皆、私に甘い。

一つ下の紘くんでさえ、私をまるで年下のように扱う。母親だけが全く甘やかしてくれないけど。

特に父親の過保護っぷりは異常ですらあるが、次男、桂くんの構いっぷりも異常だと思う。

基本、何をするにも恋人より私を優先するのだ。

まあそれが私だけではなくて、家族を優先するのだと気が付いたのは割と最近のこと。

去年の秋だ。

『自転車に乗った紘くんが事故った。でも元気(笑)』

そうメールをして三十分で桂くんは自宅に帰ってきた。怪我は！と叫ぶ桂くんは、みかんを食べていた紘くんは(痛くて出来ないから剥いて、と愛らしくお願いされたので横でせっせと剥いてあげていた)呆気に取りられて包帯が巻かれた左腕を上げた。

事故った、というのも、交差点で飛び出してきた子供を避けようとしてスリップし、停まっていた車のミラーにハンドルがぶつかったという程度だ。その際に手首を捻っただけ。包帯は湿布を止める為に巻かれているだけである。

彼女の家に泊まってくると言っていたので、電話を掛けて最中だったら悪いなあ、メールにしとけて程度の『報告』であって、帰って来いという催促ではなかったのに。

その程度の怪我で呼び戻されたと怒るところか、良かった、とへにやりと表情を崩した桂くんは愛情の深さを感じた。

私が骨折した時は笑っていたくせに、と言ったら、あの時は一緒に居て命に係わる怪我じゃなかったし、一緒なら自分が何とでもしてやれるからだと言う。その差がよく分からない。

まあ、そんな桂くんだから、私に恋人なんか出来た日には、拳一いや、得意なのは足技だから足が飛んでいくに違いないと思っていた。

こんな笑顔で後押しされるとか。

「ありえない！」

「そうか、分かった」

にこにこ笑っていた桂くんの笑顔が静かに消えた。

「妹は君と結婚するつもりはないらしい。申し訳ないが、他を当た

つてくれないか？」

「ケイ殿！」

「ええっと、君が日本語をどこで習得したか気になるところだけど、それはまあ置いて」

笑いを噛み殺した複雑な表情の桂くんは、ちらりと私を見遣ってからふわりと笑った。

「俺はね、妹が幸せならそれで良いんだよ。嫁ぎ先が例えイギリスでも、健康で幸せならそれで良いと思う。でもね、それはあいが望んでこそだ。あいが望む事なら何でも後押ししてやるし、尽力も惜しまない」

痛いほど真剣な眼差しにごくりと喉が鳴った。

「あいは、どうしたいんだ」

「…結婚は早いと思う」

「そうか」

「けど、ラグラスのことは嫌いじゃない。でも好き…なのかな？」
「うん」

まだ先のことなんて分からない。彼の気持ちが無所に向かう可能性だってあるし、何より、住む星が違うなんていうSFな遠距離恋愛になるラグラスとの結婚は無理だと思う。色々と障害がある。

でも、嫌いじゃないのは本当だ。

これだけの美形なのにそれにはとっても無頓着で、自己中心的で我が儘で、子供のようなラグラスは、可愛いと思う。

二度と会えないと思ったら涙が出るくらいには好きだ。

「…お友達から？」

「だ、そうだ」

桂くんはくつくつと肩を揺らして笑い、ラグラスはむっとり唇を引き結んだ。まるで我が儘が通らなかった子供みたい。

「あいが結婚したいと言った時は擁護してあげよう」

君のこと嫌いじゃないから父さんから守ってやるよ、と。笑った桂くんの意図が全く読めずに私は小さく息を吐いた。

「さて。君の事をあれこれ聞きたいとこだけど、一度社に戻らなきゃいけないから失礼するよ」

当然のように伝票を取ると、桂くんは空いた手で私の頭をくしゃりと撫でた。私のふわふわくせっ毛は柔らかくて好きだという。

「何かあったらいつでも連絡しなさい。直ぐに飛んでいくから」
「うん、ありがとう。ご馳走様！」

にこりと笑った桂くんの背中を見送って、私はソファにぐったりと身を預けた。

さすがに仕事を放り出してはこないとは…思う…けど。相変わらずの過保護振りにちよつとだけ頬を引き攣らせたのは秘密だ。

「素敵なお兄さんね！」

「あー駄目ですよ？桂くん、私の友達とか知り合いには絶対手を出さないから」

「そうなの？残念ねえ」

そう言って唇を尖らせた木村さん。あ、でも、と言葉を続けてにまりと笑った。

「姿変えてけば良いんじゃない」

「…私、姪？が異星人ってのはちよつと…」
「けちい」

ケチじゃない。っていうか怖いぞ木村さん。うちの家族を狙うのだからやめて下さい。

「帰る」

「え？」

唐突に腰を上げたラグラスは、むっつりとしたまま出口へと向かった。慌ててジャケットとバッグを抱き込んで後を追う。

「どこ行くの？」

「帰ると言っておるだろうが」

「どこに？」

「屋敷にだ」

「何で?! 駄々こねてたくせに、そんなあつさり?! っていうか、行かないからね! 私寮に帰るからね!」

小さく息を吐いて、彼はゆっくりと振り返った。

不機嫌な表情は変わらない。だが、どこか諦めの光を宿した青色が、数度の瞬きを繰り返した。

「一度帰る。お前が言うた日に来なければ、また迎えに来よう」
「う…わ、分かってる」

とりあえず帰ってくれるならそれで良い。良いんだけども。

何とも釈然としない！

もやもやとする思いをぶつけようと口を開いた瞬間、木村さんに腕を引かれてんあ？とか変な声を出してしまった。

「プライド高いから、あの子。そつとしといてやって」

「プライド？」

「お兄さんには軽くあしらわれ、小松ちゃんには無いとか言われて。あれで結構傷付いてんの」

「そうなの？」

「そう。だから、今度はちゃんと遊び行ってあげて」

「分かりました…」

なんだ、ちょっと可愛いじゃないか。にまり、と笑って、私はラグラスの後を追った。

追い付いた腕をえいと抱き込むと、驚いたように瞬きをして見下ろしてくる。ちよつと照れたように揺れる瞳が可愛いなあ。ちゃんと年下に見えるじゃないか。

父親に甘える時にするような上目使いで見上げ、にっこりと笑って見せた。

「セージさんに、おやつ期待してますって伝えておいて」

「…ああ」

呆れたように言った後、一瞬視線を反らした彼はぞつとするような綺麗な、けれど確実に何か企んでいる笑みを浮かべた。

「むが！」

浮かべた、と思った瞬間だった。

視界いっぱい彼の綺麗な青色と、さらさらの金髪が広がり一一啄むようなキスをされた。

私の上唇を挟み込み、ちゅっと音を立てて離す。

私が茫然として反応出来ずにいるのを良い事に、身体を抱き込んで下唇も同じようにキスをした。

「手付だ」

顔を離れたラグラスは、意地悪く細めた双眸で楽しそうに笑っていた。綺麗な彼が非常に男らしく、艶っぽく見える表情。

可愛いだなんて思うんじゃないかった！

2-5 (後書き)

これにて第2話終了です。

次は美人が一人、か二人出てきます。楽しみ！笑

甘露の兄（拍手御礼文1・短編）（前書き）

拍手に置いていた小松家の小話です。
あい、高校二年生のバレンタインデー。
当然ですが、王子は出てきません。

甘露の兄（拍手御礼文1・短編）

「ただいまー」

「おかえり。今年も大量だった？」

ほくほくと玄関を開けた私を、洗濯物を取り込んでいたらしい母親が笑顔で迎えてくれた。

「超大量！」

「今年もお返しの用意が大変ね」

ふわりと笑う母親は今日も美人だ。

背は私より高くてスマート。小松さんの奥さんはモデルみたいね、と言われるくらい綺麗な、自慢の母親。

背中の中程まで伸びた黒髪は艶やかでさらさらと揺れている。色の薄いくせつ毛の私にとって母親の髪は憧れだ。

宝塚の男役顔負けの、中性的な美貌の年齢不詳な母親である。

「もーね！一年生とか超可愛くて！ぎゅってしたら真っ赤になっちゃてもお！」

「いいわねえ。母さんなんか、あんまり貰えなかったわよ」

バイトの誰と誰しかくれなかった。二人とも可愛いから良いけど、なんて四人の子持ち（しかもおばさん）が淋しそうに言う事ではない。

さすが我が母親。学生時分には私の比ではないくらい貰ったに違いない。

本日の戦利品ーバレンタインのチョコレートをリビングのソファに置いて、部屋着に着替えた私は上機嫌でリビングに戻った。

「今年は誰が一番かなあ」

「あいか、桂じゃない？」

「紘くんは？」

「義理ならいっぱい貰いそうね」

「うわあ…」

まあ、そうだけど。そのキラキラ笑顔で言うのは可哀相だよ母さん。紘くんは女友達は多いけど本命にはならないんだよねえ。この前も、気になってた子に告白したら、女友達みたいにしか思っただけで断られたって泣いてたな…

不憫な子だなあ。

長男の大人くちは無骨な感じだし男ばかりの職場だから、チョコレートは彼女さんからしか貰わない。貰ったとしても義理しか受け取らない大人くん。男前過ぎる！

「今年のお返しは何にしようかなあ」

「今年も大量生産ね」

我が家ではホワイトデーのお返しは家族全員での手作り菓子が定番なのだ。漫画か、と言われる程に貰う量が半端じゃないから。市販品を購入していたら、お返しだけで今年のお年玉が無くなってしまふ！

あまり料理が得意ではない母親だが、材料をきっちりと量って作る菓子類はプロ並に上手い。だからお返しとしても喜ばれる。更にメッセージカードが好評なのだが、まあ、それは我が母ながら乙女心を掴む天才だと思う。

玄関から物音がして、誰かが帰宅したのだとリビングの扉を見遣ると、疲れたような表情の紘くんが紙袋を抱えて扉を開けた。

「ただいま」

「おかえり！どう？！今年はどうだった？！」

「…あいちゃんは？」

「三十越え！凄いだろー」

「僕も三十はあるかなあ」

「義理ばっかで？」

「母さん…」

冷たい突っ込みを入れた母親を恨めしそうに見詰める紘くん。ふ、不憫！

手作りらしい、ピンクのリボンを幾重にも回してくると綺麗にラッピングに包まれたチョコレート。

直ぐに食べなくてはいけないだろう生ものと、日持ちのしそうな物と分けてメッセージカードを並べていく。名前と顔が一致する子も居れば、残念だけど名前すら知らない子も居る。

ああ、美人で有名な伊川先輩のものまであるじゃない。

にまにまとしながら一つずつ分かるように携帯の動画に収めた。こうしておけば、思い出としてもお返し用の記録としても残せる。

コンコン、とノック音がしたので返事をすれば、桂くんがただいま、と顔を覗かせた。

そうして、ずらりと並んだチョコレートに小さく眉を寄せて笑う。

「おかえり。今年はどうだった？」

「今年はいいの勝ちかな？俺のは義理と値段張りそうなのばつかで、乙女心が詰まったあいのチョコには敵いそうにないな」

「有名店舗のは御相伴に預かりたいです！」

「しょうがないな…」

「あ、そうだ」

私は紙袋に残った包みを四つ、桂くんに差し出した。

「桂くん宛ての中では、一番乙女心が籠った物たちかと」

「ありがと」

「美奈なんか私にはくれなかったくせに、桂くんに絶対渡ししてくれて。その他に紛れ混ませるなよ！って凄まれた」

「相変わらずだな美奈ちゃん」

美奈は初等部からの付き合いで、政治家も利用するような老舗料亭の孫娘だ。自宅は店舗並にご立派な日本家屋だが、一般庶民の我が家に何の気兼ねも気遣いもなく遊びに来れる唯一の友達。

昔から桂くんが好きで、憧れの先輩のように追い掛けているが、桂くんは『あいの友達は範疇外』と言って、やんわりと拒否している。何故かと聞けば、あいが傷付くのは困ると言うのだから、どれだけ過保護だと言いたくなった。

「今年はどうな写真を撮るんだろうな…」

「母さんも写真館のおじさんも、どんどん悪乗りしてる気がする」

はあ、と。揃って息を吐いたのには理由がある。

ホワイトデーのお返しに必ず添えるメッセージカードには、家族写真が使われていた。

初めてやったのは四年前。『私たちが作りました』的なノリだったのだが、お返しよりも喜ばれてしまった為、辞めるに辞めれなくな

ってしまった。

うちの兄弟はご近所でも評判のイケメン兄弟。それが一堂に会する事は家の中。外では滅多にない。だから、写真でも良いから揃っているのを見たいのだそうだ。

最初は普通の集合写真。去年は写真館のおじさんが加工までしてくれちゃった。

「白布が安かったって大量買いしてたけど、写真に使う気かなあ」

パティシエとか、と言った私を、桂くんは渋い表情で見詰めた。

母さんはきっちり計る物は得意で、裁縫も型紙さえ作れば何でも縫える。

「コスプレか…」

「そだね」

突飛な格好でなければ、まあそこまでの抵抗は感じない。問題は大きく桂くんか。

小松家で一番の権力者は母親だから、二人とも嫌だとは言わない（いや、言えないか）だろう。

何を着てもびったりとハマってしまう桂くんが嫌がるのは、ハマり過ぎて嫌なんだろうか。

「あ！そう言えば、本命さんからのチョコは？！」

どんなだった？どんなだった？と聞くと、桂くんはあっさりと別れた、と告げた。

「ええええ？！だって、昨日仲よさ気に電話してたじゃない！」

「あいと買い物に行くんだと今週末の誘いを断ったら『私とどっち

が大事なの』とか馬鹿馬鹿しい事言ってくれやがった」

「：ああ、そっか」

私はがっくりとうなだれた。

答えを聞くまでもなく、桂くんは私が大事だと即答したのだ。そしてフラれた。フツた、のか？

我が兄ながら、引くくらいのシスコンぶり。私のどこが、そんなに庇護欲を駆り立てられるのかほんつとに分からないんだけど。

大くんも大概甘いけど、桂くんのはちよつと異常だ。べたべたする訳ではないが、何をするにも私を優先する。買物だって、別に今週末じゃなくていいし、桂くんが無理なら紘くんか父さんで行くのに。どこの兄もこんなものなんだろうか。

「あいが妹で本当に良かった」

「うん？」

「恋人や夫婦は簡単に別れるけど、血の繋がりはどうしたって切れないもんな」

「ソウデスネ」

頗る笑顔の桂くんに、私は無機質に返答するしかなかった。

3. 恋敵に片思い

窓から差し込む麗らかな陽射し。

目の前にはほわほわのシフォンケーキのような、だけでも色彩が劇的な緑色のケーキ。ほうれん草のような色ではなく、口に入れるのを躊躇ってしまう海外の着色料たっぷりお菓子みたいな毒々しい緑、だ。

そして。

頗る機嫌の良いラグラス。

私は小さく息を吐いて気合いを入れてからケーキを口に運んだ。

約束通りに現れた私の腕をがしりと掴んだラグラスは、セージさんが待っている、と食堂へと引きずって行った。逃がしてたまるかと言わんばかりに。

元々水曜日は午前の講義しかないのだが、教授が学会出席の為休講になったので今日一日はぐうたらしようと思っていたのに。土日がお休みの木村さんは、もちろん一緒ではない。一応、管理の仕事はしているのだ。

私の生体認証を済ませておいたから、と渡されたりモコンをまじまじと見詰めた私に使い方を教えると、木村さんに急かされこちらへとやってきた。

扉の向こうで待ち構えていたラグラスは、ふわりと微笑んだ後にきゅっと表情を引き締めると、当然と言わんばかりに私を抱き寄せて軽く唇を啄んだ。

あまりの恥ずかしさに足を思い切り踏み付けてやったのは大目に見

てほしい。

緑のシフォンケーキは口に含んだ瞬間にしゅわりと溶けていった。口に残ったのはほのかな甘さと爽やかな酸味。シークワサーのようなさっぱりと、微かに感じる苦みの残る独特な味。

「美味しい！」

「お口に合ってようございました」

静かに笑うセージさん。相変わらずしゃんとした綺麗なおばあちゃん、やっぱりてきぱきと身体を動かしていた。

目の前でこちらを見ているラグラスは、お茶を口に運んではいるが何か食べる気配はない。

「ラグラスは食べないの？」

「俺は朝食を取ったばかりだ」

「そっか」

もう一口を頬張って窓の外を見遣る。日が昇ってあまり時間が経っていないようだ。

私があちらを出たのが八時頃。それから三十分も経っていないと思うから、日本とここの時差はほとんどないみたいだ。

視線をテーブルに戻し：ちらり、と上げる。

…：見てる。これでもかと言わんばかりに私を凝視している。

見たって何の変化もありませんよ？っていうかこんなに見られてると食べ難い。グルメリポーターじゃないんだからさ：

お茶を一口。喉を鳴らしてから息を吐いた。

さて。どうするべきか。

「何か用とかないの？」

「無い」

「勉強とか剣の稽古とか、そういうお約束な王子様業務は？」

「なんだそのお約束とやらは。俺は国を捨ててきたのだから、そんなものが必要な訳がなろうが」

「そんな自信満々に言われても困るんだけど、それでどうやって食べていくの？ここでだってお世話になってる訳でしょ。それとも仕送り？仕送りしてもらって『俺は自立してる』とか言う独り暮らしの学生って、死ぬ程格好悪いよ」

「がくせいとはなんだ？」

「えーと…文字の書きとりとか計算とか、世界の歴史とか。色んな事を学ぶところー学校っていうんだけど、そこに通ってる人のこと」

「それは半人前という事か」

「そうだね。まだ社会に出てないから半人前扱いされる。因みに私も学生だから」

「だから結婚出来ぬと」

「いやまあ、それも大きな要因だけどさ」

学生同士の結婚とか、親の拗ねをかじるだけだ。学校を辞めて働くと言ったって、親のお金で入れてもらったのを袖にするんだし。

ご家庭それぞれで考え方も違うと思いますけどね。うちでは確実に拳が飛んでくるよ。

母親の拳は私に、父親の拳は相手にね…

「働くか…」

うわぁ…

ぼそり、と『それってどんな事？』と言うんじゃないかという声音に私は恐怖を感じた。

王子様だもんね！それにこれだけの美貌なら男だとしても、蝶よ花よと育てられても不思議じゃない。

私の常識は全く通用しないんだろうなあ。

ラグラスとの結婚なんて、やっぱり考えられない。何とかして諦めて、いや、飽きてもらわなくちゃ。

「アベル様！」

「セルリア！」

ラグラスの背後にある出入り口から突然飛び込んできた少年に、セージさんはぴしゃりと名を呼んで制したが、彼はそれどころじゃと叫んだ。

十代半ばに見える彼は綺麗な黒髪が印象的で可愛らしい。頬がふくつとしていて、思わず突きたくなるような。天使みたいに可愛いよ、この子！

「お客様がお越しです」

「誰だ」

「えーっと、それはあの、御自身で…」

「何だ歯切れが悪い」

怪訝に眉を寄せたラグラスから、こちらへとちらりと視線を投げた少年に私は首を傾げた。私が居たら不都合だとも言いたげだ。彼が口を開こうとした瞬間だった。

「お久しぶりでございます」

鈴が鳴るような、というのがぴったりとくる声にラグラスが椅子を蹴る勢いで立ち上がった。何事か、とが見上げた瞬間に、青くなつた少年の背から現れた声の主に、私は悲鳴を上げそうになる。

画面の中で透明感を誇る女優たちの（修正されてるとしても）それ

より、滑らかで透き通るような肌は新雪のように白く、ふわふわと柔らかそう。頬は、これぞ正にバラ色。白い肌を引き立てるように赤い。

ぱっちり二重の、大きな榛色の双眸はきらきらと輝いていて、長い睫毛に縁取られている。この世界にマスカラや着け睫毛なんて物は無いだろうから、恐ろしい事だが間違いなく自前だ。

鼻筋は通っているのに小さくて形の良い小鼻。その下でぷっくりとした桃色の唇が緩やかな弧を描いていた。

背は百六十も無いくらいか。華奢で可憐な肢体を、真っ白なドレスで隠していた。

真っ直ぐに伸びる綺麗な赤みがあった髪が揺れている。

私は、叫んだ。叫ばざるを得なかった。

「ド！ストライクです！」

「は?!」

少年が呆気にとられて口を開け、美少女はぱちくりと瞬きを繰り返した。その表情もまた可愛くて、私は歓喜の悲鳴を上げる。

ラグラスは呆れたように嘆息すると私の視界を遮るように腕を組んだ。

邪魔な！私は急いで腰を上げるとラグラスと少年の間に割り込んだ。

「どけ」

「どかぬ！」

仁王立ちしている私の腰をひよいと抱き寄せ、腕の中に閉じ込める。ラグラスの胸しか見えないじゃないか！凹凸の無い男の胸（しかも服着てるし）なんか見たって何も面白くない！

「何用だ」

「ちょっと！無視しない！この美少女を私に紹介して下さい！こんな美少女を隠してるなんて、ラグラス酷い！横暴だ！」

「あんな…少し黙っておれぬか」

「紹介してくれたら！」

いや。紹介など言っていたら埒が明かない。私はラグラスの胸板をぐいっと押し退けて、美少女へと鼻息荒く近付き、小さな手を取った。なんとすべすべで柔らかな手！

「小松あい十九歳。お友達からお願いします！」

「…お友達以上になるつもりか」

「えーそりゃ、親友とか？」

「首を傾げるな。お前はちょっと黙って部屋に行っておれ」

「やだ、断る！」

こんな美少女を前にして私にどこか行けだど?!なんて事を言うんだこの馬鹿王子めー!

「面白い方ですのね？」

くすくすと小さく笑う美少女。一つ一つの仕種が優雅で洗練されている。ただ首を傾げただけでキラキラという効果音が着きそう。

こんな美少女見た事ない!ラグラスもそうだが、地球じゃ存在しないこの美貌。

もうおっちゃんはめろめろですよ!

「アイ、部屋に行っておれ」

いやだ、と言い返せないような真剣な声音に振り返ろうとした瞬間だった。

小さな手が重ねられ、私はそちらに釘付けになる。

「初めまして二号さん。わたくし、アベル様の正式な婚約者、セリヨウと申します」

「は？」

にこにこ。

綺麗に笑う美少女の「二号」と「正式な」を強調した言葉に、私はゆっくりと振り返ってラグラスを仰ぎ見た。

崇高なまでの美貌は、無表情に私たちを見下ろしていた。

3-2 (前書き)

このお話は、一応R15だという事を思い出してお読みください。
一応ですね、一応：

婚約者、と言った美少女をまじまじと見詰める。どこからどう見ても文句の付けられない美少女。胸がなさそうなのが残念くらいで、これだけ華奢ならそれもまあアリだ。

この容姿で巨乳ちゃんだったら、それはもう犯罪だ。貧乳で良かったのかもしれない。

お約束ならば、十八の王子様に結婚相手が居ない訳がない。

こちらの適齢期は分からないが、王族は血を残すのが義務みたいな感があるし、幼い頃に決められた相手なんて珍しくもないだろう。国同士を繋ぐなんて義務もあるはずだ。

とするならば、この美少女はどこぞかの王女さまとか権力者の娘に違いない。それは彼女の身を包む、高貴な空気からも想像出来る。

小さな両手をぎゅっと握ってから、私は大丈夫、と目だけで伝えると手を離れた。ぐると振り返ると、未だ無表情の美人。その胸倉をぐいと掴む。

「こんな美少女がいるというのに、私なんかに現を抜かすとはどういうことだぁ！」

「お前は…どこまでも違う！」

「何がよっ！っていうか、なにこの美少女！ラグラスとの子供なんて、びっくりするぐらい綺麗な子が産まれちゃうんでしょ！ちよつと、早く赤ちゃん抱かせなよ」

「何故男目線なのだお前は！」

「どこがっ！？近所のおばちゃん目線でしょーが！」

「ああ、もうお前は！」

胸倉を掴んだ手首をがちりと掴まれ、私とラグラスはぎりぎりと睨み合いを続けていた。

ええい、誰が引くものか。

私なんかより、誰がどう見たってこの美少女のが良いに決まってるじゃないか！私だってこの美少女を相手にすると、女の子は愛でるものという信念が揺るぎそうなくらいだというのに。

「何の騒ぎだ…」

のそり、と眠そうな目を瞬かせて現れたのはおっちゃんだ。こここの主であるというのに、挨拶するのもすっかり忘れてた。

「あら」

「セリヨウ！久しぶりだな。元気であったか」

「はい、お父様もお変わりなく」

………？

いま、なんと？

「おとうさま？」

「お前の父親になったつもりはないぞ」

そんなことを言っている訳ではない。若干メタボで人の良さそうなおっちゃんが父親なんて、まあ弄りがいがあって可愛いし悪くはないが、うちの父親とは系統が全然違って。おっちゃんが父親なんて想像出来ない。

ああ。いや、違う。

そうではない。

「この美少女のおとうさん？」

「そうだ」

むっつりと言うおっちゃん和美少女を三度ほど見比べて。

「うそだああああ！」

私は力の限り絶叫した。思考回路は…と、昔懐かしいアニメソングがぐるぐると頭の中を渦巻いていた。

何という悪夢だろうか。

天変地異でも起こらなければこんな事がある訳がない。夢だ、夢。きつと悪夢に違いない。

「うーうーうーうーそんなばかなあ…」

「お前は…いい加減起きろ」

「うわあ！」

耳元で囁かれたその声に私は飛び起きた。案の定、そこには呆れた表情のラグラスが居て、お尻のふかつとした感触で自分がベッドに寝かされていたのだと理解する。

シャットアウトしようとしてしまった。いや、してしまった。

気を、失ってしまうとは。そこまでショックだったのか、と自分でも驚いてしまう。

遺伝子の悪戯。

生命の神秘。

神の起こした奇跡。

どんな言葉を並べても、この現象に当て嵌まるものはない。

「ラグラス」

「何だ」

私の真剣な表情に気圧されたラグラスは、勝手に私の頬を撫でていた手を止めた。

「美少女ちゃんは養子？」

「…違う」

「じゃあ奥さんの連れ子…ええと、前の旦那さんとの子供とか」

「れっきとした、血の繋がった親子だ」

「嘘だ！私は騙されないぞ！きっと奥さんが浮気して出来た子に…」

「奥方が亡くなった今でも、後妻も持とうとしないあの人と、その夫にべったりだった奥方が、か？」

「嘘だあ！遺伝子的に有り得ない！」

「…お前、本当に酷いな」

酷いのはこの事実だよ。

「あ！美少女ちゃんは？！」

「いいか、アイ」

「うえ？」

鼻息荒く彼に詰め寄ったのだが、逆に冷静に詰め寄られた。

青色がじっと私を射抜くと、頬に置いたままになっていた手を滑らせる。ぞくりとするその感覚に、私は肩を竦めた。

「俺は、あれと一緒になるつもりはない。おまえが…」

「何で?!じゃあ私が結婚する!」

「ああ…だか…ら」

「こっちの世界は同性でも結婚出来る?!いや、別に肉体関係とか、うん、いや、やっぱプラトニックで…あ、でも、木村さんの頭脳を持ってすれば、卵子同士での受精も簡単に成功させそう!やっぱ美少女の遺伝子は遺すべきだよ!世界遺産だもん」

付き合う時は、まずその男と出来るかどうか想像するのよ、と教えてくれた友人。うん、私、あの美少女ちゃんとなら出来る気がするよ!あの子Sっぽいけど大丈夫かな…いや、きっとイケる!あの子のためなら甘んじてMになろう。

ぐぐぐと握った拳を掴まれ視線を上げると、彼の金髪が目の前にあって唇には柔らかな感触。

またキスされた!ちよっとラグラス、調子に乗ってない?!

押し返そうにも、ベッドに着いていた片手もいつの間にか縫い止めており、身を引くくらいしか出来ない。引いてもその分彼が寄れば、必死で作った間は埋まってしまう。

調子に乗っているとしか思えない。やわやわと下唇を食んだかと思えば、滑り込ませた舌で内側から唇を撫でていく。

ぞくり、と背に走る甘い痺れにぎゅっと眼を閉じるが、それで逃げられる訳でなし。更に中へ中へと入ってくる舌は歯列を、舌を撫で回っている。それが舌の付け根を撫でた瞬間、私は悲鳴に近い声を上げた。

身体の芯を電気が走る。それに気付いたらしいラグラスはくつりと笑って少しだけ唇を離した。

「ここが弱いのか…そのような眼をして、煽っておるのか?」

煽るか馬鹿！と心中では叫んでいたが、唇だけでなく全身の力が抜けてしまった私にそれは叶わない。どんな眼をしているかも分からないというのに、どう煽れるというのか。

勝手に良い方向に解釈したらしい彼は、くは、と声を上げて笑うとそのまま唇を重ねてきた。

先程判明した弱い所を重点的に攻められ、私はもうぐてんぐてんだ。いつの間にかシャツの裾から大きな手が侵入してきているのに、全く抵抗出来ない。脇腹を撫でられて上げた悲鳴はラグラスの舌に絡め取られた。

今日の服装はショートパンツにオーバーニーのソックス。生足部分に視線を遣って眉根を寄せ、それはあちらで普通の服装かと常識を問いてきたくせに、今はその脚をやわやわと撫でてくる。

このセクハラ王子！

「ん、あっ！」

突然与えられた強い刺激に悲鳴を上げた。脇腹にいたはずの手の平が、いつの間の下着を押し上げており、膨らみを撫でて頂を指でこね回す。

このままでは完全にやられてしまう！

「あ、ちょ…！いい加減に…！」

「そのくらいでお止め下さいませ。殿下」

「へ？」

声は美少女ちゃんのもので。

慌ててそちらを向けば、笑顔だというのに青筋が浮いて見えそうな程に頬を引き攣らせた彼女が居た。

溜息と一緒に、ラグラスの舌打ちが聞こえた気がしたが、それどこ

ろではない。

「ごごご誤解！誤解だから！これはラグラスが勝手に…！」

「わたくしはそのような事は気に致しません。その前に、無駄な脂肪を直したら如何ですか？」

「え？あ、ああ、胸？」

無駄な脂肪って…と思いながら衣服を整えていると、後ろからラグラスに抱き込まれた。このセクハラ王子め！人が誤解を解こうと必死なところを邪魔しておって！

「俺は国に戻るつもりはない。お前とも結婚するつもりはない。王妃になれぬなら、俺と結婚する意味もないだろうが」

「わたくしは殿下を御慕いしております。王妃になれぬとも構いません」

「え、うそ？！愛の無い婚約者じゃないの？！私が入る隙は？！」

「ございません」

にっこりと笑う美少女に、私は失恋してしまったようだ。

「私の恋が！」

わあと溢れ出した涙は止まることなく。私はラグラスの胸に縋り付いて泣いた。

「お前はどこまでも…」

「ど、どうなさったの？」

「お前に失恋したのだ」

「わ、わたくしに?!」

一歩引く気配がして、私は更に凹んだ。

私の本気の恋が。

自分で告白もする前に敗れてしまったのだ。今日は自棄食い決定だ。
木村さんに付き合ってもらおう！

「大人しく俺の妻になれと言っておるだろう」
「いやだってば」

全く、どさくさに紛れて何を言ってるんだか。

肩を落としたラグラスを見て、ちよっただけ気分が晴れたのは黙っておこう。

うん。

背を撫でる優しい手つきにちょっとだけうとっとしてしまったらしい。

気付いた時にはそこに美少女ちゃんは居なくて、私はちょっとだけほっとしてしまった。

「美少女ちゃんは？」

「出て行かせた…飲め」

「ん。ありがとう」

泣き疲れて眠くなるなんて子供みたいだ。

差し出されたコップの水をこくこくと流し込み心地付くと、彼の胸に頬を擦り身を預ける。

「しつれん…」

「本気だったとはな…」

何だその溜息は。

だって、あんな見たことも無い美少女。誰だって恋しちゃうよ。要らない、っていうラグラスが変なんだよ。

「もうちょっと頑張ったら友達になってくれるかなあ」

「根本的に間違っておると思うがな」

「何で？」

「あれは正妻の座が欲しい。だが、俺はあれと結婚するどころかお前を正妻にするつもりとあらば、お前は邪魔なだけだ。友になどなれる訳がない」

「全部ラグラスのせいじゃない！」

「煩い。そもそも、お前は良くても、あれは同性を受け入れるつもりはなからう」

「だから友達からって言ったの！ラグラスのせいで初対面から最悪じゃなかあ」

ラグラスが私と結婚なんて言わなければ、きっと彼女と良い関係が作れたはずだ！恋愛相手としては駄目かも知れないけど、あんな冷たい眼で見られることは無かっただろう。

「おっちゃんを抱き込んどけば良かった」

「それは意味があるのか」

「あるよう。親に「あの子とは遊ぶな」と言われちゃうと、子供もいうこと聞かなきゃなんだよ」

「そうなのか？」

そうなの、と答えて私は彼の胸板を押した。ベッドから下りて凝り固まった身体を伸ばす。

「よっし！美少女ちゃん口説いて来よう！」

「諦めろ」

「無理！友達になるまで諦めない！」

諦めの悪さは折り紙着きだかんね！

「アイ」

「はい？」

手を引かれ、再び彼の胸に抱き込まれる。ただのセクハラかと思えば、ラグラスは困ったような笑いを噛み殺したような表情でこちらを見下ろしていた。

触れるだけのキスを落として、くつと肩を揺らして笑う。

「お前は本当に不可思議だな」

「そんな事ないよ。普通、普通」

声を上げて笑い出したラグラスに頬を膨らませた。笑うトコ違う！

「あら、もう御目覚めですの？」

「うん」

おっちゃんとお茶をしていた彼女が意地悪く微笑んだ。その小悪魔的微笑みも可愛くって、私はへらりと笑ってしまう。

先に断っておきますが、と彼女は微笑み濃くした。

「わたくしが貴女に傾倒することはございませんので、早々に諦めるのが賢明かと」

「うっわーきつつい！でも、是非お友達に」

「そうですわね…貴女が、二号さんに引き下がって下さるのなら」

「えー！私なら、美少女ちゃんみたいに可愛い奥さんがいて、二号もって考えられない！美少女ちゃんにどっぷり浸かるよ?!ラグラスの変態！」

「何故そうなる！」

「だってそうじゃなか！美少女ちゃんも私も、なんて、どんだけ精

力有り余ってんの?! いっちょ木村さんに分けてあげたら良い」
「とにかく! お前は黙れ!」

いつもより強いラグラスの剣幕に圧され、私はぐっと唇を噛んだ。
嘆息を零した彼は美少女ちゃんへと向き直り、冷ややかに彼女を見下ろす。

「俺が国を出た際に婚約は破棄したはずだが?」

「わたくしが直接受けた訳ではございませんので。わたくしも、叔父も、納得などしておりませんから」

「叔父上」

「何だ」

「貴方はどう思っておるのだ」

「わしは国を出た身だからな。当人同士でどうにかしてくれ」

面倒な言葉にしないだけでおっちゃんはその言っている。父親だ
というのに、なんと投げやりな。

「ともかくだ。俺はお前とは結婚せん」

「こんなに御慕いしておりますのに」

そう言っただけで彼女は双眸を潤ませた。揺れる瞳からこぼれ落ちそうな
雫に私はどきりとする。

「ああああ! 謝れラグラス!」

「は?!」

「ごめん、ごめん! だから泣かないで! あなたに泣かれると、私心
臓が破裂するかもしれない!」

わたわたと慌てる私に視線を移動させた彼女は、ぱちくり瞬きを繰

り返し、湛えていた涙を一筋頬に流した。
そののなんと美しいことか！

「ごめん！美少女ちゃん！」

私は彼女の細い肩を抱き込んだ。これ以上、彼女の悲しみを見ていられなかった。

「チッ」

…え？

な、なに？今何か聞こえた気がしたけど…

「貴女に効いても、何の得にもなりませんのよ。脂肪、押し付けな
いで頂戴」

黒い。彼女から黒いなかが噴き出している。

慌てて身を剥がして顔を覗き込むと、にっこりと笑顔を造っている
くせに彼女の華奢な身体からは黒い空気が噴き出していた。

「わたくし、貴女みたいな人が大嫌いなんですの」

彼女は美しい。それは恐怖を感じるほどに。

「ですから、ご友人にもなれませんわ」

私は喉を詰まらせたらしい。その笑顔に何も言えずぐくりと唾を飲
み込んだ。

「俺もお前を妻にするつもりも側室にするつもりもない」

ぐいと肩を引かれ、そのまま広い胸に身を預ける形になった。

「そくしつ…側室！はーれむ！」

「ハーレム？」

「側室ってあれよね、王様が囲ってる女の人たちの事よね。後宮というハーレムに住んでて、二号どころか、三号四号と美女たちが居るのよね！」

「ま、まあ、世間一般で言えばな。言っておくが…」

「それってさ！私がラグラスの正妻さんになると、そこで一番偉い人になっちゃって、この美少女ちゃんも私の部下…私の美少女ちゃんになるんだよね！」

「なるか！」

「ならないの?!大奥ではそうだったような！御台所?!」

「…本当にお前は。だからな、他の国がどのような制度をとっているか知らぬが、ロベリアでは側室は許されておらん」

「え？嘘！」

「嘘ではない。後宮の主は確かに妃だが、他に住む者はおらん」

な、何故だ！王様でしょ！妾の一人や二人、ええい、十人くらい持ちなよ！

「旦那様」

「ん、どうした」

この騒動中にも関わらず、動揺一つ見せずに現れたのは壮年のおじさまだった。

腰に剣を下げており、鍛えられた身体は隙が無いように感じる。以前セージさんが言っていた警護の人だろう。

「お客様がお見えでございます」

「今日は騒々しいな。一体誰だ」

「グロリオーサ様でございます」

「何だと!？」

その名に最も反応したのはラグラスだ。

肩に置いた手に力が籠る。それが震えている気がするの、気のせいではないと思うんだけど。

「まあ! わたくしもご挨拶しなくては」

美少女ちゃんは嬉しそうに腰を上げた。美少女ちゃんも知っている人なのか。

「ご案内しても？」

「ま、待て! アイ、今すぐ帰るのだ!」

「は? な、なんで？」

「良いから: あの人に会ってはならん!」

物凄く動揺しているらしい。わたたと落ち着きなく私の手を引いた。

何か: ここまでラグラスが嫌がる人って誰だろう。昔の恋人とかなら、美少女ちゃんは喜んで挨拶になど行かないだろうし。

凄い気になる。どんな人か、一目だけでも。

「まあ。何処に行くつもりかしら？」

その声に彼は動きを止めた。綺麗な顔からさっと赤が消えていく。顔色が無茶苦茶悪い! 青を通り越して紙のように白いよ! ?

「ら、らぐらす？」

「貴女がアイ？」

「はい？」

名を呼ばれてそちらを見る。

私に、雷が落ちた。

キラキラのプラチナブロンドは腰まで流れていて、天然物だというのが信じられないくらいに美しい。

深い海のような、晴れ渡った空のような青色の双眸。

ちらり、と振り返って見遣る。

やっぱり。

何もかもがラグラスに似ている。

纏う雰囲気若干柔らかくて、なんというか、ラグラスにミルクを入れた……うーん、例え下手だな私。

まあ、まろやかなラグラスだ。

決定的な違いは、緩やかに膨らんだ胸とふつくらとしたお腹——どうやら、彼女、妊婦さんらしい——まあ、女性なのである。

絶世の美女。

「あね、うえ」

喘ぐようなその声に、私は納得して頷いた。

絶世の美女は柔らかく微笑んでいる。

本日二度目の一目惚れに、この世界は美人が多いんだなあとしみじみと呟いた。

ああ、なんて素晴らしい世界。

「ねえ、アイ？」

「はい」

今の私は、恍惚とした表情をしているに違いない。
だって。

女神のように美しい人が目の前にいて。そして私の両手を取って小首を傾げているのだ。こちらを窺うようなその表情たるや！

世の男性諸君。女に騙されるなら、こういう美女になさい。少なくとも、一時期のワイドショーを賑わせた女たちに騙されるよりよっぽどいい。っていうか、騙されて本望だ！

「わたくしね、あの子が心配なの」

「はい、分かります。我が儘で子供で、とっても自己中心的ですもんね。お姉さんが心配するのも良く分かります」

「まあ、理解してくれて嬉しいわ」

背後に居るラグラスから、更に不機嫌オーラが噴き出したが、まあそれはどうでもいい。

「だからねアイ、お願い」

「はい」

お姉さんの綺麗な顔がずいど寄ってきた。視覚的に文句の付けられない美貌にすべすべの肌、嗅覚に訴えるのはクラクラするような花の香。

ああ、墮落してゆく。お姉さんの望みなら、なんでも叶えてあげたい！

「早くラグラスの子を産んで欲しいの」

「はい！……って、ええ？！」

至極当然とばかりに言い放った彼女に私は硬直した。

「国の為に身を引け、とか」

「わたくしはあの子の幸せを願っているのよ。ねえ、お願い」

うわわわわ。

甘ったるい語尾に媚びた上目使い。

完璧だ！完璧過ぎる！これぞ男を転がすフジコちゃんだ！

私だって、他の事なら何でも聞いてあげたい。だが、子供を、なんてのはそう簡単に叶えてあげられない。

「だって、あの子はアイを愛しているのよ？他の人に子供を産んでだなんて言えないでしょう？」

「う、あ、はい」

「駄目？」

「ううううう」

寄せられた眉に揺れる双眸。何と蠱惑的な。

「後継ぎだというのに勝手に国を出て。イイギリに嫁いだわたくしには、何の連絡も寄越さず」

彼女はちらりとラグラスを見上げた。

彼はきつと視線を反らしているに違いない。

「スターチス様に手を貸して頂いたんでしょうけど、国を出て逃げ

られるとでも思っていたのかしら」

「姉上…」

「貴方が継がず、誰が国を継ぐというのですか」

小さく嘆息した後、彼女は首を振った。

「わたくしにはそのうち連絡してくるでしょうと待っていたというのに、一向に連絡はない。久しぶりにお父様のお見舞いに行けば貴方は戻っているどころか、誰にも紹介せず結婚相手を決めたという。スターチス様から聞いたわたくしがどれだけ…どれだけ…」

ぐっと唇を噛んで俯く。

そうですよね、こんな我が儘ぼっちゃんでも心配しますよね。分かります。分かりますよ！

「腹立たしかったと思っているのですか！」

「ふええ？」

「結婚するのは良いのです！早く後継ぎを産んで頂きなさい！ですが、いつまでも国に戻らぬとはどういうつもりですか！貴方、わたくしとお腹の子に、どれだけの負担を掛ければ済むのです！」

物凄い剣幕で矢継ぎ早に言った彼女に、私は呆氣に取られた。何と言うか…物凄い威圧感です。迫力が違います。怖いです。美人を怒らせると本当に怖いんですね。ちらり、と振り返ってラグラスを見遣ると、綺麗な顔を引き攣らせて、恐怖に耐えているようだった。

「…申し訳ありません」

「そう思うのなら、今すぐ彼女を連れて国にお帰りなさい！」

いけない！このままでは、全力でこの美人姉弟に落とされてしまう！

「おおお、お姉様」

「なあに？」

「私、学生なんです」

「がくせいとは何ですの？」

「えーと、言わば見習いのような者です。親の庇護下にありまして、親の許可無しには結婚も出来ません。私、後三年は学生なので、結婚は出来ないんです」

「まあ：面倒なのねえ」

「はい。私も貴女の妹になれるなら喜んでと言いたいんですよ？お姉様をお願いを叶えられないのは心苦しいんですが、今の私に子供を産むなんて、無理、なんです」

分かってもらえただろうか。

お姉様は、ん、と唇を尖らせた後、にっこりと慈愛に満ちた微笑みを浮かべた。

「このままこちらに残れば、何の問題もありませんわ。今すぐにも国に行きましょう。陛下も喜ぶわ」

「大アリですよー！ー！」

駄目だ！この姉にしてこの弟有り！人の言う事なんてどうでも良いのだ。我が儘で自己中心的な生き物なのだ！誰だ、教育係！出てこおい！

「姉上。今日のところはお帰り頂けませんでしょうか」

「いやです」

うわあ。そんなに笑顔できっぱりと即答しなくても。

ラグラスは盛大に嘆息を落とした後、お願いしますと丁寧に頭を下げた。

「ラグラス」

その態度にも揺るぎそうにないお姉様。長い睫毛をしばたかせ、冗談めいた笑みを消した。

「お父様は、そう長くありません」

持って数年でしょう、と。

実の娘が口にするには酷い現実だというのに、彼女は淡々と言葉を続けた。

「貴方はただの言い伝えだと思っているかも知れませんが、わたくしはそうは思えないのです。貴方の中に、彼の方は眠っているのだと、確信しています」

「その：勝手な運命とやらが、国を背負う者として当然という義務が、私には受け入れる事が出来ません。姉上、どうか分かって下さい。私は私の決めた運命を進みたい」

「なりません」

彼の真摯な言葉にも姉は心動かされなかったらしい。きつぱりと首を振って、握ったままになっている私の両手に、きゅっと力を込めた。

「貴方が逃げても：どうにも、ならぬのですよ。血とは、国を負う者とは、そういう：定めなのです」

そっと伏せられた悲しみに曇る青に私は喉を鳴らした。えもいわれ

ぬ色を称えているのだが、ここでそれを口にする事は出来ない。
私は空気を讀んだ！

「グロリオーサ様」

刺すような空気の中、声を上げたのは美少女ちゃんだった。

椅子からすっと腰を上げると、お姉様の横で優雅に膝を折って美人を見上げる。

「わたくしなら今すぐにでも、御子を産んで差し上げられます」

わ…将を射んと欲すればまず馬を射よというやつですね！強かだなあ、この子。

「そうですね。この子が貴女を愛せば、それが一番だったのですけど。この子は貴女を愛さなかった」

その言葉に美少女は整った美貌を歪めた。

「わたくしは！アベル様を御慕いしております！この者はそうではございません！でしたら、わたくしを…わたくしをお召し下さいませ！」

それは叫びのようだった。

彼女は、本当にラグラスを愛しているのだ。

…何で私がここに居るのだろう。どうして彼は、面倒な私を諦めてくれないのだろうか。

それが彼の意地だというなら綺麗に無視してみせるが、本気で私を欲しいと思ってくれているらしいから困ったものだ。美少女が投げ

た悲痛な言葉に、流石のお姉様も口を噤んでしまう。

「リオ」

凍えるような空気を破ったのは、柔らかな男性の声だった。

お姉様の事をリオと呼んだ、穏やかな声の持ち主。

その声同様に、容姿も何とも言えない癒し系であった。

年齢は二十代後半くらいか。穏やかな茶の双眸に、それより僅かに濃い短髪。顔の全体的なパーツが大きくて、決して美形ではないが優しそうな、ほっこりしてしまう笑顔が魅力的な男の人だった。

肉付きの良い身体はラグラスと変わらないくらいに高いけれど、一回りは大きくて包容力がありそう。

着ている物が皆とはちょっと変わっているのが非常に残念な。

素材はきつと上等なんだろうけど形が、というより、色が問題である。濃い黄色のシャツに青いパンツ、ジャケットは真っ赤。釦やあちらこちらに施された刺繍や装飾は金で、なんというかちよつと、いや、かなり派手、だ。

「殿下」

「勝手に出掛けるから心配したよ？ スターチス様に話を聞いていて良かった」

「申し訳ありません…」

「リオはラグラス殿の事となると回りが見えなくなるから」

そう言って、彼はゆっくりとおっちゃんと言ったラグラスに頭を下げた。

「ご無沙汰しております。妻がご迷惑をおかけしました」

「息災そうでなによりだ」

「ご無沙汰してます、兄上」

……え？

ちよつと待て。聞き捨てならん言葉が聞こえた気がするが、これっ

て聞き間違い？間違いであって欲しい。

この、癒し系の奇抜な服装をした人が、お姉様の、旦那様？！

「デンファレ様は相変わらず研究でお忙しそうですね」

「国を出たからな。気ままにさせて貰っておるよ。イイギリ国はどうだね？」

「相変わらずの平和でございますよ。国を継ぐ立派な兄が居ると、お互いに楽でございますねえ」

おっちゃんと旦那様？のほのぼの世間話が続きそうなので、私はラグラスの手を引いて声を潜めた。

「えーと、ちょっと質問なんですけど」

「なんだ」

「この人はお姉様の旦那様？」

「ああ。イイギリ国第三王位継承者でもあられる。何故、そのように不満そうな顔をしておるのだ？」

「ん、まあちょっとしたショックを受けたんだけど、それはまあ気にしないで。で、おっちゃんって、何者なの？」

以前は木村さんの研究を手伝っている研究者だとは説明された。

でも、大きな屋敷に五人も従者を抱え、居候であるラグラスの面倒も見ている。そして美少女ちゃんの父親でもある。

私の問いに彼はぱちくりと綺麗な青を見開いてみせ、何度か瞬きを繰り返すとあれは説明しておらぬのか、と嘆息した。

「バキア国の第二王位継承者であり…」

「王子様！？」

「ん、まあそうだ。それでだ、」

「中年の王子様…」

今日一日でショックな事が起こり過ぎだ。私の心臓持たないよ。メタボで弄りやすいおっちゃんが、王子様、だなんて。

「最後まで聞かんか。あの人は、俺の伯父だ」

「は？」

え、今なんて？ なんの聞き違い？

「俺の母上の兄だ」

それで厄介になっている、と続けたラグラスの声は右から左へと流れて行き、私の脳は遺伝子の神秘について真剣に検討を始めていた。

「リオ、今日のところは帰ろう」

「でも、殿下！」

「あまり興奮すると、お腹の子に悪いよ？」

諫めるというよりは諭すような優しい声音で彼は言い、しゅんとしたお姉様は小さく頷いた。

しおらしいお姉様もかなり魅力的だが、この癒し系旦那様に弱いらしい。さっきまでの剣幕は何処に行ってしまったのだろうか。

「セリヨウ殿も、今日の所は帰りましょう」

「フィリカ殿下。わたくしには関係ございませんわ」

「ラグラス殿は僕の可愛い義弟だからね。困っているのを見過ごしたり出来ないよ」

それは遠回しに、君はラグラスにとって迷惑な存在だと言っているんじゃないですよ？違いますよね？温和そうな容貌の彼にそんな風に言われてしまうと、ラグラス本人に言われるよりもダメージが大きそうだ。

美少女ちゃんはぐっと言葉を詰まらせた。

「表にあった馬車は君のだろう？早く戻らないと、バキア陛下も心配するのではないかな」

娘の帰りを心配するのが父親ではなく、祖父である国王だ、とか。ちよつとどういう家庭環境だ。

彼はゆっくりとこちらを見遣り、ほんわぁと効果音が着きそうな笑顔私に向けた。

「君がラグラス殿のお嫁さんだね」

「いや、違いますから。結婚しませんから」

「あはは。いやあ、面白くて可愛いお嬢さんだとは聞いていたけど本当だ。今度うちにも遊びに来ておくれ」

「丁重にお断りします」

私の断りにも笑っている。完全に冗談だと思われているみたいだ。そうじゃないんだけど、本気なんだけど。

「本当にうちにもいらしてね、アイ」

「はい喜んで！」

お姉様の要求に居酒屋店員のような掛け声でもって答えると、お姉

様は綺麗な微笑みを残して腰を上げた。

美少女ちゃんも渋々と立ち上がると、意地の悪い笑みを向けてごきげんよう、と言葉を落とす。

「諦めた訳ではございませんから。また、お会いしましょう」

「うん。私も友達計画諦めてないから！」

鼻息荒く言った私に対し、調子が狂いますわ、と彼女は小さくごちた。

嵐のような数時間だった。

私はテーブルに突っ伏して、眼の保養であった二人の美女を思い浮かべてはにんまりとしている。いやあ、素晴らしい時間だったなあ。これで美女版のギリアさんが並んだら最高だ。

「あ！ラグラス、超美少女な妹とか居ないの？！」

「何を突然言うかと思えば…お前はそんなに女が好きか！」

「うん！」

ラグラス、その問いは愚問という括りに入るよ。愚問っていうか、質問としてどうかと思うよ！

「妹は居ないが…姉上の一番目の子が俺の幼少期に良く似ているそうだ」

「男の子なの？！」

「いや。女だ」

すすす素晴らしい！ラグラスそっくりの幼女だなんて、どれだけ美
幼女なんだろう！天使のようだろうなあ。

「ラグラス、今度お姉様の国に連れてってね！」

「俺は今、心底お前に言うべきでなかったと思っていたのだが。何
だ、その変質者のような熱い眼差しは。お前には守備範囲というも
のがないのか」

「美女だったらもう幾つでも！白い犬のお父さんのお母さん、超綺
麗だよねえ…」

「意味が分からん」

「お前、本当にこれと結婚するのか？」

「…伯父上……」

がつくりと肩を落としたラグラス。何かすんごく失礼な扱いを受け
ている気がするんだけど。

「それにしても疲れたねえ」

「心配するな。誰が反対しようとも、俺はお前を裏切りはせん。お
前が望むなら、お前の星で暮らせるようにしよう」

「良かったな、娘。お前が姪になるのは不本意だが、致し方あるま
い」

ん？

ちょっと？

「何かさ」

「なんだ」

「まるで周囲に反対された結婚を、乗り越える昼ドラのヒロインみ
たいな役所なんだけど」

別れた恋人が妊娠したから認知してくれて迫ってきたりとか、ヒロインの母親が反対するのは、実は二人が半分だけ血の繋がった兄妹だとかいうドロッドロしたやつね。

そのヒロイン、と。扱われるには不満がある。

「ヒルドラ？」

「なんかゲームの敵キャラみたいなの発音じゃなくてだねえ。ええと、まあそれはいいや」

じゃなくて。

「そもそも、愛し合ってもないんだから、この立場が可笑しいって言うてんの」

はっきりにきっぱりと言った私。

おっちゃんにはげらげらと笑い出し、ラグラスは頬を引き攣らせたまま。

テーブルに額をしこたま打ち付けた。

拘泥の妹（拍手御礼文2・短編）（前書き）

本編の数か月前。

小松家次男の一人称です。

拘泥の妹（拍手御礼文2・短編）

俺がシステムエンジニアという職種に就いたのには理由がある。

俺の仕事は基本的にパソコンに向かってシステムを組み上げるだけだ。企業から依頼されたシステムを淡々と仕上げていく。

うちくらいの規模になると、その仕事を取ってくるのは営業部の人間で俺には関わりがない。

俺は、人と関わる仕事をしたくないのだ。

自分で言うのもなんだが、見目が良い部類に入る俺には女からの面倒な誘惑が多い。社内だけでも合コンの誘いだの個人的な誘いだのは多いというのに、営業なんてやっていたらこの比ではないだろう。自分の容姿に自信を持った美人なんてのは、こちらが乗ってくるのがさも当然と誘惑してくるのだが本当に勘弁願いたい。そういう女は大概面倒で我儘。相手をしてもらはつきり言って疲れるだけだ。俺の好みは天然で可愛い子。ぽやぽやとしているのも良いが、飾り気なく笑う子が良い。

そう。

妹のあいのように。

七つ歳が離れていることもあり、あいの存在は妹というより娘に近いものがある。

父親もあいを溺愛しているが、俺はあそこまでの束縛はしない。ちよっと連絡が無いだけで騒ぎ出す、出張と称して修学旅行に着いて行こうとする。あれは異常だ。

あいの事は可愛いし心配もするが、基本的には信頼している。自分の理念を持って行動出来る、しっかりした子だ。女の子が絡むと人が変わってしまうのが難点だが：

「小松先輩、昼行きました？」
「ん、ああ、忘れてた」

作業に没頭すると時間を忘れてしまうのだ。ノッている時はこうやって声を掛けてもらわないと、休憩もせずに終業時間までなんてのも少なくない。

またですか、とっとと行って下さいと息を吐く後輩に促され、席を立った瞬間に携帯が振動した。

サブディスプレイには「あい」の表示。
俺は思わず破顔した。

「はいはい」

「桂くん、ごはんもう食べた？」

「どうした？」

「うん、あのね。桂くんの会社の近くに来てるんだけどね」

窺うような、甘えるようなその声に、俺は小さく笑った。

「この前言ってた洋食屋か？」

「凄い！何で分かったの?!」

「あいの事ならなんでも。今から下りるから、下で待っていてくれる？」

「分かった!」

じゃあね、と切れた通話。

通話時間を知らせた画面が消えると、笑顔のあいとチワワの待ち受けが表示された。先月末、納品間近だったソフトのシステムエラーで土日が潰れた俺に「回復呪文（ベホマ!）」というタイトルで絃が送ってきた物だが、実質かなり癒されるのでそのまま待ち受けにしている。

「先輩：彼女ですか？」

「さあ」

今の通話を言っているらしい。俺は意味有り気に、薄く笑って見せた。

「無茶苦茶甘ったるい声して！なんすか、その表情！俺にもそれくらい優しい指導をして下さいよ！」

「何言ってるんだ。十分可愛がってやってるだろうが」

「意味が違います！意味が！」

噛みつく後輩を笑い飛ばし、コートを手にした俺は、あいを待たせないようにと足早に部署を出た。

「待ち受けの女の子、超可愛かったんだけど…」

「やっぱり彼女居るんだ」

背後で聞こえた同僚の囁きに俺はほくそ笑む。最近しつこく言い寄ってくる経理部の子にまで噂が伝われば良い。

ドSのくせにと叫んだ後輩には残業確実な面倒な書類を押し付けてやると硬く誓った。

4. 美人襲来

モツツアレラとトマトのサラダをもごもごと咀嚼し、私は小さく息を吐き出した。

ざわざわではなく、がやがやと騒がしい有名チェーンの居酒屋は、年末のこの時期は地獄の慌ただしさである。

料理がまだだ、飲み物は、と騒ぎ立てる客を上手いこと躲し慣れた様子で頭を下げる店員。中々堂に入ったものだ。

それらをぼんやりと眺めながら、私は殊更に無関心を貫いていた。

「あいちゃん飲まないの？」

軽い声音と、酒と煙草の匂いに雑じるメンズ物の香水。私はこっそりと、それら全てに眉を寄せる。

カラーリングとパーマで痛んだ茶色が揺れながら私の視界を掠めた。覗き込む顔は今時の甘い顔立ちのイケメンで、メンズ雑誌の読者モデルをしていると自慢げに話していた。

だが、この程度のイケメンくんなら兄弟で見慣れている。身内自慢になってしまいが、このイケメンくんよりうちのイケメンたちのレベルが高いし。

更に言えば、あの我が儘王子のが恐ろしいくらいに男前で美人で。はつきり言って格が違う。

まあ、ともかく。こんなタラシの笑顔向けられても、何とも思わないというか。むしろ女の子の笑顔の寄越せとか思ってしまう。私はそっけなく口を開いた。

「未成年だから」

「ほとんどそうでしょ」

ちっ面倒臭い、と心中で口汚く罵って、私はぐいと烏龍茶を煽った。こんな事なら先輩に釣られるんじゃないかった：後悔先に立たず。

「こまっちゃん、忘年会行くよね？」

「んぐ？」

食堂で夕食を食べていた私の前に座った戸津田が唐突にそう言った。大きめのジャガ芋を目一杯頬張っていたものだから、直ぐには返事が出来ずもごもごと咀嚼する間、彼女は話しを続けている。

「舞先輩のグループと、うちのグループ。一緒に忘年会しようって言ってるんだけど、当然出るでしょ」

「ふぁふぁい！」

私は思わず立ち上がった。

舞先輩は健康的な美人だ。少し長めのショートカットに健康的な肌。引き締まった身体が美しい。

うちの大学にはサークルというものがない。軽音サークル、ではなく吹奏楽部。演劇サークルは近隣の大学生が集まって活動している。他所の女子大もこうなのか知らないけど、うちの大学は文化系で人数もあまり多くないからサークルも無いらしい。

なので、陸上をやっていた舞先輩は、一番近い大学の運動系サークルに参加していて、同じ学部でも滅多に顔を会わさない。凄く気さ

くで朗らかな性格らしい先輩は見掛ければ声を掛けてくれるが、それも週に一度あるかないかの頻度。

そんな先輩と飲み会だなんて。行かない理由が見付からない！

「やろうやろう！何処でやんの？あ、木村さんに頼んで、ここでやるってのは？！」

「ここじゃアルコールなんて持ち込めないでしょ？駅前居酒屋にしようと思ってる」

「アルコール要らない…」

「あんたはね！」

アルコールが入るのか…私が呑めないのは良いんだけど、酔った人間を介抱する羽目になるのが嫌なんだよね。…アルコール臭いんだもん。下手をすると、その匂いだけで酔いそうになる。

でも、舞先輩とゆっくり話せる機会なんてそうそうない。

私は小さく口を尖らせてから行く、と告げた。

うきうきと来てみれば、確かにそこに舞先輩は居た。居たのだが、余計な者もわらわらと居た。

「わー鳥谷久しぶりー！」

「よー戸津田」

戸津田と親しげに挨拶を交わしたのは、今現在、私の隣を陣取って親しげにしているイケメンくんだ。どうやら高校の同級生で、合コンのセッティングをしたのも二人らしい。

こんにやろう。騙したな！と横目で戸津田を睨んだが、にたりと笑って見せただけ。

私の背をぽんと叩いて、いい加減彼氏くらいつくりなよと囁いた。余計なお世話だ！

女の子に囲まれる合コンなら喜んで参加するが、残念ながらそうはいかない。大概はこうして好みでもない男に標的とされるのだ。

さっきから、俺モテるんだぜオーラをぎらぎらさせて、人の肩とか手とかにちょいちょいと触ってくる。じわじわ寄ってくるのであるからさまに距離を取るが、それも無視して寄ってくるのだ。

あーもう面倒臭い！

「あいちゃん、ほんと可愛いよね」

「そうですか？ 私よりあっち居る菜々ちゃんのが可愛いですよ。私としては舞先輩みたいな美人も良いと思いますけど？」

「っは！面白いなあ、あいちゃん」

こういう場で他の女の子を褒めるなんてのは、計算高い女がやりそうなものだ。言わなくてもご存知の通り私は心底そう思っていて、菜々ちゃんと舞先輩が同じグループで座って談笑しているその場に行きたくて仕方ない。それを分かっているから、彼は笑い出したのだ。

何度かあちらに行きたいと言ったのだが、彼女たちとはいつでも話しが出来るだろうと言って離してくれなかった。菜々ちゃんは同じ学部で大概一緒に行動しているから良いとしても、先輩とはあんまり話し出来ないから言ってるんだってば！

私はいい加減頭にきて立ち上がった。

「どこ行くの？」

「トイレ！」

鋭く言い放つと彼はケラケラと笑って手を離した。

こんな事ならラグラスの所に行っておけば良かった。

「ぼうねんかいとは何だ？」

「一々言い方が可愛いね、ラグラス」

きょとんと首を傾げる彼は小動物のように可愛らしい。形はでっかくて綺麗な男だというのに、物凄く純粋な生き物だと認識させられてしまう。

セージさんが煎れてくれたお茶をのんびりとすすりながら、私は左手で握ったフォークをくるりと回した。

嵐のような一日から三日経った土曜日。今日はバイトが夕方からで、木村さんと一緒にビオラへと来た。この世界がどうか言っても、もう仕方ない気がする。ちよつと開き直った。

「日本ではもうすぐ一年が終わるの。今年一年お疲れ様っていう飲み会だよ」

「飲み会とは？」

「規模の小さいパーティみたいなものかな」

ラグラスにとってのパーティがどんな規模だか分からないけど、やっぱり王族なのだから誕生日パーティでも国を挙げてのお祭りなんだろう。ささやかなパーティなんて、ラグラスには想像出来ないんだろうな。

「仲の良い友達とお酒飲んで、食べて、騒ぐ！それが飲み会！」

「お前……」

「あ、私は飲まないよ！食べて騒ぐだけ」

じつとりとねめつける彼に私は首を振った。一口も飲んでないのにあの醜態（というほどでは無いと思うけど……）を曝した私がそれに参加するのが信じられない、馬鹿かと言いたげな表情。

「だって！舞先輩が参加する飲み会なんて滅多にないもん！行きたいもん！」

鼻息荒く主張する私に、彼はまた女か、と嘆息した。

何その浮気性の彼氏を持った彼女みたいな台詞は！失敬だな！

「だから、参加するの！」

「飲むな」

「分かってるよ」

「分かっておらん」

ラグラスは唐突に唇を重ねてきた。微かに触れて離れると、無然とした表情をしている。その顔はこっちがしたい。

「セクハラ」

「お前は俺のものだ」

違うと言ってやりたかったし脈絡がないとも言ってやりたかったが、妙に機嫌の悪いお坊ちゃまに反論するのは気が引けた。これ以上機嫌が悪くなると危険だ。うん。

「アイ」

「ん？」

彼は名を呼んだ後、暫く無言で考え込んだ。そうして結局、無然とした表情のまま、羽目を外すなよと釘を刺したのだった。

化粧室で時間を潰し、あのイケメンくんをどうやって追い払おうか
と思案するが、良い案がちっとも出て来ない。

桂くんを迎えに来てもらおうかとも思ったが、年末までの金曜は付き合いで埋まってしまったと言っていた気がする。とすれば、今日も職場での忘年会か。あるいは友人たちとの飲み会か。

桂くんの会社はこの居酒屋からも近くて案外近くで飲んでいそうな気がするが、わざわざ呼び出す訳にはいかない。私が助けてを求めれば、恋人だろうが同僚だろうが友人だろうが、全て置いて来てくれるであろう桂くんは最終手段だ。出来れば召喚したくない。

コートは置いてきてしまったが、バッグは持ってきている。寒さを我慢してこのまま帰るのも手かと思うけど、残したイケメンくんのせいで空気悪くなっちゃうかなあ：

とりあえず誰かの近くに避難しよう。舞先輩の隣に、座布団持ってって無理にでも座ってやる。

決意してトイレの扉を開くと、すぐその壁に背中を預けて笑うイケメンくんが居た。

…最悪だ。

絶対、逃げられないように待ってたんだよ、もう：

「気分でも悪くなった？」

「イイエ」

「中々戻らないから心配したよ。行こっか」

嫌です。心底嫌です。

が、勝手に手を引かれて歩き出しては逃げようがない。これは本気で面倒臭いぞ。

「あ！電話！」

バッグの中で震え出した携帯を慌てて取って、私は笑顔で彼に謝った後に通話ボタンを押した。

「なにになに？どしたの？」

「うん、あいちゃん、今大丈夫？」

「うん。あ、紘くんちよっと待って」

一度携帯を離して、私はイケメンくんにも首を傾げて愛らしく見えるよう笑って見せた。

「先戻って下さい」

それだけ言うと、贅沢な広さの化粧室に戻った。
助かった！素晴らしいタイミングだよ紘くん！

「どうかしたの？」

「うん！今ね、友達に騙されて合コンに来ちゃったんだけどね、やたらしつこい男がいて」

「え？！なにソレ！大丈夫なの？！俺、迎えに行こうか？」

その過保護な言葉に私は小さく笑う。

年齢が一つしか変わらないせいとか、紘くんとは一般的な姉と弟という関係が成り立たない。学校も一緒になった事はないし（盲目な父親のせいだ）二人揃って甘やかされて育った感がある。

紘くんと私は友達、いや、親友みたいなものだ。

「大丈夫だよ。桂くんの職場近いし、何かあったら桂くん呼ぶから。」

それよりどうしたの？」

「絶対飲んじゃ駄目だからね……あのね、母さんのプレゼントなんだけど」

「ああ！そっか。もう直ぐだね」

声を潜めた紘くん。きっと自室で、近くに母さんは居ないのだろうけど思わず小声になってしまうのだ。何と言うか、あの母親なら何でも御見通し。全ての会話を聞かれているような気がする。

勘が鋭い、なんてもんじゃない。事務パートとか平凡な仕事やってないで、刑事か探偵にでもなれば良いのと思うほど。

「あいちゃん買物行く時間ある？俺、ちょっと無理そうなんだけど、桂くんは平日の夕方か日曜なら時間作れるって言ってるさ。大兄は今年も時間が空きそうにないって」

母の誕生日はクリスマス前の23日で、毎年、兄弟でプレゼントを選んでいる。警察官の大くんは年末が死ぬほど忙しいらしく、母の誕生日だけは何とか帰ってくるが、四人でプレゼントを選びに行けたのは大くんが高校卒業するまでだった。今年受験生の紘くんも大変そうだ。

「そっか。じゃあ、今年は桂くんと二人で選んでくるよ」

「うん、ごめん。宜しく」

「じゃあね、おやすみ」

「何かあったら直ぐ電話してよ？父さんと飛んでくから。おやすみ」

本当はもう少し時間を稼ぎたかったが、嘘がつけない紘くんがこの通話を母親に見付かってわたふたする図が見えたので速攻で切った。しかし、いいタイミングで電話をくれたものである。

彼氏から電話、これだ。これで牽制して早目に帰るしかない。

決意して戻った私を、あっさりと捕獲したイケメンくんは、うんざりするような笑顔で、あいちゃんフリーなんだってね、と言いやがった。

誰だ、と辺りを見回すと、戸津田がにやりと笑って見ている。間違いない。犯人はお前だー！と少年探偵並に指を突き付けてやりたかったが、それをして彼女が堪えるとは思えなかった。

うん、そうだけど？とか笑顔で言うんだ。

「さっきの電話、弟なんでしょ？仲良いんだってね」

名前を聞いていて、それを誰かに聞いたのだろうか。目敏い。いや、耳聡い？

「そうですね。うちの兄弟イケメン揃いで」

「そうなんだあ。会ってみたいな」

俺ほどじゃないんでしょと余裕綽綽な彼の笑顔にカチンと来たが、大人な私は引き攣った笑みを帰すだけにした。

写メでも見せてやろうか。

イケメンくん左隣に座らされた私のは、彼の右隣に居る戸津田を睨んでみたが、こちらを見ようともしない。

「小松ちゃん、飲んでる？」

「舞せんばああい！飲んでませんよ！」

舞先輩が私の左隣に移動してきて、私にグラスを掲げてきた。ほんのりと染まった頬が可愛くて、私はへらりと表情を崩す。

「飲めー」

「飲めないんです！」

「なにおこらあ」

私の酒が飲めないのかあ！とお約束な絡み酒な先輩が可愛くて、私はへらへらと相好を崩しっぱなし。

そこに調度店員さんが飲み物を運んできたので、私はトイレに行く前に頼んでいたオレンジジュースを受け取った。新人さんらしい彼女は、一々グラスと色を確認してこちらはフレッシュマンゴーで：えっと、梅酒の：いえ、とたどたどしい。それが何だか微笑ましくて私はグラスを掲げて機嫌よく先輩に笑いかけた。

「飲みますよ？ほら」

「ただのオレンジジュースで偉そうに！」

ケラケラと楽しそうに笑い出した先輩に見せるようにごくごく、と喉を鳴らして飲み：うおおおい！

「だ、大丈夫？！」

「こ、これ、アル、コール：」

思い切り噎せて、私は切れ切れに主張した。この前ラグラスが飲んでいたような恐ろしい程のアルコール度数ではないにしろ、アルコールに滅法弱い私にとってはこれだけでも頭がぼーっとする。缶チューハイほどのアルコールも入ってないだろうに。

「え？あいちゃん飲んだの？！」

遠くで聞こえたのは、中学から一緒の友人、香奈の声だ。私がアルコールに弱いのを知っている。

わたふたしていた新人さんが、わああごめんなさい！と叫んでいる

ようだが、過ぎた事はどうしようもない。普通のオレンジジュースより色が少し薄いな、と思ったんだ、とか今更言ったって。

「そんなに弱いんだ？大丈夫？」

「だいじょうぶじゃない」

既に舌っ足らずな自分にうんざりして、テーブルに左頬を預けた。ひんやりして気持ち良い。

覗き込むようにこちらを見詰めるイケメンくんは、可愛いねえ、とにんまりと笑った。

だからね、君よりイケメンを見慣れてるんだって。これで落としたと言わんばかりの笑顔を向けられても、どきりもしないんだって。

ああ、眠いなあ。

「小松ちゃん」

心配そうな舞先輩の声にへらりと笑う。どうしてそちらを向いて倒れ込まなかったんだ。ちよつと頭を起こすだけの動作が酷く億劫で、私はふぁいと間の抜けた声を上げる。

「あいちゃん、送って行こうか？」

いらない！送り狼、どころか、その辺のホテルに連れ込まれるに決まってるんだから。

「まい、せんぱ」

「ん？何？帰る？」

言っていないわあ！

叫びたいのに唇を動かすのも億劫で、瞼がゆっくりとスローモーシヨンのように降りてくるのが分かった。意識は意外とクリアなのに、身体は酷く重い。

完全に閉じた視界で、がやがやとした喧騒だけが身体を揺するが、それすらも心地よく感じられるからアルコールとは恐ろしいものだ。うとうとと睡眠を欲しがる身体に喝を入れてやりたいがそれすらも無理。

「あいちゃん」

耳障りだ、と眉を寄せる事が出来たが、声には出来なかった。気配が近付く。

「触るな、退け」

「な…」

「それは俺のものだ」

その聞き慣れた美声に、私は勢いよく身体を起こした。

怠惰を貪りたいと主張する身体は、先程までと違い案外あっさりと指令を飲んでくれたが、これは危機感の違いだろうか。

ここに居てはいけない男。

絶世の美人が、絶対零度の高圧的な空気を垂れ流し、こちらを見下ろして居た。

無表情の美貌は恐ろしいほどに完璧。

散々騒いでいた客たちはざわざわと先程までとは違うざわめきをこちらに向けていた。

なんだ、あの外人。

超美人！

背たけえ。

俳優かモデル？

こんな美人見たことない！

携帯携帯！

全く無関係の客たちはそんな事感で好き勝手に騒ぎ立て、見下ろされている私たちは哑然としたまま彼を見上げている。
アルコールなんてとっくに抜けてしまった私は叫んだ。

「何で?!」

「どうしても行くなってきかなくて」

「木村さん！」

またか！また、木村さんが甘やかしたのか！

無表情でーいや、不機嫌を貼付けた美人、ラグラスの背後からひよこりと顔を出した美女に私は鋭い視線を送ってみた。

が、ちっとも効果はなかったようで、木村さんはえへ、とかわいこぶって首を傾げる。可愛いよろしくしよう！

「女ばかりではなかったのか」

「私だって騙されたの」

むっつりと頬を膨らませた私を見て、彼はまあそうか、と納得した。私が無類の女の子好きである事を思い出したのだろう。ヒロインのピンチに現れた王子様にしては酷く機嫌が悪そうなのが難だけど、それを補って有り余る美貌に私は嘆息した。

「何で来たの」

「迎えに来てやったというのに、その態度はなんだ」

「来てなんて言っていない」

というか困る。死ぬほど困るんだけど。

横目で皆の反応を確認すると、ぽかんとラグラスを見ているのがほとんどだが、戸津田なんかはちらちらと訝しい視線を私に向けている。誰だこれは、と。その目が私に問いかける。

後の追及が死ぬほど怖いんだけど。

「あー、えっと、ラグラスくんだったっけ？」

「うえ?!」

木村さんの背後から現れたのは、困ったような表情の桂くんだった。ちよっと驚いたようにラグラスは振り返り声を上げる。

「兄上」

「うーん、せめてお兄さんにしようか」

「桂くん、そこはお前にお兄さんと呼ばれる筋合いはない、とか言うところだよ」

「小松ちゃん、ツツコミ所が違うから。もっとあるでしょ」

「え? 何で?」

どこが? と首を傾げたが、木村さんはもう良いわ、と諦めたように

息を吐いた。

「君が来てるなら、俺は必要なかったな」

「っていうか、桂くんはどうしてここに？」

「それよ、それ」

「え？なにが？」

一体、何を言っているのか。私は木村さんに首を傾げて見せたが、再び溜息を吐かれてしまった。

「お兄さんは、寮に連絡してきたの」

「あいと親しいみたいだったからな。場所をご存知かと思って頼ってみたんだ」

「ちょっと待って。紘くんから電話があったの？」

その問いに桂くんはああ、と頷いた。

えーっと、整理しよう。

私の身を案じた紘くんは桂くんに連絡し、桂くんは木村さんに私が居る所を聞いた。ただの飲み会だと思っていた木村さんは、私が合コンに強制参加している事を桂くんから聞く。それでラグラスもここに来た、と？

「そうそう、こっちに来ちゃ駄目！」

「えーっと、この子はこっちに居た訳じゃないんだけど…その説明は後でね」

「お前に酒を飲ませたのはこの男か」

冷ややかに言ったラグラスは高圧的にイケメンくんを見下ろしていた。

この居酒屋は開けた大部屋のようになっていて、テーブル毎の区切

りもない。僅かな段差を儲けそこで靴を脱ぎ、座敷に上がるようになってから、靴を履いたままで仁王立ちのようにしている長身のラグラスはそれだけで高圧的だ。元来持ち合わせている王族としての威光に加えて、凍るような空気を作り出している美貌。

「未成年にアルコール摂取させた訳？」

大人の色気と威圧を備えた桂くんは、目が笑っていない笑顔向けられているイケメンくんは真っ青になっている。

どうだ！君よりレベルの高いイケメンだろう！

私は密かに得意になって胸を張った。

「店員が…間違えたんっすよ」

「へえ」

やばい。

基本的に女の子には優しい桂くんだが、私に危害を加えた相手となると話は別だ。

「桂くん！不可抗力だよ！大丈夫、もう酔ってないから」

「それは俺たちが来たからだろう？」

「それはそうだけど…でも、来てくれたじゃない」

そう言って困ったように桂くんを見上げれば、寄せていた眉をゆっくりと戻して長々と息を吐いた。

相変わらず女の子に弱い、という呟きは聞こえなかった事にする。

「…店主を出せ」

冷やかなラグラスの声に、その美貌に呆けていた店員さんが小さ

く息を飲んだ。

空気を読めない人なのか、どこかぽんやりと彼の美貌を間近で堪能していた彼女の赤は、その声で真っ青へと変化する。

「駄目よ。ここは貴方の国じゃないの。小松ちゃんも無事だったんだから帰りましょう」

「知らん」

「小松ちゃん！」

「はいっ！」

強い口調で名を呼ばれ、私は同じように返答した。

木村さんの怖いほどに真剣な表情は見慣れぬもので、思わずしゃきんと姿勢を正す。

「もう大丈夫よね。立てるわね。帰りましょう」

それは有無を言わさぬもので、私はこくこくと素直に頷いた。桂くんは私のバッグを取り、店員さんに今後気をつけて、と念を押した。彼女は申し訳ありませんでした、と深く頭を下げる。

「靴どれ？」

「あ、そこの黒のパンプス…」

コートを手に立ち上がると、ぐいと腕を掴まれラグラスに引き寄せられた。勢いのまま硬い胸に鼻を打つ。痛い…

文句を言おうと思ったが、彼は冷ややかな美貌を貼付けたままイケメンくんを見下ろしていた。その迫力に思わず口を噤む。

「俺のものに触れるな。二度は無い」

背筋をぞつと悪寒が走る声音。怖くて俯いた顔が上げられない。肩を抱き込まれたままに靴を履かされ、残す皆にごめんの一言も伝えられないままに刺すような寒さの店外へと連れ出された。

「ラグラスくん」

その声に足を止めたラグラスに向かって桂くんは苦笑を浮かべた。

「あいにコートくらい着せてやって」

「あ、ああ。すまない」

そこで漸く私が薄着のままという事に気付いたらしかった。抱き込んでいた肩を離して慄然としたままに、コートに袖を通す私を見下ろしている。

なんていたたまれない空気。

「何もされてないな？」

「うん。しつこかっただけ」

「そうか」

ほっとしたように桂くんは白い息を吐いた。肩や手をやたら触られた、とは怖くて言えません。イケメンくんの命が無い気がする。

「送ってやりたいど、ウザイ社長が待ってるから戻るぞ。木村さんが一緒だからちゃんと帰れるな？」

それとも実家に帰るか？という問いに私は首を横に振った。

「木村さんと寮に帰るよ。心配かけてごめんね、ありがとう」

そう言って笑った私の頭をくしゃりと撫でて、柔らかな笑顔を浮かべた桂くんは木村さんに頭を下げた。

「ご迷惑をおかけしました」

「とんでもない。無事で良かったですね」

「過保護ですよ、御恥ずかしいです」

本当に恥ずかしいかと思っているのか怪しいものだけど。

じっと見上げると見慣れた笑顔が落ちてきた。

「じゃあ、おやすみ。風邪ひかないように気をつけろよ」

「うん。おやすみ。頑張ってるね」

木村さんに頭を下げ、ラグラスに向かって苦笑を投げるとまたな、と彼の肩を叩く。

またがないようにしたいのだけど、ね。

私は深々と息を吐いた。

4-4 (前書き)

お約束と久の趣味だけの小話4話、これにて終了です笑

九時を過ぎた駅前を通りは人で溢れている。既に出来上がった酔っ払いから、家路を急ぐ人々。そのほとんどが、怒りを露わにそこを進む金髪美人に目を奪われていた。

手を引かれながら、その背を見上げる。

さらさらの金髪までもが怒りを立ち上らせているように見えるのは、私の気のせいではあるまい。

私たちの背後からヒール音を響かせてついて来ている木村さんは何度目とも付かない溜息を吐いた。

彼がこんなに怒っているのは――まあ、確実に私のせいでもあるのだけど。騙して合コンに連れて来た戸津田も悪いが、でもやっぱり一番悪いのはイケメンくんだと思う。

嫌だって言ってるんだから、他にターゲットを変更すれば良かったのに、ちゃっちなプライドか、それとも本当に私が嫌がっていると分からなかったのか。まあ、なんにしろ、面倒な事にしたのはイケメンくんだ。

プライドをずたずたにされた彼も可哀相ではないかと思い、彼を責める気にもなれない。誰かを責めるつもりはないが。

とにかく、愚痴くらい言いたい。

好みでもない男にしつこく言い寄られ、面倒な自称旦那が迎えに来た私の身にもなって欲しい。女の子に囲まれて、楽しい飲み会になるはずだったのに。

このあと、ラグラスがどういう行動に出るのか。

それが私の身も心をも、酷く重くさせた。

いやいや。こんな事ではいけない。私は気分を切り替えるように、

ちゅうぶらりんになったままの疑問を投げる事にした。

「あ、ねえ木村さん」

私は足を止めて振り返った。彼女はん？と可愛く首を傾げる。

「さっき、こっちに居なかったって言ってたけど」

「ああそうよ。私がここに居ない時の電話は、転送するようにしてあるの」

「それって衛星通信とかそういう事？」

「あらっ聞きたいの?!」

木村さんの目がキラんと輝いた。あ、やばい。何かやばいスイッチを入れてしまった気がする。

「地球とビオラは銀河系すら違うから、衛星通信なんて届かないの。何個か衛星はいつでも使えるように弄ってあるのだけど。でね、あちこちの星に、出来るだけ生命体の居ない星にね、通信転送機器を設置してあって、でね、そ」

「あ、うん、すみませんでした。私が悪かったです。超文系でごめんなさい」

私が素直に頭を下げると木村さんは残念そうに口を尖らせる。

更に詳しく説明されても全く理解出来ませんから。それに、衛星を乗っ取れる的な怖い事も言ってたし。

知らない！私はなにも聞かなかった！

「まあ、とにかく、固定電話にかかってきた電話が、携帯に転送されるアレと思えば良いんですね」

「簡単に言えば」

「そんな物凄い不服そうな顔したって駄目だから！聞かないから！私の中では物理化学じゃなくて、理科で終了してるんだからね」

「勿体ないわねえ」

試験は丸暗記で乗り切った私に勿体ないと言わない。そんな知識は一切必要ない職種に就くんだから。

桂くんみたいな技術系の人は喜んで食いつく話だろうけど、私の聴覚と思考はそれを完全シャットアウトだ。カバの耳みたく、ぴたりと耳を閉じてしまえたらいいのに。

「で、向こうに居たら桂くんから電話があって、それでラグラスもついて来ちゃったんだ…」

「そうね。割と血相変えてたわね」

「どこがだ！」

「合コンとはなんだって聞くから教えたら、着替えを寄越せ、早く連れて行行って大騒ぎしたじゃない」

「しておらん」

「まあまあ、落ち着いて。えーっと」

私は窺うように彼を見上げた。

端正な顔は未だ怒りを浮かべており、怖いくらいに無表情を作っている。

「来てくれてありがとう。助かったよ」

私の言葉にラグラスはぴくりと頬を動かした。そして繋いだままの手を引かれ、広い胸に抱き留められる。ぎゅっと力を込めて抱きしめられて私はそっと息を吐いた。

何と言うか、わがまま駄々っ子だなあ。これで落ち着いてくれたならいいんだけど、まだ何かわがまま言いそうだ。

「帰るぞ」

「え？」

耳元で落とされた低い声音に思わず顔を上げ……なければ良かったと、私は心底後悔した。

蕩けるような笑顔。ゆるゆると口角を上げた彼の背後には後光が注ぎている。気のせいではあるまい。

私はくらくらりと揺れる頭で考えた。

何故ここでこの笑顔？

底辺を這っていたラグラスの機嫌を押し上げた、キラキラスイッチを入れたのは何だったのか？

っていうか、帰るってどこに？

それらを口にする前に私の唇はキラキララグラスのそれに奪われていて、なんで、の一つも口には出来なかった。

背後で若いわねえ、と呆れる木村さんの声に、心中で叫んだ救いを求める声は、当然彼女に届く事はなかった。

「で？あの美人外国人は何者なわけ？」

のどかな朝食タイムを邪魔したのは、どこか目の据わった戸津田である。私の前を陣取って、がしんと乱暴にトレイを置いた。

「木村さんと桂斗さんと一緒だったわよね？」

良いタイミングで現れた紗耶は、にっこりと微笑んでいる。中学からの友人である紗耶は桂ちゃんと会った事があるので覚えていたらしい。

戸津田は心底訝しげに私を見据え、むつつりと口を開いた。

「あれ、本当にお兄さん？」

「似てないって言われる」

「凄い色気のある男前だったもの！こまっちゃんのお兄さんなら、もっとぼやぼやした感じの草食系な人かと」

確かに、大くんと桂くんは見た目肉食系だよなあ。紘くんは草食系だけど。

「うちの兄弟は男が母さん似、私だけ父さん似なの。桂くんと弟の紘くんは、上手い具合に良いところ取りだけどね」

「是非紹介し」

「無理諦めて」

「紹介くらい良いじゃない！」

「無理よお。中学の頃から、兄弟は絶対紹介しないの、あいちゃん
は」

のんびりと納豆を掻き回していた紗耶が、間延びした口調で、ねえ、と私に同意を求めた。

「桂くんが徹底して、私の知人友人とは付き合ったりしないって言うたの。一人紹介したら他にも言ってくるだろうし、私に不利益な事は許さないってのがうちの兄弟たちな訳」

「綺麗な騎士さまたちに護られてるお姫様みたいだったよね」

「それは言い過ぎ。ともかく…父親と桂くんの過保護っぷりが凄くてね？きつと皆引くと思って、紹介したくないってのもあった」

「シスコン？」

「うん、まあ、多分」

桂くんの場合、過保護の対象は私だけでなく、家族全員なんだけどね。そこまで説明するのも面倒で、私は言葉を濁らせて味噌汁を飲み干した。

「で？あの外国人さんは誰？」

紗耶の怖いところは、聞いてほしくない事をずばっと笑顔で聞いてくるとこだ。しかも、上手く話題をすり替えられたな、とほっとしている時に。おっとりとした外見からは想像も出来ないほどの毒舌でもある。

私はありとあらゆるシミュレーションを行い、あれの事を上手くごまかす用意をしてあった。

してあったが、紗耶に問われると背筋が凍るようだ。

「木村さんの知り合い」

「の割にこまっちゃんと親しげだったよね？」

「俺のものに手を出すな」

にっこりと笑顔で続けて、紗耶はぽんやりとカッコイイねえと呟いた。

ちっともカッコ良くない。あれは駄々っ子で、俺の玩具に触る的な癪癪を起こしたんだよ。所有物扱いなんだってば。

「いつから付き合ってたの？」

「付き合っていない…と言いたいところだけど、一方的に気に入られててね。結婚して国に連れて行くって聞かないのよねえ」

本当、困った子だ。

「結婚?!」

「しないよ」

「あんた馬鹿じゃないの?! あんな美人が結婚してくれて、もう二度とないわよ!」

「私、結婚相手には安らぎと安定を求めたい」

「結婚に失敗したお婆さんかあ!」

「余所で子供作ってきそうな旦那より、浮気の心配のない誠実で穏やかな夫! 勿論、煙草とギャンブルは許しません」

「だから、あんたの主張、若さがないのよ! 浮気されても仕方ないくらいの美人なら良いじゃない」

「余所で平気で子供を作れるって、どこの国の人?」

う…紗耶の鋭いツッコミに、私は頬を引き攣らせた。海外文化はよく知らないが、一夫多妻制や愛人がまかり通る国は先進国にはなさそうである。

口を滑らせてしまった、と後悔しても遅い。

「いや、男前なら皆しそうだという、ね? 深い意味はないよ」

「ふうん」

「そいえばさ、私帰った後大丈夫だった？」

訝しむような視線を向けられ、二人の追及を反らすように口を開いた。

「大変だったわよ！皆一氣に酔いが醒めちゃってさ。鳥谷は物凄く苛立ってるし。そりゃ、自分よりレベルが高い男が二人も出てくれば、テンションも下がるだろうけどさあ」

鳥谷って誰、と口にしそうになったが、内容からしてあの迷惑イケメンくんの名前だったんだろうな。うん。ちっとも覚えてないというか。

「そもそも、合コンだって言わなかった戸津田が悪いんじゃない」

「それはこまっちゃんが行かないって言うと思ったから…可愛い子連れてくれば奢りっていうし」

「あんたねえ…」

「それは悪かったわよ！」

開き直ってしまった戸津田の横で、紗耶がでもお、とやはり氣の抜けた声を上げた。

「あいちゃんがイケメンくんにも見向きしないのは、周りにお兄さんみたいなイケメンが居るからなんだと思ってただけど、更にレベルが違う美人さんに求婚されてるからだったのね」

本当に女の子しか見えないのかと思うところだったよお、と微笑んだ紗耶に悪気は無い…と思いたかった。

「うお？」

ディスプレイに表示された珍しい文字に、私は一人声を上げた。こちらから掛けることはあっても、掛かってくる事はほとんどない。何事だろうか。

「もしもし？」

「元気？ 風邪ひいてない？」

「うん、元気だよ」

「もう冬休み入ったのよね？ いつ戻って来るの？」

「えーっと、週末までバイトが入ってるから、来週かな」

こんな事を気にするのは珍しいなあ。私は首を傾げてテーブルに置いてある手帳を開いた。

週末にはバイトと――面倒だけど、わがまま王子に逢いにいかなくてはいけない。行かないとこっちに来て、更に面倒な事になるので仕方ない。

「じゃあ」

妙に勿体振って間を取って、言葉が続けないことにも首を傾げる。ずばっと物を言う普段の素振りからは考えられない。

「綺麗な彼氏も、勿論一緒よね？」

その言葉に私はあんぐりと口を開き、勢い良くローテーブルに額を打ち付ける。

力の抜けた指から滑り落ちた携帯がごとりと音を立てた。

長い、長い間、私は気を失っていた――のなら良かったのだけど。残念な事に意識はしつかりと床に落とした携帯に向かっており、だらだらと流れる冷汗を何とか拭いた。落とした衝撃で通話が切れたら、むしろ携帯が壊れたら良かったのに、私の名を呼ぶ聞き慣れた声が響いている。

覚悟を決めて携帯を拾い上げると息を吐いた。

「あい?!」

「はい! なんでしょう母さん!」

「凄い音がしたけど、どうしたのよ」

「ちよっと手が滑っちゃって…」

ついでに額をしこたま打ちました。瘤が出来るんじゃないかというくらい痛いです。

「母さんは耳が痛いんだけど」

「ごめんなさい…えーと、で? 彼氏って?」

綺麗な、が付いた時点で誰の事だかは判断出来るのだが、ちょっとしらばっくれてみようとかいう悪あがきだ。

「何を恍けてるの？ 桂から聞いたわよ。父さんに知られる前に、ちゃんと紹介しておくべきだと思うわ」

こちらの反応を楽しむ母親の声音は実に弾んでいる。うううう。口止めするのを忘れていた。

桂くんは自分からべらべら喋る人間ではないが、聞かれた事には嘘を付かない。特に、母さんに嘘をついても直ぐにばれてしまうので、基本的に小松家では母親に嘘をつく事はない。いや、出来ないが正しい。

因みに、父親には面倒だから黙っておく、という選択はしょっちゅうだが。

きっと「あいは彼氏の一人も出来ないのかしら」とかいう母親のぼやきに、桂くんは何の含みもなく「綺麗な彼氏を連れてた」とか言っただけに違いない。

「∴都合聞いてみる」

無職と変わらない家出王子に都合なんてあるとは思えないけども。

「楽しみにしてるから！」

母さんの弾んだ声とは裏腹に私の心はずぶずぶと沈んでいった。

「…木村さん？ 木村さん？」

私の言葉に木村さんは完全に固まってしまった。

手には煎れたてのインスタントコーヒー。それを唇に着けたままに固まってしまっている。

ラグラスを家族——というか、母親に紹介したい、と言った瞬間に固まってしまった木村さんは瞬き一つしない。

…生きてるよね？

不安になるほどに微動だにしないものだから心配になってきた。

「き…」

「駄目無理駄目駄目！」

うお。びっくりした。

いきなり両目を見開いて、コーヒーが入ったカップを置いた木村さんはずいと身を乗り出してくる。

「駄目三回も言ったねえ」

「最近、ギリアに政府から接触があったの！ 大人しくしとけって言われたばかりなのよ？！」

「あーそれは大変ですねえ」

「何を人事のように…バレたら困るのは小松ちゃんよ？！ 政府に連れてかれるんだからっ」

「いやあ。出来れば平凡な人生を過ごしたいのですが」

「無理無理無理無理！」

「そんな力いっぱい否定しなくても」

へこむんですが…

「とにかくあの子を会わせる訳にはいかないわ！どんなボロを出すか…」

「母さんになんて言おう」

「そこは大丈夫よ。私が行けばいいの」

「え？」

うーんと腕を組もうとした瞬間。

にこりと妖艶に微笑む美女が、きらきらと輝く金髪美人へと変化した。

そうか。その手があった。

緩く微笑む美人は本物のそれより柔らかでえもいわれぬ色気を感じる。中身が美女？だからだろうか。

僅かに持ち上げられた薄い唇は意地悪く笑みを作る。

「…木村さんが行ってくれるの？」

「ああ」

当然だけど声も変化してる！

意識して作っているのだろうけど、面白そうに私を見下ろす青い双眸に宿る光はラグラスのそれと同じに見えた。

ずっと伸ばした長い指で私の頬を撫でて、小さく首を傾げる。薄い唇は勿体振ってゆっくりと開かれた。

「お前の為ならば」

その声に思わず撃沈した。

木村ラグラスは物凄い破壊力を持っている。敵う気がしない。

「どうどう?! 仕種とかはラグラスっていうか、ロベリアを参考に
したんだけどねー」

「ラグラスのお祖父さんだっけ?」

「そうー! 凄く色気があったでしょ?」

「っていうかさ木村さん。その姿でその喋りは勘弁して下さい」

どこか楽しそうな木村さんに、私はうんざりと言い捨てた。

「お前何か隠しておるな?」

「うえ?!」

人の顔を見るなりそう言ったラグラスに、私は驚愕に顔を歪めた。
ちよつと待て。私どこか変だった?!

木村さんは私と同じように顔を引き攣らせていて、思わず顔を見合
わせる。

「ほう。二人で企んでいるという訳か」

鎌をかけるといふよりは確信を持つていう彼に私は恐怖すら感じてしまう。何なんだ、この王子は。

「何それ」

木村さんはしらばつくれるつもりらしい。腕組をして高慢に顎を上げた。

「顔見るなりなに言ってくれてんの？何？企むって。訳分からないんだけど」

「その表情だ。俺に黙っていたい事、騙そうとしておる事があるだろう」

「な、なんで？エスパー？！」

「ちょっと小松ちゃん！黙ってなさい！」

しらばつくれる気満々の木村さんは私の口出しを禁じようとしている。とりあえず、私はぐつと唇を引き結んだ。黙っていても顔に出るタイプなので、あまり意味はないと思うのですけど。

「何を企んでおる」

「企んでなんかいないわよ。まあ、そのうち教えてあげるから、今日のところは我慢なさい」

「お前に指図される謂れはない」

「可愛くないわねえ。良いのよ？今すぐ小松ちゃん連れて帰っても」
「お前だけ帰れ」

「んもお可愛くない可愛くない！」

「煩い、帰れ」

木村さんをうざったそうに押し退けて、彼は私を見下ろした。感情の见えない綺麗な青は私を罪人に仕立て上げている。

「ごごごめんなさい！」

「小松ちゃん?!」

「だって、だって木村さん! 私、嘘つくの苦手で」

「嘘じゃないわ。終わるまで黙ってだけ」

「だってえーこの、人を殺せるような視線! っていうか、なんで企むとか」

「落ち着いて! この子は人の変化に敏感なのよ。ちょっと視線を逸らしただけでそういう事言うんだから」

言われて、逸らしていた視線ちらりと上げる。

何かも知っている、全てを見透かした青は奥深く揺らめいていた。

「王子」という肩書の言葉だけですっかり忘れていたのだけど、彼は人の上に立つ人間である。全てを受け入れる、と言わんばかりのその表情。

その迫力に私は床に膝を付いた。

「うえええーん! ごめんなさい!」

「小松ちゃん!」

だって無理だよ! こんな事なら、実感に帰るまで来なければ良かった。言わなきゃ気付きもしないはずだったのに。

ふと。目の前にサラサラ金髪が揺れた。こちらを覗き込む青は先程とは違い柔らかく緩んでいる。

ふわり、と微笑むそれはあまりに甘やかで神々しい。緩く抱き寄せられ、私は彼を見上げた。

「話せば楽になろう」

「ありがとう、ラグラス…」

「騙されちゃだめよー!」

私はあっさりと陥落した。

背後では木村さんが何やら叫んでいたのだけど、私の耳には届かなかった。

壮麗な姉（拍手御礼文3・短編）

金の髪は光り輝き、透明感を肌は滑らかな肌は陶器のように輝きを放っている。整った面差しは文句の付けようもなく完璧で、嵌め込まれた対の青色は宝石のようだと謳われる。

彼の姿を視界に入れば、それは燦然と輝き出し、誰もが眼差しも心も奪われた。

神が遣わした美の娘よりも美しい。

その少年は神が創造したものの中でも、群を抜いて美しい、稀有な存在だった。

「ラァ」

愛称で呼ばれ、その綺麗な少年はむっとり唇を尖らせた。

振り返れば少年に良く似た美女がやんわりと微笑んで手を振っている。少年より僅かにふっくらとしたばら色の頬と、端がくいと上がった愛嬌のある口元が印象だ。

「いくつだと思っているのですか。いい加減にその呼び名は止めて下さい、姉上」

「何を言っているの。貴方はわたくしの可愛いラァでしょう」

この人に何を言っても敵わないのを少年は嫌というほどに理解している。小さく嘆息してから何用でございますか、と眼を細めた。

「まあ、用が無ければ声を掛けてもいいけないのかしら？」

「姉上」

「まあまあ。綺麗な顔をそのように歪めては、お母様が悲しみますよ」

貴方のお顔が大好きなのですから、と続けた姉に何を言っても仕方ないのだ。

理解はしていても、まだ少年の彼にはそう簡単に納得が出来ない。

三つ年上の姉は、今年隣国に嫁ぐ事となっている。正式な婚姻が決まった頃から更に美しさに磨きが掛かったと言われている彼女も、当初は数える程しか顔を合わせていない婚約者に、国に不満を抱いていたようだった。

あの国とは美的感覚が違い過ぎると騒いでいた姉の我が儘にも、にこにここと緩んだ微笑みで、貴女の好きになされれば良いと言ってくれた婚約者は温厚であると同時に、姉を上手に誘導出来る凄い人だと密かに尊敬している。

まあ――あの原色を貴重とした服装だけは受け入れられそうにないが。

今では、その趣味の悪さも可愛いと言つてのける姉は、彼を相当に気に入っている。我が姉ながら、理解出来ない趣味だ。

「今日はフィリカ殿下がいらつしやる予定では？」

「お見えになるのは夕刻になるそうなの：スターチス様の機械を、早くあちらに付けて頂けないかしら」

「あれの力など、頼りにすべきではありません」

「全く、貴方は真面目で可愛いわねえ」

こういう場合、可愛くない、と言ふべきではないだろうか。この人の思考は突拍子がない。

「変に拒んでも、あの方がロベリアに加担するのを辞める訳ではな

いのだから、もっと楽に考えなさい」

「そうは言われましても。俺はあれが嫌いだ」
「ラグラス」

ぞんざいになってしまった言葉遣いを窘められたと思った少年は、小さく肩を竦めた。

だが、姉はにっこりと笑って言葉を続ける。

「使える物は何でも使っておくべきでしょう？」

この姉が自分の身内で本当に良かった、と少年は頬を引き攣らせた。手放しの味方ではないのが、痛いところだと。小さくごちたのを、姉が聞き逃すはずもなく。

少年は、姉が自分に向ける愛情とやらをくどくどと夕刻まで聞かされる羽目となった。

「あいちゃん！」

「ぎゃあああ！出たあ！」

実家まで後数分。幼い頃に遊び馴れた近所の公園前で、出会ってはいけない物体Xと遭遇してしまった私は絶叫した。小さな子供を遊ばせていた奥様集団が危機を感じて子供の身を確保に走っている。えーっと、申し訳ありません。

「そんな害虫でも出たかのように…」

私と変わらない、男性にしては小柄で細身の身体を竦めれば、Xは更に小柄に見える。

何だか可哀相だからと仏心を出してはいけない。こいつは、こういう仕種が自分の魅力を如何に発揮し、人を手管する術を知っているのだ。

「害虫以外の何者でもあるもんか！帰れ！家に帰れ！」

「僕をストーカーみたいに言うの？」

「ストーカーより質が悪いっ。父さん味方に付けたって無駄だって、いい加減気付きなさいよね。ほんっつと質悪い！」

うちの家長は建前父親だが、実は、もなにも、一番の権力者は母親だ。誰も逆らう事が出来ないのを親しい人間なら誰もが知っている。こいつがその母親ではなく父親に取り入っている理由はただ一つ。父親と一緒にあって、私に近づく異性を排除するためだ。

私が嫁に行くのを絶対許さないと言っている父親だが（産まれた時からどころか、性別が分かった時から言っていたらしい。流石の私

もドン引きしたわ、と母さんは言っていた。私も勿論ドン引いた）この害虫のことは認めている。婿養子に入って、実家から出ないと約束しているからだ。こちらの気持ちも都合も考えず、勝手な男どもだ。

「っていうか、どうして私が帰ること知ってるのよ！盗聴でもした訳？！」

私が声を荒げると、遠巻きに様子を窺っていた奥様集団が、ストーリー？ストーリー？通報する？と囁き合う声が聞こえてきた。まずい、騒ぎ過ぎた。

「違うよ！おばさんから聞いたんだ。あいちゃんが美人の彼氏を連れてくるから、いい加減諦めろって…」

母さんか…！

「でも、僕…」

しゅんとうなだれた彼は、大きな双眸を潤ませて上目使いにこちらを見遣る。まさに愛してくれと訴える子犬。

普通の女の子なら母性を擦られきゅんきゅんしそうな仕種だが（こいつの場合、男も手玉に取る。恐ろしい子！）私には産まれた時から備わっている強力ワクチンがあるのだ。

ふん、と鼻を鳴らすと、ばしっと脳天にチョップをかましてやる。

「あんたと結婚することも無ければ、付き合うことも無い。絶対に、何が起きても、死んでもない」

「あいちゃああん」

鬱陶しく、私の腕に縋り付こうとした彼を、誰かの手がひよい掴んで投げた。ずべし、と崩れ落ちた彼を痛そうだなあと見下ろす。強烈な登場でラグラスの存在をすっかり忘れてた。

「何なのだ、これは」

綺麗な顔をちよつとだけ引き攣らせ、ラグラスは彼を見下ろしていた。何だか汚いものを見るような目つきなのは、まあ、これ相手なら仕方ないと思う。

「従兄弟の健太郎」

「は？」

怪訝に歪められた美貌は、何度か私と彼の間で視線をさ迷わせると、うむ、と低く唸った。健太郎は予想を超えるラグラスの美人っぷりに呆然としていたといったところか。

「確かに、よく似ている」

男のこれと似ていると言われるのは複雑だが、私が父親似だから仕方ないのだろう。似ていると言ったラグラス自身もどこか複雑そうなのは何故だ。

「健太郎の父親とうちの父親、双子なの」
「ほう」

「私も健太郎も父親似だから、似てて当然というか」

「桂殿は似ておらぬが、母上似か」

「そうね。そっくりってほどでもないけど、基本母さんに似てる。ラグラスはお父さん似だっけ？」

「ああ」

お姉さんもそうだよなあ。いやあ、やはりこの美貌は女性のものであるべきだ。勿体ないラグラス。残念ラグラス。しみじみと残念がっているとむにいと頬を摘まれた。

「何やら失礼な事を考えておるだろう」

「んひゃここなひ」

何で分かるんだ！エスパーかつ！

ラグラスの能力は底知れないというか、王族ならではの読心術が恐ろしい。

「あいちゃんに酷いことするな！」

ラグラスの腕を払おうと飛び掛かった健太郎を、彼は私の身体を抱き込む事で避けた。

すかつという音がしそうなくらい空を切った健太郎はそのまま地面に突っ伏してしまう。痛い…これは痛いぞ。

「あいちゃん…」

「そんな眼で見るなっ」

顔を上げた健太郎は可愛い顔を泥だらけにしてこちらを恨めしげに見詰める。だから、そんな捨て犬視線をしても無駄だから！

抱き込まれたままに冷ややかな視線を落としていると、健太郎はわあっと大袈裟な鳴き声を上げた。

「あいちゃん…そんな顔だけ男が良いだなんて……！」

「いや、別に良いとかじゃなくて」

「酷い！僕はずっとあいちゃんしか見てないのに！」

「違う女の子と歩いてるのを五回は見たけど？」

「それは、あの、ほら、ね？」

「どの娘も私によく似てたらしいね？」

「それはほのの」

何だほののって。じつとりとした視線を落としたまま、私はきっぱりとした口調で言ってる。

「この、変態」

「違うんだぁあああ！」

爽やかな土曜の午前。

健太郎の泣き叫ぶ声が公園に響き渡る。それを指差す子供に、見てはいけません！と子供の両目を隠す奥様方。

通報されないうちに帰れよ、と言いつつ、私とラグラスはその場を後にした。

「何だったのだ、あれは」

騒ぎ疲れた私たち（正確には私だけ）は近所のコンビニで飲み物を買って、その裏にあるこじんまりとした神社の境内で休んでいた。

空気は冷えるが風は吹いてこない。

火傷しそうなくらいに熱い缶のカフェオレをちよつとずつ口にしていたラグラスは、今更ながらに当然な問いを投げた。

「単なる馬鹿。私と結婚するとか豪語しておいて、他の女の子と付き合えちゃうような馬鹿」

あいつがどこことなく私に似た彼女を連れているのに何度遭遇したか：それだけではなく、その光景を見た友人知人に『あんた彼氏出来たんだ』なんて迷惑な勘違いを何度されたか。

別にそれで傷付いた事などはつきり言っていない。

気持ち悪いと思う程度だ。

だが、殺意さえ覚えた事が一度だけある。

それは忘れもしない。あいつの家に家族で遊びに行った中三の夏。あいつの部屋で、私によく似た女優が出演しているＡＶを発見した時だ。しかも同じ女優のばかり六本も。

（多分、出てるやつ全部だったのだろう）

私はＤＶＤをばつきり折ってやろうとしたが怒りに震えて力が入らず、代わりに長兄の太くんがばつきりとやってくれた。桂くんは残骸を笑顔で不燃物に放り込み、健太郎も粗大ごみ扱いで放り出したっけな。

今となってはしょっぱい思い出だけど、思春期の私には相当な打撃を与えた。それ以来、健太郎は害虫扱いである。

「アイも迷惑な血縁者を持ったのだな…」

「そうだねえ」

何か同情されてる。

この場合、君は健太郎に嫉妬とかすべきなんじゃないかな？とか思っただけど、されても困るし何と言っても馬鹿馬鹿しい。

実家に着く前からこれじゃ先が思いやられるよ。
私たちは、同時に深く息を吐いた。

5-3 (前書き)

またもお久しぶりです。あい、覚えて…ますか？古

「まあまあ！いらっしやい彼氏くん！」

満面の笑みで迎えた母親に、ラグラスは借りてきた猫のように――いや、あれはあれで結構暴れるのだ。友人が家に連れてきた時に引っ掻かれた手痛い記憶が甦る――優雅に微笑んだ。

「本日はお招きありがとうございます」

「日本語お上手ねえ」

「はい。両親が日本最顶层で、幼い頃は名作アニメーションの代わりに時代劇を見せられていました」

スラスラと設定通りの返答をしたラグラスは柔らかに微笑んだ。

「本当に綺麗な子！あい、よく捕まえたわね！」

母さんはテンション高く、私の肩をばしと叩いた。痛いですが、母さん：

そんな私と母さんのやり取りを見下ろすラグラスの瞳が生温い。慈しむとでもいうのだろうか。いや、生温い。ぬるっぬるだ。

あれ？これだとぬるぬるぬめぬめしてそう。

「あいちゃんお帰り」

私がどうでもいい思考に支配されている間に、二階から降りてきた紘くんがにこりと笑っている。

「はじめまして、弟の紘です」

「はじめまして、ラグラスです。アイとは…」

「余計な事は言うなっ！」

私はラグラスの背を思い切り叩いた。

家族もラグラスも何をやっているのだと言いたげに、じつとり私を見てくるが完全無視を決めてやる。

玄関口で騒ぎたくなかったのだ、うん。

「お国がイギリスのと聞いたから紅茶を用意したの。お口に合うかしら」

「お気遣い、ありがとうございます」

母さんが置いたカップを音も立てずに手にしてから紅茶を一口、優雅に笑んだラグラスはとても美味しいですよと褒めた。

我が家の超庶民なりビングに金髪美人のラグラス。普通の家具店で買ったソファに座って優雅に紅茶を飲む金髪美人…なんて…浮いてる光景なのか。

ラグラス本人がこちらに来到ることになって、彼はこちらの常識をみっちり仕込まれたらしい。今の彼には日本の一般常識と母国という設定のイギリスの知識は勿論、変な知識も入っているみたいだ。気になった事とはことん追求するタイプらしいラグラスは良く言えば熱心な生徒、はっきり言えば面倒な男だった。気になった事があれば木村さんをとことん問い詰め、納得するまで解放しない。さっき会った木村さんは寝不足でふらふらしながら「若さ、怖い」

とうわごとのように繰り返していたっけ：

お陰で車や電車にもああ本で見たぞ、程度の反応で済んでいる。

昔のタイムスリップドラマで見たような『何だこの鉄の猪はー?!』
みたいな反応は起こっていない。

多少変な事を口にしても『イギリスの田舎貴族だから』で済ませな
さいと木村さんから指示されている。他の人が相手ならまあ、何と
かなるだろう。

ただ：相手が母さんでは、私は嘘をつくことが出来ない。話しの主
導はラグラスにお願いすることになるのだが、いらぬ事を口走りそ
うで怖いんだよなあ。

「で、で？ラグラスくんはずっとこっちに居る訳じゃないのよね？」
「そうですね。日本は素晴らしい所ですが、家を継ぐのが私の役目
ですから永住は出来ません」

おい。第一王位継承者のくせに家出したのはどこの誰だ。家を継ぎ
たくないって駄々っ子したと聞いているんだけど？

あたしはじつとりとした視線をラグラスに向けるが、彼は優しげな
笑みをあたしに向けた。テーブルの下では人の太股をさわりと撫で
ている。手の甲をぎゅむと捻ってやるが眉一つ動かさなかった。こ
のド変態め。

「イギリスに帰る時にはあいと別れるつもり？」

母さんのその声はひんやりと冷ややかで怖いくらいだった。こんな
声はそうそう聞いた事がない。

その声に怯む事なく、ラグラスは表情を引き締めた。青い双眸が真
っ直ぐに母さんを捕らえている。

「あいを国に連れて行く事、お許し頂きたい」

「はあ?!」

ちょっと待て! 完全に『お嬢さんを僕にください』発言じゃないか!

「あたし結婚するなんて言ってない!」

「お前は俺のものだろう」

「違う! あんたそのジャイアニズムなんとかしなよ!」

「何だそれは」

「だから、ジャイ…」

「ガキ大将の話は良いから」

母さんは溜息混じりに会話に割り込んできた。

「あい、彼のどこが不満?」

「不満とかいう問題以前に、あたし学生だし、結婚なんて考えた事もないし」

住む星が違うんだよ、なんて事は言えない。超現実派の母さんが、自分の目で確かめもせずそんな話を信じるとも思えなかった。

「あんたねえ…」

母さんは心底呆れたと言わんばかりの表情で深々と嘆息すると、私に向かってとんでもない発言をなさる。

「あんたの生涯で、これ以上の物件なんて二度と現れないから。ラグラスくんにしておきなさい」

なんと打算的母親!!

がくりとテーブルに顔を突っ伏した私の頭上で母さんは実に嬉しそ

うな声を上げた。

「いいじゃないイギリス。凄く素敵なお国よ？」

その発言に紘くんがあれ、と首を傾げたようだ。

「母さんイギリス行った事あったっけ？」

「うん。学生の時と新婚旅行で二回」

もう一回行きたいと思ってたのよねえ、と。

私はのそりと顔を上げて一人上機嫌な母さんを見遣った。

「母さん……」

「ん？」

「あっちで式挙げろとか言う？」

「うん！ ついでに旅行出来るわよねえ」

うわわわわ！ この母親め！ 娘の結婚を打算と己の欲望のみで許可しちゃったぞ！ 我が母親ながらほんと酷い！

「あい、部屋に行って二人で話し合ってください」

「ええええゝ要らな」

「よし、行くぞ」

「うえええ！？ 下ろせえ！」

突然私の腰を攫って軽々と抱え上げたラグラスは、母さんに一礼してからリビングを出た。

彼の肩越しに見えた母さんはにこにこ手を振り、紘くんはぽかんと見送っている。

「お前の部屋はどこだ」

「二階：じゃない！下ろしてってば！」

口を滑らせてしまった！ずんずんと階段を登るラグラスは、王子様らしい細身の外見からは想像出来ないが、私を抱えていてもふらくこともない。そこそこ鍛えているらしい。

二階に上がって一番奥の扉に手を掛けた。そこは確かに私の部屋だが、手前にはそれぞれ桂くんと紘くんの部屋がある。

何という嗅覚か！

ラグラスは私の身体をベッドに下ろすと覆いかぶさってきた。
危険！大変危険な状況である！救護班はまだかああああ！

「俺の何が不満だ」

ずい、とこちらに詰め寄ってくる迫力美人に圧倒された私は、ベッドにべたりと背を付ける。

いや、だって。

「ラグラスのこと、好きか嫌いかわれれば好きだけど、恋ではないというか、ね？」

「友人としての好意か」

「そうそう。ラグラスだって、意地になってるだけでしょ？」

この美貌に王子様という身分である彼を拒む者など存在しなかったのだろう。

それを私みたいな小娘：あ、いや、私のが年上だったつけ、が拒んだものだから意地になってる。しかも、最初に『キスは結婚の時に』と騙してしまったのは私だ。

私なんだけどさ。

「俺はアイを愛しいと思う」

.....

「はい？」

「共に歩むのならお前が良い」

「ななななな」

何を血迷っているのだ！頭おかしくなっちゃったのかいおい！

「ラグラ…」

「あい いろいろいいいい！」

どだどだと物凄い音で階段を駆け上がる音に叫び声。

それに私は凍りつく。

ラグラスは何事だ、と呟いて身体を起こした。この状況から逃げ出すチャンスだったというのに身動き出来ない。

「無事かああ！」

ドツタァーン！と。

何の躊躇もなく開かれたドアの向こうには物凄い形相をした父親が居た。

ああ、誰か助けて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2964j/>

A Life Is Mine !

2011年3月5日07時38分発行